

あるか明瞭でない。妻沼は熊谷の北で上野の國境に近い小邑である。釣魚を好んだのは多病であつたから養生法の一としてゐたので、「又愛_ニ花卉芳草_ニ常自培_ニ植庭園_ニ四時開落相次_トとも稱されるから生活に餘裕あつて、俳諧も消閑的に愛好したのであらう。氣が向けば旅に出掛けて、橋立では

浦島が釣竿ほしや夕すゞみ

と、好める一竿を思ひ起し、播州書寫山に詣でしは

三尺の松としよりぬ閑子鳥

と吟じ、紀伊の音なし川を眺めて

水はとく行に急がず溪の春

小さき感慨にふけつて高野山に登り、かねて望むところの大師の像前で剃髮し、歸庵の感想に
髮の塵剃てはじめて今日の月

と、かうして俳道に三昧する事となつたが、點者を以て生活したのでない。遊俳の境涯にあつて明治八年十一月十二日に歿した。享年六十一。

今朝見れば團扇焦たる蚊遣かな

もたれよくなりし柱や天の川

ついくと萩は穂に出て夕筑波

起出てさもおもひぬ薄氷

十五年をへて舜岱に逢事のうれしくて

嘶すこと聞事が皆とし忘れ

評するまでもなく観念的な小主観を出でないが、これらの句に徴して強て風流を街ふが如き嫌味の無いのを取柄とせずばならない。『五渡發句集』一卷、その一周忌に孝子焦字が春沙の序、爲山の跋を得て明治九年十一月出版したのである。秋田の御風、江戸の一具、由誓を悼む吟があるからその交際も知られるが、爲山とは同門で殊に莫逆の交りをむすんで居たらしい。

俳想の自由な見外の句

關東正風は逸淵、西馬系統と別に道彦から護物へ、さうして護物門の見外が明治へその俳統を

傳へたのである。見外は小林氏、圓藏を通稱として、俳諧には菊守園、東雲庵、人間世廬、重陽堂の諸號を使用してゐた。甲斐國郡内猿橋の人である。江戸へ出て護物の田喜庵に入門したが、護物の著で文政十三年板の『新々五百題』に

ふせ家へは戻る人なし星今宵 岐久守

とあるのが前號だとすれば見外二十四の時になるが、天保十四年板の『續梅文庫』に

起くの春や手をうつ肴所 見外

と見え、護物が文臺に裏書した蕉翁の「よく見れば薺花さく垣根かな」を發句に脇起しの歌仙第

三、

出代の葛籠を舟にまはさせて 護物

洗ふた桶の雫たりやむ 見物

此四句目以下に一座した頃が、その技倆を認められた成熟期であらう。弘化元年七月師護物に別れて

師の身まかりける日

身の秋やかたりも泣もつくされず

頗る哀切な句を詠んでゐる。日本橋石町に庵を構へ「明の鐘石町よりも立つ秋歎」の一句あつたが、弘化三年及び安政二年の再の火災に逢つて、深川に立退き、

かぐつゝ神の二度のいかりに草堂はさらに、手にふるゝ調度迄皆うしなひ、今は流れとゞま
るよすがさへなき深川のほとりに、しばらく假の栖もとめて

故園花散て梢に風をきく夕べ

かうした貞享蕉風の古調を擬するなどは此時代の人では破天荒と云つていゝ。「俳家古今墨蹟」には見外の住所を「東都室町浮世小路」と録してあるが、その晩年を知る故大夢庵千畝は「見外は日本橋本町の樽三左衛門の地内に住んでゐた。此の樽三左衛門は權現公を樽の中に忍ばせて、その危難を免れさせた功勞で、はかりの一手販賣を許された人であるが、見外はその店借で暮し向は樂のやうでなかつた。娘が一人あつたが、どうなつたらう」と私に語つた。見外の弟子と稱する菊守園菊外の話によると「その娘はお孝さんといひ、日本橋石町の象牙問屋渡邊半助の妻となり、今年は六十七になる筈で達者である」といふ事だつたが、私が此話を聞いたのは大正八年

頃である。鍋島侯の家中に見外の社中があつて、殿様から拜領した象の脛で造つた木刀を差してゐたと云ひ、その鞘になるところに

松島を見て曙を思ひけり
見外

といふ發句が刻つてあつたさうである。見外は好酒家で下戸の客にも必ず小い猪口をあてがひ、自分は大盃でぐいぐい呻つてゐたといふ同じく菊外の談話から『見外發句集』に

盃とれば興がり嬉しがられし卓池佛の百ヶ日といふ日

日に二度の酒さへ霜の雫かな

おそび岡崎の卓池亭で「日に二度の酒も不斷や梅の花」の吟があるから、卓池とは上戸仲間であり、卓池が一日二度づゝ酒をのむ癖などが思ひ合はされて事實と信じていゝ。見外の月並集は『槻弓集』の題で三十篇あまり板行になつたといふ。明治五年の秋、自選の『見外發句集』を菊守園藏梓で世に出し、翌明治六年二月二十日を以て故人となつた。『甲斐俳人傳』には年七十餘とあるが、六十七歳が正確な享年である。

門まつや宵のあられの吹たまり

少年行

芽柳や有明起の馬場がよひ
すて船の日向くさゝや落椿
とく起し目醫者の門の若葉かな
船の蚊のうせてしまふや汐たゝへ
疲れ鶉の手にイて明にけり
雨もりやいとどのあがる經机

越後海邊

おくり火や此ひと濱の竈數
米負ふて旅人來たり秋の山
汐擔桶を並べて門の秋のくれ
蟹が戸の掃寄松葉しぐれけり
落葉火や道つくろひの日勸進

こゝに抄出した句で見ても、見外の俳想は自由で描寫的印象的である事を知られよう。季題の約束に囚はれない。それでゐてその題にしつくり合つてゐる。句を詠めば必ずそれに主觀的な感想を托さなければ、しをりがないやうに思ひ詰めて、厭味に落ちるのを知らない宗匠にはかう卒直には詠みきれない。おなじ感想にしたつて師の護物を悔みて「身の秋やかたりも泣もつくされず」は慟哭して、身もよもあられない眞情が漲つてゐるではないか。絶えず行脚に出たやうであるから、机上の作とは同視されないところがある。體驗の作家といつていゝ。

見外の菊守園二世に就て『峽中俳家列傳』に「菊外老人其の後を承けて」とあるが、所澤の上喜山が點式一切を預つて、幹雄の口添で菊外が菊守園にならうとしたところ、喜山は承諾をあたへなかつたので、見外のむすめお孝のゆるしを受けて二世菊守園となつたのだと菊外は話した。千畝は「あれはにせものだ」と嘲笑してゐたから、菊外を正系とするのは問題である。菊外が「若いうち深川へ通つて、とう／＼入浸りとなつたので師匠が迎へに来てくれたが、菊守園の菊と、見外の外の二字を俳號に許してくれれば歸るといふと、二つ返事で承知したので菊外と號する事になつた」とも語つてゐたが、どうも臍に落ちない話し振りであつた。その菊外も近年八十を越

見左と嵐外十哲の可轉

見外の門から出て正式に菊守園となる資格のあつたのは、館林に居住した恒菴見左であつたが若くして歿した。横山氏、上野國山田郡新宿の人で、家を弟の菊崖に委ねて館林に移居し、そこで新規に産を起したのである。見左の發句集に、

明治六年二月、師身まかりけるを旅に聞て、取敢ず杖をもどして、菊守園に足をとゞむる事四
十日餘

物 足 ら ぬ 花 見 心 の 今 年 か な

とあるが、師跡をつがずに再び館林へ戻つたらしい。その後みき雄の明倫講社に入つて、明治八年俳諧教導職に補せられたが、その年も押詰つて十二月四日、三十あまりで若死をしてつた。みき雄の文に、

横山氏見左大人は此道に志し深く、常に業とするの營みありといへども、花にうかれ月に

嘯くの席を缺ず、廿餘里の行程を隔て、却て都下の友よりも親かりしを惜い哉明治八年といふ年十二月念四日、兼て犯されし病もなくて俄に黄泉の客とは成りぬと閑窓子より告來しければ、夢の如く幻の如くいふべき言のはもなかりければ

よみ直し見直し寒き手紙哉

みき雄

と見え、享年は明記してないが、句集の序に「三十餘年を期として」とあり、弟の菊崖が「人生七十古來稀也といふは敢て望むにあらざれど、未初老の齡にもならず、老父たる父に先立て黄泉の客と成給へば」と悲しんでゐる。「見左發句集」一卷、明治十三年弟の菊崖がみき雄の序を求めて板行した。

年立やみどりの空を雪のうへ
傘のうへやいつしかおぼる月

伊香保客中

閑子鳥日のさす山に雨のやま
かはるく昇る二階や鶴の籜り

雁鳴や透せば動く闇の雲

時雨るゝや晴るゝや月の夜もすがら

録する句數も乏しいが、誦すべき句も一向見あたらない。見外の衣鉢を嗣號こそしなかつたが傳へた一門人として備忘的に記しておくまである。

見外と同國の甲斐には嵐外十哲の如斯亭可轉が生存在した。見外とは別系統なので直接の交渉がない。可轉は明治十三年九月十日享年八十二を以て逝く。笛吹川の流域なる西山梨郡山城村油座の人である。河野氏、通稱は治兵衛、俳諧には如斯亭の外に好日軒とも號した。書家南岳として聞える一貫庵道尾に就て俳諧を知り、六庵嵐外の門に轉じたのである。「峡中俳家列傳」に擧ぐる逸話に、可轉、嵐外の教示に浴して數年にして、

豆植ゆるうちに退けり不二の雲

畔豆も田も植はりけり町續き

の二句を師に示したところ、嵐外朗詠する一再ならず、暫くして「嗚呼可轉、既に俳諧の骨髓に徹したり」と感嘆措かなかつたとあるが、春湖の回想に「老人、年壯りなりし比には富士にある

農家の農事をつとめ」と云ふので見ると、農家に育つてその觸目する景物をありのままに詠じたのが、嵐外をしてたまたま感動させたのであらう。嵐外は越前の人、吟遊して士朗に知られ、その推舉で可都里を頼つて甲斐に入り、人望を得て遂に生國は忘れられて甲斐の嵐外と呼ばれる事になつた人物である。嵐外の十哲とは通志、欽哉、道等、草也、菟焉、雲里、竹應、常盤、文谷、及び可轉の十人を指すのであるが、國人の評語に「俳諧可轉に句の雲里」と評さるゝ俳諧——連句の達人であつたといふ。

明治四年生き残つた十哲の一人で『俳諧類題集』六卷の編者通志からの文通に「遠くから聞いて眞上や時鳥」の句あり、一誦してその病みて再起を期しがたきを悟つて見まへるに果して然り、手を握つてなぐさむるのみであつたといふ挿話が『甲斐俳人傳』に掲げてある。孝子水西の板行した『藤衣』といふ追善集は見ないが、『可轉發句集』の春湖の序に「今茲八十二の壽にいたるまで專に吟じて閉斷あることなし。今や門葉の草國、左岳、寸法、半拙の四子、老人の家集をとり起して事すでになりぬ」とあるから、歿するその年に板に起されたので、可轉の句風はこれを以て充分察知される。

陽炎をものゝ次手に見て居りぬ

慈母五十回忌捻香

春ありて萌出る草のひと煙り
有るほどの寺に佛は生れけり
戸口からふねの出て行茂り哉
京入はいよ／＼けふぞ笠の蠅

三歳なる捨子を拾ひて

何處に有る捨兒の親ぞ生身魂
秋かぜや疊の上を吹そめる
あき風や掌拭て糊細工
ひとつ繼ぐ炭よきほどに碎けり
宿帳に付も寒さやひとり者

讀過圈點を附した句を抜いて見た。衰老の境に入れば、その衰老の生命が句中に閃めく筈であ

る。可轉のこれらに句にはうそがない。一茶の境地と内容的に似たところがある。ある程の寺に生れる佛や、京入の別れを告げる笠の蠅や、言廻しをかるく調子をかへさへすれば確に一茶になる。「宿帳に」のごとき「帳面に一人とつく寒さ哉」の一茶と同一の内容である。一茶の深刻さはないが、うそのないのが可轉のいゝ傾向で、同じく可轉の

空 番 に入 れて 戻 る や 月 と 梅

受 取 た 東 風 や 笹 子 の 吹 お ろ し

人口に知らるゝものゝ不純な技巧句よりは、こゝに擧げた句々に傳記作者は目をつく可きであつたと思ふ。

質屋と見番是佛と秀民

私の新東京座と呼ぶ通人の一派は香以の後に、阿心庵是佛を押し立て、永機の其角堂を支持した。是佛は齋藤氏、通稱を權右衛門といひ、谷中の質屋で舊江戸の諸家へ金用達をした上、前に書いたやうに町々の髮結床の株を所持し、大三河屋の旦那といはれた資産家である。俳號は英甫

剃髮して是佛と稱したが、その庵號の阿心庵は永機が引退後再び名乗つたほど、其角堂には大事な所縁のあるものだから、是佛を旦那俳諧とばかり貶しられぬ。宗匠として實際の腕を持つてゐたであらう。若く吉原や深川で「ばか」の限りをつくしたので、香以は十八大通として評判されたとすれば、是佛もその一人に必ずかぞへられたに違ひない。十八大通は二朱判吉兵衛の作と考證される大盡舞の歌詞に紀文の大盡風を唄つたのがもとであるから、香以を十八大通といふのは大盡舞の替唄にでも讀まれてゐる事と思ふが、もしさうであつたら大三河屋の何とか是佛の名もあげられてゐるだらう。是佛が香以に劣らぬ通人として持囃された一つには吉原の見番大黒屋秀民と相談して馬十連の掟をつくり、それへ八代目の團十郎や幫閑の櫻川善孝やが連判して大評判となつたからである。さん／＼遊びあきて元治元年二月十五日、かねて歸依する大慈院を戎師として剃髮したのが年五十の時である。

髪よ／＼汝は元來有想に着して多寡好惡を論ぜしも、今その根本を截斷して葛藤を放下せしむ喝

若草やこやしともなれ枯むぐら

是 佛

是佛の發句は笠仙の「恩」に掲ぐるところで見ると、香以の洒落はなくむしろ淡白に過ぐるが、その香以の辭世「あさがほやちよつと出なをる垣隣」の大悟を隨喜して

執着はなし朝顔のかけ流し

の如きその傳記に「佛學を好み」とあるを信とすれば、一切世事に無頓着なのを心境としたのであらう。

剃髮の吟

よく見ればおのが影なり朧月

牡丹に四山の飄心經の香合

七代目海老藏追善すりもの

接替てわりなき柿の臺木哉

明治三庚午の三月

菊五郎家橋の助六興行

目覺しう培出來て夏の菊

羅漢會

早飯のせて置いてわすれぬ扇かな

馬十春興

山里の春は來にけりこぶ雜煮

たあいな「あそび」中心の生活に香以の憂目も見ず明治七年四月二十日歿した。行年五十九。谷中妙經寺に葬る。

是佛のよき相棒として馬十連を發企した大黒屋秀民は片岡氏名は庄六、俳諧は永機門に入つて三吸庵、又は即庵と稱したが螺舎二世を嗣號し、秀民を以て通號としてゐた。新吉原角町で家號を大黒屋と稱する廓内藝者の取締で、俗に吉原の見番といひ「天明年間田沼侯御老中の時取立に相成候由」と『恩』に出てゐる。仇名を清元團十郎と呼ばれたのは、その容貌が八代目團十郎の佛を思はせ、その容子が清元延壽太夫(後ニ本兵衛ト云フ)に似てゐたからであるといふ。向島百花園にその小傳を刻した碑がある。

螺舎秀民者。四世大黒屋庄六。本姓片岡氏。江戸芳原人。

生於文政五年。好酒及佳刀。以任俠自負。又好讀書兼善。俳諧點茶。而茶儀則傳不味宗納法。俳句則奉晉子體格。入其角堂門。後襲晉子別號螺舍。家素富。風流瀟灑。所藏古器物。皆希珍也。云。以明治丁丑十二月二十一日。享年五十六歿。葬于山谷廣徳寺。三世螺舍孝節。茲建小碑。以表欽慕之意。

建碑者の孝節は登田氏、後に善哉庵を襲名したが、この碑に三世螺舍とあるから二世の秀民は古き傳系でなく、永機によつて其角の一號を授與された譯であらう。

四山瓢すりもの

名残 爐の臺目に残る薫り哉

梅幸助六

葉さくらに返るうき世も東哉

幸阿雜髮

うらやまし嚙な若湯の浴ごゝろ

香以墓參

目ざましき昔やけふの一しぐれ

馬十春興

腹ばうてつらく長き日也けり

平板な調子で是佛と同じく新東京座としての情調を發展させ得なかつたのは残り惜しい。

梅室の正系爲山の人物

俳諧教林盟社の社長として一代の宗匠と仰望された月の本爲山は、明治十一年一月十九日享年七十五を以て東京で歿した。關氏、通稱は永藏である。舊幕の左官御用で初號を千格とよび立机して俳諧師となるに及んで剃髪した。その後は御用があれば坊主あたりに丁髷のかつらを冠つて伺ひ出たさうで、家業の左官請負は幕府の瓦解するまで廢さなかつたと云はれる。千格の頃の發句は文政十一年の序ある『あみだがさ』に

題目の講中ふえる茂り哉

千 輅

といふ句が見え、一茶は生存中で同じく『あみだがさ』に句を寄せてゐるが、一茶と直接の交渉はない。文政十一年は爲山二十五歳である。この年あたりから千輅の名はぼつ／＼諸集に掲げられ、禾木の『今人附合集』には千輅と大梅や一具及び梅室と兩吟の歌仙を録してあつて、その存在は俳壇的に確認されて居つた。『今人附合集』は天保十一年の板本である。その翠年には八雲東溪輯、涉壁千輅校として『俳今人五百題』といふ小菊判で上下二冊本が板行された。千輅の名で出版したものゝ嚆矢であらう。梅室は文政五年京より江戸へ杖を引いて天保五年まで、檜物町から神田豊島町へ、そこから木挽町へ再三轉庵したが、江戸に居住したのでその門に入る便宜があつたものと思はれる。天保十四年には前に『梅室翁紀年録』を引いて記した如く「梅花正風園の扁額を江戸爲山に附屬」とあるから、梅室の正系として江戸における一門の統制を委任された譯である。弘化元年『今人五百題』の二編が梓行された。嘉永五年その三編が梅之本爲山輯として今人五百題集は十とせあまりさきつとし、天保かのとうしの春はじめて櫻木にのぼせ、其あはひわづかに桃くりのみとせを過、弘化きのえ辰のとし第二編を梓にちりばめ、柚子

柿のなるは八とせこゝのとせをへて、嘉永みづのえ子のとし三編をつゞり出す

と序言せる通り、いづれも同一體裁で三編まで續刊された。その年の十月一日、師の梅室は京都東洞院佛先寺下ルで永眠した。翌六年の五月、遅流、礪山の序跋を添ふて追善『かれぎく集』編成に際し、爲山は梅室の略年譜をつくり「こたび追善集成を隨喜して嘗そのあらましをしるして、もつて同志の人におくる、梅廼本爲山敬白」と附記して寄稿した。野鶴の『梅室翁紀年録』には「枯菊集のはじめに梅之本ぬしが年記の大概はしるされたれど」と爲山の作製した略年譜を参考した事を記し、野鶴及春松より門下に配冊した同文の添状に、文音所として江戸では中橋桶丁一丁目の梅之本のみをあげてゐるので、爲山が一門に重視され亡師のため盡力した次第が解る。

東京遷都は爲山が五十五の時であつた。急激な世變、開化の空氣に觸れて行くには年を取り過ぎてゐた。門人の乙彦が『俳諧新聞誌』や『俳諧手洋燈』を出版する尖端的な運動を第三者として傍觀せるかに見えたが、その超世間的な宗匠氣質を好む人々もあつて、桶町一丁目の月の本が類焼すると下總の鴨川から再築の用材を切組んで運搬し、二疊と六疊の簡素な庵を建てゝくれた。その人は周防椿山といひ、年中四五人の行脚を寢泊りさせ、行脚の間といふ一室を設けてあつた

さうだから、爲山のためにそれ位の仕事は恩に掛ける程でもなかつたらしい。明治七年教部省から俳諧教導職に補せられ、教林盟社の社長に推されたのも、爲山その人の徳望からで敢て策動する者があつたからでない。錦風居士の若い頃點取仲間であつた故曉夢庵連向氏は「爲山は左官でしてね。勢ひ肌のところがあつたと云ひます。不意の來客にもてなすものがないと、着てゐる羽織を脱いで娘に渡し、それを入質させて酒を買はせる風でした」と私に語つたが、確にそんな性格であつたらしく推察される。爲山の遺稿は自筆で『梅の本句集』二卷および序跋の類を書抜いておいた『月の本爲山集』二冊が震災前市場に出て、故遠藤蓼花氏が購入したのを通讀した記憶を持つてゐる。改造社の『現代俳句集』に爲山の四季發句三十句を寄稿したのは私である。爲山の發句集は明治早期の俳諧師を代表させる意味で出版する價値はあると思ふ。正確な傳記行狀を掲げた追善集位はありさうであるが今以て偶目しない。

今七部集の千輅は爲山

爲山の發句は前、中、後期に區分して見なければ公平な批評を期せられない。前期は千輅と號

した時代で文政より天保年代に涉つてゐる。天保八年の庚年編『今七部集』には千輅の名で入集してゐるので、先づそれから抄録して見よう。

啼 雉子に振むく雉子や草の中 (おちぼ)

山 吹や暮かけて又一けしき (おぼろ夜)

杜 鵑芥子のはらりとちりにけり (利根太郎)

人 かげとともに薄らぐ燈籠哉 (くり柿)

水 仙をつくり込なり葱ばたけ (いふり炭)

着ぶくれて年こそ迄になりにけり (おちぼ)

理屈から入つて句を拵らへる通弊を脱して、この時代の觀念的な境地から見てあく抜けたところがある。雉子の句のときはかなり複雑な描寫である。燈籠の句は評判がよかつたものか『すゝき苞』にも採られてゐる。消えなんとして瞬く燈籠をうすれ行く人の影に取りあはせたのが手柄と見られたのであらう。着ぶくれての句には技巧的にいやな粘りがなく、さうした境涯の老人らしさが淡泊に言ひ放たれてゐる。この傾向で進んだならば獨自な境地が拓ける筈である。

祖郷の『近世俳諧十家類題集』は弘化四年の坂本で蒼虬、梅室、卓池、鳳朗、由誓、一具、多代女、半月、祖郷及び爲山の十人を以て近世期——天保以後の俳壇を代表する作家と見てその句々を類題したものである。爲山の中期の俳風はこの中から抜き出して見ればそれで十分考察される。

あふれ井も今朝若水の釣瓶哉
青柳や雪になだれし門の縁り
淡雪や秣遣りたる桶のあと
はるの夜の屏風に掛し袴哉
川べりや向ひ合せに青簾
壁こぼつ埃りの中や今年竹
朝顔や凋みし垣に風のたつ
籬掛の日除むしろや鴟の聲
水掛て遣れば蚊の鳴く石露の花
日のさして一日寒し垣のうち

爲山が作家として油の乗つた時代なので、警拔な着想はなく新規な表現はないが、どの句にも現實味があつて緊張してゐる。近世十家の名を恥かしめない。その師梅室の卑俗な人情味に動かさるゝなく、どこまでも地道をふんで危なげないのを第一の取柄とせねばならぬ。

後期は明治の代となつたが、一流の俳諧師としてたゞ花鳥風月を詠するのみで、これと云つて批評の対象となる可き句とてもない。

うしろ手に枕おさへてほとゝぎす (むぎのこ)

蓮の香を運ぶ壘のしめり哉

黍邱が案内に銚子の浦の網引見にまかりて

濱風やひと吹來ては又あかき (寶劍集)

黍邱を悼む

つくく〜と見るやおもふや野邊の露 (さむしろ)

朝顔や垣よりうへは己れ咲

臥しどから起ち上らうとする刹那、ほとゝぎすの啼きすぐるを眺める風情が、うしろ手の句に

卒なく器用に詠まれてゐる。野邊の露によせて人生の儚なさを感ずるつく／＼との句は、その「見るやおもふや」と言葉をたゞみ掛けたのが技巧のうまさである。その他はこれが明治の人間の作かと思ふと、たとへ老人とはいへ、時代の空気をあまりに呼吸してゐないのに驚く。

爲山は點取は野卑である、運座は不風雅であると嫌つたさうである。その正風といふのは蓋し連句を傳統の本質として自負的に標榜したのだから、爲山を評して連句に及ばないのは片手落である。「近人附合集」の梅室と兩吟に

水 疱 瘡 の は や る 盆 過

梅 室

追々 に 手 代 の 登 る 秋 仕 入

千 輅

『炭俵』を手本に市井の風俗を題材とするその附合は、これで見ても捨てたものではない。だが『炭俵』に心酔してその下手な眞似に了つたものを見受けるのは、同じく『今人附合集』の

米の左右江戸の息子がいふて越す

千 輅

蕎麥ふるまひの三日かさなる

一 具

のごとき、梅が香の巻の「江戸の左右むかひの亭主登られて」の換骨とは云ひ難いし、附句もこ

ちにもいれどから白をかす」の奪胎として許容する譯に行かない。前後句ともに『炭俵』の模倣である。謝徳の『白雪集』に明治七年の兩吟が見える。その中に

假の位牌に向ふくり言

爲山

行燈に寝た子の顔を打守り

謝徳

田うへ仕舞の草臥が出る

爲山

位牌は不慮の死を象徴する。そこで取残された妻子を附け、前々句と没交渉の田植のもどりと轉じたのである。打腰をよけて観音開きにならぬ程度のたくみさである。千輅時代から千變一律の作法を墨守するのみであつた。

俳學者曲齋一代の業績

爲山より遙かに學識があつたが、なにしろ中國の邊僻で美濃派の系統に屬した爲め世間的交渉を持たず、ひとりこつ／＼勉強して俳書の著述に潛心した曲齋瓢子は惜しい人物であつた。徳山の河村漣月氏から貸與された傳記資料によると、周防の國徳山の人で原田氏、名は重言、通稱を

金助といひ、その家は徳山の小澤町で小間物屋を代々營んでゐた。周防には五柳井春餅といふ美濃派の俳人が勢力を持つて、弘化元年亡師其山の爲め「かたみ草」を梓行し扉に「周防徳藩」と記してあるが、曲齋の名も發句も見えないから土地の俳人に交際を求めず、年々京阪へ商品の仕入れに行つたので、そのついでを以つて美濃に廻つて、獅子門十四世集虚齋右麥に就き直接美濃派の秘傳を受けたのであらう。「發願文註釋」に「今は十とせのむかしなりけり道に志をたつる日より」と自序せる嘉永六年から逆にかぞへて十年昔は、前記「かたみ草」の出た弘化元年にあたるので此推測ははづれまい。

曲齋はいはゆる庵號で瓢子の方が通號になるのだが、曲齋を以て呼ばれてゐる。小間物屋の俵であんなに勉強してたくさんの著述をした所以は、右麥の言葉に感動して一念發起したからであつた。右麥の追善「彼岸櫻」の供養發起解といふ曲齋の告白に「ある時濃の集虚齋において正風復古のはかりごとを尋るに、涙を浮べて予に語らく」と道の衰微をなげいた上「子もし道の爲に身を碎かば我も亦骨を粉にせむ」と激勵され、獅子門の統祖支考の著「發願文」の註解に着手した事を述べてゐる。曲齋が亡父要吉の後を嗣がず、舍弟吉兵衛に商賣をまかせて若隠居をした動機

のそれが一つでもあつた。吉兵衛は又、麥園瓢盧と號し曲齋の心事を解した俳人であつたので、米鹽に關しての心配をかけず曲齋を著述に没頭させた。私の乏しき藏書によると曲齋が世間人と同じく集冊にその發句を寄せたものは、周防三近の鼓琴亭浮月の追善「紅葉の余光」に

常に聞律にもあらず松の本

徳山 瓢子

とあるのが古い。嘉永甲寅とあるから安永改元のその年で、「發願文註釋」の稿を脱した翌年である。安政二年曲齋は折本仕立で「蕉門通鑑」を板行した。「發願文註釋」の奥付に「蕉門通鑑、既出、去嫌、月花の扱、諸の法格を委擧たる席上便利の折本」とあるので、實際出版になつたのは「蕉門通鑑」の方が前であらう。

安政三年六月十六日美濃の集虚齋右麥が歿した。曲齋は年四十であつた。その報恩を志して一周忌の翌年三月「彼岸櫻」一冊を同門夜話亭何狂の序を求めて刊行した。追善の五十韻は經文の大意を賦したもので、

第一無三惡趣 撰立てちりなし華の別世界 曲齋
不事惡趣 さへづる鳥の巢にもかへらす 瓢盧

悉皆金色 春の野は菜畑の色の黄に昏て 不 及
 無有好醜 どれが殿やらお傍衆やら 雨 曉
 宿命智通 出代てしらぬむかしをはづかしみ 李 杏
 天眼智通 はらりとこぼす袖の露けさ 杏 圃
 天耳智通 雲に雁月に萬戸の遠きぬた 鼓 月
 他心智通 夷狄のこゝろはかる陣頭 張 芝

といふ體裁の一人一順であるが、曲齋が獨吟して作者の名を配置したものではあるまいか。最後に「題三尊」として

勢 至 行 音 に あ め つ ち 動 く 櫻 かな 麥 園
 觀 音 世 の 中 の こ も く を き く さ く ら 哉 曲 齋
 彌 陀 さ く ら さ く ひ と へ に 彌 陀 の 彼 岸 かな 獅 子 庵

とある彌陀の發句は『發願文』の卷頭で、右麥の勸めでその註釋を試みた舊縁を忘れない思ひ出に記したのであらう。

曲齋畢世の名著『貞享式海印録』は支考の記述と推定される「俳諧二十五ヶ條」を本文として、例證を蕉門の連句より採つて評論した批判的作法書である。『蕉門通鑑』に「貞享正風の始より享保の終迄なる祖翁并直指門人の諸集より證句を撰び、貞享式及法則の諸書に引合、今案を加へて貞享式海印録六冊を撰べり」と安政二年には既に稿本完成した如く見えるが、『海印録』の自序には「安政六年末彌生」とあるので出版は同年であらう。曲齋四十三歳である。

萬延元年には『七部婆心録』六冊の大き著を出版した。蕉門七部集の連句全巻を抄して、これに『鶴の歩』の百韻を加へ、延寶時代の百韻十句を附録し、前句の見立、當句の附肌を冗慢になるのを嫌はず、つとめて詳しく解釋したもので、やゝもすれば附會と獨斷とを免れないが、連句の評釋に於てこれ以上の参考書は今以て現れない。

曲齋の著書は別に『四季大概註』及び平田門に入つて國典を研究し『音訓假字格』及び『言葉の袖鏡』の刊本并びに神道に關する未刊の書が多いが、俳書は『婆心録』を以つて編著を打切つたらしい。曲齋の甥の麥隣瓢左編『朗月集』には美濃の變化、右麥の許に俳風革新の書を送つて怒を招き、美濃派から破門された上書肆に命じてその著の發賣を禁止された事の特筆してある。右麥は

『彼岸櫻』を讀んでも曲齋と終世惘慙にしたので、もし破門禁書の壓迫を加へたのを事實とすれば、春秋庵齋化の獨斷に出でたのであらう。『紅葉の余光』には『おしき人や名の木のちるは時ながら、春秋庵』の句が見えるが、『彼岸櫻』には齋化の名は一ヶ處もないので既に絶交状態にあつた事と思はれる。斯くして曲齋は明治七年六月より病臥して七月廿九日、

曉や水觀すれば蓮の音

辭世を吟じて享年五十八で歿した。徳山東山大成寺に葬る。

美濃派の低俗を脱せぬ

曲齋は新時代の作者でない。美濃派の秘事口訣を公開して破門されたと云はれるものゝ、美濃派の俗談平話説を信條として句作を試みたのだから、美濃派の臭味を脱するは不可能であつた。大部分の評論及び註釋書を發行しながら、一部の句集をも持たない所以である。徳山の遠石八幡宮は曲齋の産土神で、その境内の鏡山に句碑を存してゐる。

鎮まりますすかげや桂の鏡山

月の桂を詠じたのであらうから秋季である。鏡山の名を据ゑて鎮守の神をたゞへたまでである。

倉重禾刀氏の『にひはり』に寄稿した曲齋翁傳に遺什として十五六句附録してゐる。

初老を迎へて

兼好はともあれ花の四十雀

かの『徒然草』に四十を以つて死生の一期とした説を揶揄的にその四十を越へてからこそ、一仕事して花を咲かせるつもりだといふ縁語を鳥の名の四十雀に呼び掛けたのである。河村瀧月氏の藏する曲齋自筆の『四季句組合』には二百餘句を手録してある。その中から四季の櫻を詠じたものを見ると

人去つて月の出懸る櫻かな

一節句後れて木曾の櫻かな

紅葉する秋も白子の櫻かな

空にしる雪も降るなり冬櫻

平凡な敘景、時間的の説明、名所の詠み入れ、ありふれた古歌取の發句である。やゝ印象的の

句を組題に構はず書抜いて見る。

春の水泡にひかれて流るめり
 いそがしき春や笠着て別霜
 長明の庵組たき夏野哉
 作り身のほだしと成ぬ子持鮎
 夏山の重り見せつ晴る雲
 瀧殿に後むけたる夜寒哉
 流れては腕となるらんちる柳
 煎じ茶のすゝけて苦き櫛火哉
 坂越て月に逢たる枯野哉
 ある程に瓶に汲みたり寒の水

これらは癖のない雅致のある句だが、深刻な内部的苦惱や表現の新技巧を曲齋に望むのは無理と知りつゝも、批評も鋭いし鑑賞的の態度を持つてゐたのだしするから、もつとなんとか水平線

をぬけ出る新工夫がなかつたものであらうか。曲齋を新東京の開化的な事相に觸れさせたならば必ず俳句界の革新的運動を起したであらうと想起するので惜まれてならない。

曲齋の連句は『彼岸櫻』の五十韻一卷及び翁忌の百韻餘興の五十韻二巻を以て批評するのは、認識不足のおそれがないでもないが、左に掲ぐるところの

翁忌

七部集の補註も報恩の端ならめと今年
 の祥忌に御靈をむかえて

月も照せ七艸におく露の上
 滄みて寒き古池の底
 人しらぬ寶と鏡取上て
 盲千人目明千人
 此の春は殿の年賀の御振舞
 雪踏分て根白艸引

新舊過度期の人物批評

曲齋
 飄盧
 壽山
 鼓一月
 悟一
 文志

孝行もまた若竹の七ツ八ツ

一 以

素讀の聲の窓に聞る

松 月

翁忌百韻の表八句と既出の『彼岸櫻』十句と比較して、似たり寄つたりの附け方といひ附肌といひ、『婆心録』で蕉門作者の附句を添削してまで、連句の理想と向上とを企てた曲齋の捌きとしては感心されない。表には禁制の言葉があるので自由な腕をふるへないと云ふが、裏へ廻つても

一 趣 向 思 ひ 附 たる 葛 豆腐
倒るゝ迄は飲す所存か

蒲團かぶつて寝言いふ也

掛乞の鬼は外へと打拂ひ

舊連句に今も見掛ける俗談か、落語の材料のやうな附句である。たゞ僅に

炷のえならぬ裙を引とめて

舞扇にて烏帽子打るゝ

戯曲的な場面が展開されたこの附け位のもので、概して美濃派の低俗な用語で詩的興趣に乏しい事は争はれないと思ふ。

孤月調と甘海の俳文集

拾玉園漣々の著『俳諧點取考』は文政頃の板本であるが、雪門の對山や葛飾正風の錦江やと共に、太白堂孤月判として高點句を擧げその好みを批評してゐる。孤月は明治五年七月十九日歿したが、その前門人四夕に太白堂七世を譲り、桃翁と稱して享年八十四であつたといふから門下三千七百名を擁したこと、及び孤月調の流行は維新前の事に屬する。が、七世の四夕は師の歿前明治四年八月二日故人となり、八世吳仙の相續した年は知れないが、『開化人名録』には太白堂吳仙として掲げてゐるから、孤月を明治俳壇に没交渉な人物とは見られない。江口氏、通稱は辰之助で赤坂丹後坂上に庵を構へ、旗本の隠居だと聞いてゐる。孤月の歳旦牒は『桃家春帖』の外題で天保以前のものには渡邊華山筆のこま繪があるので好事家を喜ばせる。賛川他石氏は天保八年の『桃家春帖』を所持され、それに「予畫此帖者已二十余年」とあり、桃三堂支石とあるのが

華山の俳號と思はれるさうだからそれから逆つて師萊石——五世桃隣、存命の文政初年から續刊されたものである事を推知し得る。

四五本の竹や机の初日影
拜みたるあひだの知るゝ初日哉
散色の障子をとほす椿哉
木裏からつかりとして春の雨
川へだてゝも見ゆもちの釜の塘

『桃家春帖』に掲ぐるこれらの句を通じては孤月調の特色明瞭でないが、漣々の『點取考』を参照するとその高點を窺ふには、「見付たる句、旅體、細ミ有句、在體、人情」にありとし、且つ高點句を見るに右に掲げた「川へだてゝ見ゆもちの釜の塘」が七文字冠りである如く、

かきたてをして遣り所なき雪ぞ
同じく七五形式は敢て奇異とされないが、その變格とも見らるゝ、
なごりおしさうに流るゝ氷哉

八文字冠りを中四で承け、下五に結ぶ八四五調や、又

栗のむしくりよりもむまさうに見ゆ
の如き五五七調、その變格として

奉加帳もて來ぬいねをかけたれば

五四八調の類も決して新規の格調とは云へない。けれど卑俗な言廻しであるため人氣に投じてそれが孤月調として明治時代まで云ひ囃されたのであらう。孤月は明治時代の第一期に評す可きであつたが、便宜上こゝに紹介して置く。

孤月の後に新東京の人氣を萃めたのは施無畏庵甘海であつた。乙彦の『對梅字日涉』に明治四年二月の事として、

七日 當春淺草觀音開帳によりて、甘海大額奉納の企を起し、其仕様冊といふもの配達あり。一句出詠金一圓の定にて、集句三百五十章、入用も亦三百五十兩の由云々、東京第一の盛庵と見へたり。

と驚嘆してゐる。甘海は佐久間氏、下野日光の人で、淺草の金龍山裏に庵を結び、施無畏庵の外に

風月羅漢、小果人、巍々山人の諸號があり、明治以前には未足の號で知られてゐた。「新選俳諧年表」には歿年不詳者として「不可得庵圓融坊と號す」とあるが、不可得庵は不染の別號で甘海の號でない。歿年は『俳諧年表』に明治十三年七月六日とあるのが正しい。甘海の遺稿『俳文友垣集』の聽松の跋に「下毛の行脚に病て日光山の麓、鉢石なる某氏のもとに遷化す」と記し「今年結夏のはじめ九句の書寫に倣ひ」とあり、且つ「明治十四年晩夏の日」と明記してあるから、一説の明治十二年歿は否定して、その未足と號した時分の發句には下毛と肩書してあるが、例句を擧げると、

草履でもよき雨跡やわか楓

(そて羽集)

もどり鶉の羽もくろみて哀なり

(月ゆみ集)

遠山の澄きりて吹野分かな

(雪明集)

闇も澄吹夜頃となりぬ露の音

(有耶無耶集)

大蟹の吹れてわたる落葉哉

(松吟集)

可不可なき俳想で調子の上にも新鮮味はない。明治時代その甘海と改めた後も格別の變化はな

いらしく『三千題早引略解』の中から

雲低くなるや蛙の聲のうへ

きじ鳴や蝕にかゝりし日のくらみ

水口は幣に梅散まつり哉

不二濡れてはつ春雨の晴にけり

陽炎にうつる光やあぶら傘

やゝ佳調と見らるゝものを抄出しても、そのどこで人氣を呼んだのか發句の上からは推定されない。甘海は發句よりも明治に於ける俳文集の處女出版として『俳文友垣集』の編者であるのが、明治時代の俳壇に存在を認めらる可き點であらう。

郵便

甘海

文明物理日々にひらけ、皇威聖徳年々に萬國に輝て、電信郵便の妙用盛に行はるゝ此大御代には、綠林の風枝を鳴らさず、白浪の船楫をたえて、徳澤四海にあふるゝも郵便辨利のいさをなるべし。夫子曰、徳之流行速於置郵而傳命、うべなるかな

一 錢の端書千里をゆき
風月の戎易至急にとゝのひ
虚名争ひ售俳諧の店
開化の人情雅俗進疾

俳文とは云へ程度の低いもので作者は甘海の外に永年、聽松、澄江などが聞える位である。伊能高老の序及び三枝守静の擬古文を添へてある。守静は大石手引の塾々舎をついだ國學者で甘海の師事した人である。編者は染谷恭輔とあるが、附記に「此篇は甘海翁の手に成し物にして、翁歿後遺稿のおれが許に有しを松田氏の校訂を乞ひ版に彫しぬ」と云ふ如く甘海の編輯に相違ない。松田氏は跋を認めた亭々堂聽松の事である。

雪門の鳳州信濃の葛古

東海道筋では静岡の時雨窓に寄寓した雪中庵七世鳳州の存在を無視されない。蓼太の再興した雪門は完來時代分裂の徴あり、對山に至つて衰微し、椎蔭はたゞ傳燈を守るに過ぎなかつた。鳳

州は椎蔭の後を承けて一門の不振を歎き、挽回策として安政三年嵐雪の百五十忌を營み、同門を翕合しようとしたが、

その八月の野分にはうしほ床にみなぎりて、人々の吟詠のちりうせたるも少からず。かゝるさわぎに年くれて、心ならずも丁巳のことしにいたりぬ。

と、その著『雪竿集』の序に述ぶるやうに晝餅とならうとしたが、丁巳即ち安政四年十月十二日深川の要津寺で嵐雪の法要を嚴修し、出座の俳人百餘名、百韻十卷を行ひ、更に翌十三日は嵐雪の菩提所駒込の常驗寺で

おこたりやつくくさぶき鐘の聲

鳳州

その微力の爲すなきを墓前に詫びて事志に違へるを述懐してゐる。『雪竿集』の序に「只これ予が七世を繼此時にあへるめいぼくにして」とあるを鳳州の此時七世を相續した意に解す可きであるが、雪門の統を承けて七世を稱せる此時と見る可きであるか、文意曖昧であるが、鳳州の雪中庵相續は安政四年より下らない點は確かである。同年後の八世梅年をして竹立庵二世を嗣がしめ日本橋の萬八樓で獨吟三千句興行の上、一門の判者に取立てたのは鳳州の活眼であつた。

鳳州の静岡移居はその句集『六葉集』の序に「阿師さきに談笑道場に筈を入られしより、此かた僅に三とせばかり」とあつて明治三年の開板であるから三年前は元年にあたり、序者は「駿河人後學遂風」とあるから「談笑道場」は時雨窓をさしたので、その移居の明治元年なるべきに相違なきを思はせる。それから明治五年まで引つゞき寄寓した事は『三千題早引略解』の人名録に

鳳 洲 雪中庵 當時静岡時雨窓在菴 深川六閑堀

と明記する通りである。

鳳州は大衆向の作家でないが、その句に一家の風格を持つてゐた。

草 庵

葵や膳の廻りのはつがすみ
初あはせ先たちいでふかれけり
のみまけや草のつるなど引むしる

病 中

かやたゝむかぜの寝顔にさはり鬼
夕ぐれのすがりごゝろや秋近し
水仙とかきねの間のにし日かな

の如きその身邊をながめて、卒直な感想を詠じたまでであるが眞を以て人に迫るものがある。

井のもとや小竹筒洗へば春の月
手のひらにしみづの冷やくだり坂
おく露や向ふ上りのよるのうみ
あけがたや水行すちの初しぐれ

作者の位置がさうしてその動きが自然と板一枚である。これはあの時代の人の意識しなかつた表現法である。

はるのさぶさ氷に砂の吹かゝり
二三尺秋になるとなるや木のかげり
汐のさす川のきれ込花野哉

蠅のはふ人のたもとの冬日かな

その觀察に於て寫生句の境地に到つてゐる。鳳州の『六葉集』はたしかに再吟味を要するよき句集である。

鳳州は村井氏、通稱圭藏である。明治七年九月十二日歿した。享年六十一。

春秋庵系統は白雄の遊説した信州に最も蔓延してゐた。その老俳として水簾家葛古は、佐久郡大井村の庄屋で小林四郎左衛門と稱し、『葛古發句集』の清民序に「葛三を師とし傍道彦に游學す。みち彦、水簾家の三字を贈れり」とあるごとく、白雄七弟子の二人を師として古く聞えてゐた。師葛三の歿したのは葛古二十六才の時であつた。

七月十二日身まかりし母の喪にこもりいまだ三七日も過ぎるに、葛三師の終焉六月十二日と庵裡雉啄の告驚しぬるは、師の四十九日を昨日といふ文政戊寅の八月朔日にぞ有ける。

葛古の手記にかうあるが、雉啄編の追善集『みつ栗』には

女郎花濡手についで哀也
八幡葛古

と見え、八幡はその在所の小字であるから、此書の板行された文政四年には俳壇的に知られ、文

政七年の七回忌には「筑紫みやげ」を編して師恩を報じたので一層有名になつた。道彦は葛三と同年に歿したのだが、その追善『かたみの葛』とは別に

別號を水簾家に定めよと扁額をさへ贈られしみち彦翁、九月六日遠行ありしと遺髪を添へ龜
丈が告來たりしに

きせ綿につゝむも菊の白髪かな

と哀悼措かなかつたけれど生前對面した記録はない。天保十四年十月、淺間山の別當眞樂寺に芭蕉翁の

むすぶよりはや齒にひゞく清水哉

の句碑を立て、「建たれば時雨ぬ字なし石の面」の句を詠じ、春秋庵を再び開いた梅笠から幻住庵の椎の古材をおくられ、柳外といふ人の鐵筆で「睡僻山民」の印をつくり、諸方よりの選巻机上に堆きに及んで「我を判者のやうにもてはやして、衆育をひくの誹りを負しむ」と感慨した如く、判者即ち俳諧を以て渡世としたのでない。『葛古發句集』二卷は慶應二年、七十四の時の自選句集で、

霞むとて障子はづすや山の家

比叡の山を順拜して坂本に泊る

辛崎のおぼろをとくや膳のうへ

安政六とせと云年の水無月十六日家に年月の争婦を失ふ

蚊屋たゝむいさかひ相手なくしけり

迎へ火やいとけなき子の後しさり

下駄かうて膳すゑられぬ夷講

など大體の句振りを察するによい。元治元年の和田峠に迫つた浪士の事や、和宮の降嫁の途次など、その句の前書に興味のあるものがある。明治十三年七月十三日、享年八十八で歿した。

商家から出た梅裡士前

名古屋の梅裡と士前とは雁行して争はず二人とも明治早期の俳壇に重きをなした。梅裡は明治六年十月廿八日、士前より六年前に歿した。

清遠舎梅裡居士壯年より商業に伊勢路をはじめ、京攝に跋渉する事年々歳々八九度づゝにして四十年におよべり。其しげきはひのいとま俳諧に心をゆだねられたる積徳にて、其の名世に鳴る事人のしる處なり。居士日ごろ口癖に耳順の齡とならば、速に長男に代を譲りて机にのみむかはんといはれしに違はず、遁世せられしは人の及ばざることなりき。さりながらせめて八十餘りの春秋をへてなりとも、あのよの客となられたらんにはとおもひしに、隱栖を卜して僅三四年ばかりにして六十四歳を一期に去年十月廿七日、元祿このかた故人の膝元へおもむかれしはをしむにも又あまりあり。そのをしむあまり賢息逸志子、居士が門葉數輩とかたらひて家集なれるをりから、輯者達より五十年來の舊知己は外になければ、さしづめの序者とおしあてがはれて、ありの儘を怪き舌に演る。

明治七年戌冬

揚津士前

『梅裡句集』のこの序は親友士前の筆にして、より情味の溢るゝを覺える。梅裡は大橋氏、家號を茗荷屋と呼び通稱甚藏といふ名古屋の商人で、清遠舎はその庵號である。帯川居沙鷗の門に入つたのは廿四五才の頃かと思はれるのは、沙鷗の『しまやま日記』に「わがよはひのなかばなら

ぬ人をさへ友としぬ」と同行者の一人をさした言葉が梅裡にあてはまるからである。天保六年の事であつた。梅裡の著『かぶらじる』に寄せた大阪の素屋の序に「清遠老人が携られし尾張味噌のうまさをしりて、とりあへず天王寺の蕪にあはせて」とあるのが、諸國へ味噌を賣捌いてゐた商賣を思はせる。

士前は名古屋に一撮園を結んでから評判になつたが、愛知郡毛荒村の人で永井氏、名は儀匡、通稱を松右衛門と云ひ、俳諧は大鶴庵竹有に就き最初は龍池亭烏津と號してゐた。竹有の三回忌『木の葉懐俗』は天保二年の坂本であるが、それに烏津の號で脇起し歌仙及び四季の發句を採録されてゐる外、百古の『流行百家發句集』にも烏津の號で載せてあるから士前と改めたのは嘉永以後であらう。その家は素封家として鳴海の千代倉家と對立し、知足自刻の芭蕉翁木像を得て、鳴海の誓願寺に芭蕉堂を營み、安政五年『初しぐれ』をその子星岬の名で板行し、酒掃おこたらず、又俳行脚の來り投ずるあればよくこれを待遇したさうで、茶道にも書畫の鑑識にも通じたと云はれる。文久三年板の『活動集』に

商業のいとまあれば晝と俳諧に遊ぶ流翠子、繪は以てわが師とするにあらねど、俳諧は以

てわが門葉とするにすぎで、唯年たがひの朋友なり。此の秋畫賛及連句を一とちとなして名をこはるゝに、何くれと撰びもとめんよりは、太乙老人の題字を其まゝ活動集とせん事をすゝむるのみ。

閏月既望

士前

と序せる口吻裡に芭蕉と許六の師弟を以て持する自負心と、畫事に疎からぬ好事癖とが窺はれる。人呼んで大入道とあだなしたのは、剃髪の肥大漢。あつたばかりでなく、その性格の豪放で自我の強かつた意味をふくんでゐるのであらう、年四十に及んで家を養子星岬に譲り、草庵を眺望よき郊外に結び天目軒と名づけたが、やがて名古屋に移居し、明治十年七月廿四日歿した。享年七十一であるから梅裡より二歳の年長である。

梅裡と士前は同系統で師匠のちがふだけであるから、作風は一ツ壺にはまつて動かない。

初しぐれ集

茸あげし屋根こそあらへ初時雨
目にふれる物みな清きしぐれかな

士前
梅裡

二度遊集

麥秋の中ぞ都を出るより
植つけた田にわたるなり夕烟

士前
梅裡

御園集

ゆふかほや夜風にさらす洗ひ米
神風にまかす手元や苗配り

鳥津
梅裡

あさりつと集

淺茅生にやがてとりあふはつ日哉
青田ふく風にさそうや朝乙鳥

士前
梅裡

こくろふ集

清水とはこゝろもつかすゆれる草
冷たなら枕にからん瓜ひとつ

士前
梅裡

兄たり弟たり難き着想と言ひ廻しである。併しその句は明治時代の新空氣を二人とも呼吸して

ゐない。兩吟の連句を見ても

架竹のまだある山田かすみけり

士前
梅裡

日永おもほゆ乗懸のうへ

唇にしたみ木の芽の香をなめて

餘所からみると内は不掃除

薄ばたの水たふくと月になり

裡

風美しき秋のとりつき

あり來りの附句で、氣分の吻合してゐるのがその境地の同一を證するのみである。安政四年田中の法藏寺で行つた『刈跡集』の百詠とてもこれと大差がない。『初しぐれ』その他、士前に關する俳書は、名古屋の富田新之助氏から借覽した事を謝意かたかく記しておく。

大阪俳壇の蟻兄と素屋

花屋庵鼎左は舊大阪棹尾の點者であつた。彼と對峙する俳壇的閱歷を持たながら非點者のため、

茶飯堂蟻兄に就てはあまり知られない。蟻兄は高村氏、錢屋十左衛門と稱する大阪の商家で其洞亭とも號した。鼎左の師奇淵の指導を受けて同門であるが、或は月居の一派に傾き、時に梅室の調子を喜んだので誰の系統だとはつきり云へない。八千坊一肖が文政八年大阪の清壽院で芭蕉忌を行つた『枯野集』に

いきくくと枯て立たる芒かな

蟻兄

が彼の句を掲ぐる集冊として古い方である。奇淵との関係はその翌文政九年の三月、嵯峨御所の御影堂拜納『さくら合』に左の句が見える。

みじか夜や嚙て捨たる苧屑なむ

蟻兄

併し奇淵がその以後年々開板した『枯野集』を十冊ばかり家藏するが、蟻兄の句がない。天保二年十月奇淵が芭蕉翁百五十回忌の爲め、十日間に涉つて盛大に興行した發句にその名見えず、歌仙百卷中僅に「ちつくりは暑のゆるむはつ月夜 蟻兄」と第六十一卷の五句目を詠じてゐるのみなので、奇淵門として輕視されてゐたと察していふ。とは云へ梅室系統と見るにも嘉永六年同門の發企した『かれきく集』に一句も採録されてないからこれは寧ろ存在を無視されたとも思は

れる。此の俳系上の問題は明確にし難いけれど、蟻兄が俳諧點者たる可く立机せず、一遊俳として自由な立場にその身を置いてゐたからであらう。故人森山鳳羽が蟻兄の許で三日も四日も徹夜して勉強したといふ話を聞いたが、鶯室の『此君次郎集』の文普通名録に「北久太郎町一丁目、茶飯堂蟻兄、高松氏」と筆頭に掲げ、且つ「俳禪屈鳳羽森山氏」と載するからそれは事實であらう。此書は明治三年の板本である。兎も角蟻兄は文政以來の作家で明治五年一月八日享年八十三で故人となつたので、大阪俳壇には除外されない一人である。が、その句を見ると

掘て賣田土の中のすみれかな (ひとへかき)

炎天や塵かと思れば壁に蝶 (反古懐紙)

よるつきしやどに朝見る清水哉 (六物記)

いと々啼ほどの透あり白の下 (あけほの集)

雪國やあはれに安き賣草鞋 (わかれ露)

佳作に乏しいのは管見の及ばざる點もあらうが、云ひ傳へられる程の作者でもなかつたやう。蟻兄よりは名の聞えて鼎左よりはやゝ位置が劣るが、大阪の蕉風點者として松蔭素屋は天保十

三年板『高判竹のしげり』及び嘉永六年板の『高判俳諧種瓢』に卷ノ四季の句高判印譜を掲げ、種瓢は別に傳統を證し、素信——梅室の直系に屬してゐる。『俳諧ふぐるま』には「鳴戸之潮干誘引之文」と題する書翰を載せ、

此頃の春色空敷難_レ過候まゝ豫て申出候鳴戸の汐干遊覽おもひ立申候。御同伴被_レ下候はゞ大慶不_レ斜候。御存の通淡に墨雨子紅蕉子あり、撫養には千化子、竹叟子あり此人々の内を促し浪花の土産に一卷催申度候。速に御同意の貴答奉待_レ候。不一

如月念九

素屋

其山様 机下

まだ暮ぬ梢はなれて春の月

御笑評承度候

然も自筆を摹刻してあるから素屋の若くして世間的に高く評價されてた事を争へない。これは梅墻梅左編の天保十一年の板本で素屋二十八歳の時である。素屋は岸田氏、禮助はその通稱で初號を慶五庵貞瑛と云ひ梅室門に入つて後は齋生園、ひたのや、松蔭、松の本の諸號を稱し、『流行

百家發句集』には住所を「南農人町谷町」とあるが、植原瓢夢氏から「素屋は大阪城代の手下で同心より下役であつたが、決して不淨役人ではなかつたさうです。素屋の號は梅室から素信の素の字を貰つたので、素幫家辰見屋の先代に愛され文人畫なども上手だつたと云ひます。竹丈といふ素屋をよく知る老俳の話に長身で強面の一寸取つきにくい容貌であつたといふ事です。住所は農人町でなく雪踏屋町です」と云ひ越されたので再調すると「竹のしげり」に「雪踏屋町谷町西へ入北側」とあり、『種瓢』は「雪踏屋町善安寺筋東入」となつてゐる。兩者同一の場所らしい。素屋の句境は、

梅が香や氷をてらす日のかへし (そで羽集)

桐さはぐばかりに遠きよだち哉 (石うす集)

浮て出ぬ螢の待れて雲の峯 (柳鶯集)

朝顔や花におはるゝ蔓の伸 (月ゆみ集)

見えそめて野は暮出しぬ女郎花 (東行集)

釣子のたばこにしむや初時雨 (旅衾集)

新舊過渡期の人物批評

諸集を搜してさてこれとは云ふ特徴を句に見られない。蟻兄と同じく大した作家ではなかつたと思ふ。明治十一年十月二十一日歿した。享年六十六。

蟻兄と素屋とが鼎左に次々名聲のあつた事は文久元年、江戸の其角堂永機が舟左、鳧水の兩人と大阪へ旅して、高名の七俳人をもその廬にたゞき七歌仙を行つた『辛酉集』といふ冊子に

見に出ねど見ぬ日はあらず梅の花

蟻 兄

爐ふち仕替る雨のあたゝか

永 機

及び

かすむ日や古葉こぼるゝ樺原

素 屋

樋を越す水のよどむ雪解

鳧 水

各四吟を掲げてゐるのも解る。

俳句の趣味化と社會的浸潤

泊船寺と鮫洲抄の再刷

明治十四年五扇樓靜正は古く泊船寺に存せる芭蕉堂の頽破をなげき、赤坂臺町種徳寺の雪屋禪師の配慮で、久しく泊船寺から同寺に預けてあつた芭蕉翁木像の還附を受け、堂址に「一字を營み」てこれを遷座し、京都双林寺の例にならひ花供養を催すと共に、春秋樓千分を勧めてその舊著『俳鮫洲抄』を同十七年再刷頒布するところがあつた。

抑、天林山泊船禪寺は武州荏原郡品川大井村に有て海晏寺に隣れり。後は老樹蒼々と繁茂し前は滄海漫々たり。波頭の漁舟は眼に歡ばしく樹林の鳥聲は耳に樂し。最も幽玄にして亦雅境の精舎と謂ふべし。

『鮫洲抄』の冒頭にその所在及び位置を示せる泊船寺は、後小松院の永徳二年北條氏の草創で慶長年間に至り、本山なる亦坂種徳寺の鑿英和尚が修理して中興開山となつたのである。その二世

千巖和尚は詩歌の道を好み、「芭蕉翁をも信友の其一人にして同寺に偶居あり、泊船集を撰し、泊船堂の號を唱ふ」と、靜正の再刷本に序せる記事はやゝ疑ひなきにしも非ずであるが、雪水軒茶靜の『茗荷』に、千巖の嗣弟宗俊長老が「牛耕庵といへる別室をつくり、墨畫なる祖翁の肖像をあがめ置れけるとなむ」と述ぶるは眞に近からう。その後寛政五年十月太白堂一門の發企で宗俊長老の牛耕庵趾に「墨畫の肖像のとしへてそこなはれたるをたゞに捨んもとて其地中に納め、その上に一字をいとなみ奉りき」といふ露休の「古泊船堂之記」で見ると、これが後の芭蕉堂の濫觴であるらしい。堂には「芭蕉句選年考」の著者石河積翠作の芭蕉翁木像を安置し、蕉門十哲の畫像に積翠の讚せる額を掲げて、その時

祖翁の像を敬彫して

いつかまた此木も朽む秋の風

積翠

積翠の吟ぜる俳句及びその位牌を『鮫洲抄』に載せてあるので、堂の造營には積翠が資財を投じて成就させたのであらう。文化十四年堂の修理三回に及べるに際し、茶靜は近江義仲寺の「本廟にうたへて粟津の正風堂をうつす」と記せるを以て、芭蕉堂の名稱は堂の佛を義仲寺のそれに

模したから起つたのであらう。天保十二年春秋樓千分は泊船寺誌として『鮫洲抄』を出版したが、これが明治十七年再刷した『鮫洲集』の原板である。千分の『鮫洲抄』は泊船寺に關するのみでなく、積翠傳の好資料となるので大野酒竹、沼波瓊音校訂の『芭蕉句選年考』の開題に載するものゝ大半は『鮫洲抄』よりの抄録である。天保十二年板の『鮫洲抄』は梅枝軒來鶯補正となつてゐるが、明治十七年再刷の『鮫洲集』は「抄」を「集」と改題し、東京五扇樓補閑と埋木して恰も新板なるが如く見せかけたのは、どんな事情があつたにしても僞板たるの謗りを免れない。扉と序との外は全然兩者同一なので殊にその非難を高めると思ふ。併しこゝに『鮫洲集』を引用したのは再刷前、靜正が泊船寺の芭蕉堂を再興した事を證するのが目的であるからこれ以上深く追究すまい。靜正は村山氏、花の本十二世宗匠と自稱してゐるが確たる傳系はないらしく、『魏今撰句百家集』によると龜町土手三番町に居住し、遂に京都の花の本芹舎に對抗しつゝあつた如くである。又、千分は岡崎氏、通稱を鋳次郎とよび、京橋八丁堀に寓し、春秋樓及び五窓樓と號したが、一日本郷に所用あつて行き、大學醫學部前の下水の石に腰掛けたまゝ頓死し、親族が引取つて葬儀の最中蘇生してその後數年生存した逸話があり、明治十六年、享年八十あまりで歿したさうである。

泊船寺の芭蕉堂は現存せず、句碑は大抵堂後に一トまとめにされ、繪圖にあるものとは全然相違してをり、寺前は幽玄の景どころか京濱電車が閑断なく運轉されて騒がしい。

永機とみゝな草の開板

明治時代に入つて研究的の態度で古俳人及び古俳句に關する著述をした者は永機を第一に推擧せねばならぬ。その中でも史的價値のある好著は『俳諧みゝな草』の其角年譜及び其角難句解である。『俳諧叢書』に覆刻されてゐるので事新しく解説するには及ばないと思ふが、この書の板行を看過するに忍びないので一言して置きたい。永機の自序によると

春曙抄

つめどなほみゝな草こそつれなけれ

あまたしあれば菊もまじりて

右の古歌から題名を『みゝな草』と附けたのださうである。『春曙抄』は季吟の枕草紙註釋書であるが、この歌は『春曙抄』の引歌でなく『枕草紙』の本文百十二段に見える。永機が「此歌を此集の

題にとりぬるは先考の遺稿なればなり」と述べたのは、『枕草紙』の「見も知らぬ草を見どものもてきたるを」の「見も知らぬ」に因みを求めたので、父の遺稿である題意を託したのではない。永機の父鼠肝はお茶坊主から深川座の點者となつたので、其角の年譜を編むやうな考證的學風の人物と思へない。父の遺稿とは或は思ひ違へた謙遜であるかも知れぬ。永機自らの著述をかの「以テ顯ニ父母ヲ孝之終也」の本文を誤解して亡父の名に假託したのであるまいか。永機が既に父の遺稿と明記するものを斯くみだりに憶惻を逞しうするのは、よくない。「あなぐり」癖かも知れないが、よろしく紙背に徹する處がなければ研究的態度とは云へない。私が此書を永機の著作と信ずるのは彼の學識を認むるからで、永機の謙抑を傷けやうとするのでない點を一方に於て諒とされたい。『みゝな草』の上巻晋子年考は淡々の「十七回」一に漢々語と題集といふと題せる其角の追善集に掲ぐる其角年立を骨子として、其角に關する俳書を涉獵して年代的に編述したのであるが、豊山の『晋子一傳錄』の記事は疑問として採らない點にもその見識が窺はれる。『本朝食鑑』の著者三弄子から其角へおくつた米元章の硯の摹寫に「當時墨水の畫工抱二所藏」と註あるによつて、永機の著と斷じられないにしても、その書入れの多き點を否めない。下巻の晋子句解は或は永機が父の座談に聞いたとこ

ろをその雜學に照らして、註釋したものと見らるゝから、これを父の遺稿とするならば敢て容喙はしない。併しその中にも半面美人の點印に説き及び「今草庵に傳ふ」といふ附註が存する點に注意を拂はない譯に行かない。但し附註は永機一人ではない。校者として名を列ねる小築庵春湖の説も採り入れてある。たとへば「子規一二の橋の夜明かな」に就き「寥松か釋に」と引けるは「露陀羅尼」の附録にある其角の句解をさしたので、本文に本所一つ目二つ目説を否定し、「いづくへか啼て行らん時鳥淀の渡はまだ夜ふかきに」の本歌取とする附註に、春湖曰として「雍州府志」の一二の橋を引き、その所在の京都なるを明示せる個所の如きである。上卷晋子年考の終に其角終焉の吟

春暖坐閑爐

うぐひすの曉寒しきりくす

この脇に青流——後の祇空が病床に伽して「寛の野老髮結ぶまゝ」と付け、歌仙九句で了つたものに其角の附句を炭俵、句兄弟等より拾ひ、これに亡父鼠肝の附句をつぎくぐに配し

炭俵 君こねばこはれ次第の家となり

角

息曇らせて鏡なぐさむ

窓

の如き例で一巻滿尾させたのは、几董が『其雪影』に亡父几圭の附句に自作を配置した先例に一步を進めたもので、几董既に「竹をもて木に繼るがごとく成べし」と愧色あると同じく、永機も却て風雅の罪人たるを恐れ侍る也」と云ひ、その勞多くして故人を冒瀆する嫌ひがあり、結局は無駄骨であらねばならぬが、かうした癖があつたればこそ、作句以外には能なしの宗匠輩に交つて彼が『みゝな草』の如き研究的著述をなし得たのであるとも評されよう。

梨園の好俳書祖父の恩

歌舞伎と俳諧との交渉を求むるによい三部書として、三升の『父の恩』訥子の『師の恩』及び梅幸の『祖父の恩』はあまりにも有名である。『祖父の恩』は彩色摺の美しき挿畫入りで、明治十四年梅幸の五代尾上菊五郎が永機の筆を藉りて板下とした大本二冊である。勝海舟の題字、永機の序、梅幸母方の祖父である三代菊五郎の梅壽像及び戒名を記し、

追 福 哥 仙

俳句の趣味化と社會的浸潤

祖父の思高くも菊の匂ひ哉	永	機
ひかりいたゞく月の朝影	梅	幸
初潮に外江入江の寛きて	春	湖
とびくながらよき家並也	機	湖
梨子棚は冬の手當も小奇麗に	幸	湖
氷いとうて水捨る瓶		

三吟一卷の次に梵字を以て世尊棄世の詩を摹寫してある。これは梅壽の追善には関係ないが、俳書に梵字の出づるものはこれを措いてあるまい。追遠の發句には團菊左と鼎稱された三升の團十郎、蓮升の左團次をはじめ名題悉くその名を描へ、知名俳人の句を逸する事なく、梅年の「風筋も涼しきかさね扇哉」を立句とせる九吟歌仙をその間に挿入してある。乾卷の梅幸跋に

古人多くは旅に果といへるも風雅の上のみにあらず。炮煙をしきねにして終をとり、流石を枕にして息絶ゆるもみなその職の榮光也。祖父梅壽翁も旅に終をとる。旅よりたびに赴しは三十餘年のむかし、我いとけなくして顔さへ朧氣なれば、いかにも追善の一端をもと、

いさゝかの綴ものにて手向ぐさとす。されど晋子翁が花摘、三升が父の恩、其意深遠なるにはおよばずと、筆をとむる今日只今の旅なるべし。

明安き月日まとめて廣樂寺

五世梅幸識

幸探

この句に詠み入れた廣樂寺は嘉永二年四月廿四日、外祖父梅壽の客死した遠州掛川の埋葬所の寺名である。坤卷の「千代見草」といふ梅幸年表で見ると、梅幸の父は十二代羽左衛門であるが母は梅壽の次女であつた。嘉永四年父が歿したので外祖父の藝風を母の薰陶で自然に覺えたのであらう。その十六歳、安政六年の夏興行に扮した天竺徳兵衛は「祖父梅壽老の俳ありて木琴の唄などは賞に器用なる夏にて見物も感心致したり」といふ評言が見える。萬延元年の「八幡祭小望月賑」の「せりふは故人梅壽の聲色ゆゑ、見物一同大受にて此佐吉からめつきりと世評もよく賣出したり」とあるので、梅幸の『祖父の恩』を開板した動機はその報恩の爲めで、明治十四年は恰も三十三回忌に相當するから、永機に編輯を委嘱したのであつた。梨園に名立たる菊五郎發企の集だから、劇壇に知らるゝ文士の發句も多くあつめられてゐる。

梅壽翁の供養に梅幸君の慕れも斯やと

祖父に似た羅漢から先新茶哉

魯文

新聞文學の人氣者假名垣魯文があれば、歌舞伎劇の造詣に於てその右に出づる者がないと云はれた關根只誠は

紫は雲のみでなし杜若

木公棟 只誠

といふ句を寄せ、遙に大阪からは通人平瀬露香が

若芽ふく楓や秋の染手本

浪花 露香

と梅幸の梅壽の俳を以て賣出した意を詠じて来る。俳人では明治三大家の一人爲山は既に故人となつたので、春湖及び等裁の發句は別に

追善

思ひ起す松の隠居やほとゝぎす

春湖

三十三とせむかしかたりて夏の月

等裁

各自筆のまゝ摹刻してある外大抵の作者は網羅されてゐる。後に素行の梓行した「恩」を除いて

は、これに比較して見劣りしない明治の俳書は絶無といつてよい凝つた意匠と板行とである。

世當俳優三十六句撰の新版

七夕の當り狂言を祝つて大阪の俳人才磨から才牛の俳號をおくられた初代團十郎が、歌舞伎役者が藝名と俳號を持つ事になつた嚆矢であるといふ『日本演劇史』の所説の如く、元祿以後の俳優は必ず俳諧を嗜好したと云はれてゐる。梅幸の『祖父の恩』を見て明治時代の役者には此の傳統の存する事を知り得るが、歌舞伎新報の編輯者として劇界の表裏に通ずる久保田彦作が守田周重の似顔繪にその人々の自筆の發句を題し、欄外に小傳及び藝風を手録した『世當俳優三十六句撰』は、いはゆる役者評判記の類とは體裁を異にして、柳下亭種員の『歌俳百人撰』及び綠亭川柳の『俳諧百人一首』を模範としたものである。小傳、藝風に就ては演劇史の範圍に入る事になるから、こゝにはその三十六俳優の發句だけを抄出しよう。

虎の尾をふみこえて行く花野哉
根ちからの強し小松の曳はじめ

市川團十郎 三三 升
市川左團次 蕪 升

俳句の趣味化と社會的浸潤

樸り葉や親代々のかどみ餅
吉瑞の雲あり峯の八重かすみ
蝶ひとつかげはらくと立田やま
照蔦の中にも青し常盤山
青梅や熟すを枝の力にて
御ひいきを風きり羽根やすめの子

おほけなき名をつぎて

雄銀杏の實なき其身も果報哉
紫の帽子恥し華に鳥
市川の水に太るや放し鯉
行末の茂りをねがふ小松かな
初雪といふ名斗りや雨の中
漸々に蝶こへて行大井川

坂東 家橋
中村宗十郎 霞 仙
坂東 しう 調
市川小園次 升 若
尾上梅三郎 梅 三
中村 福 助

松本 錦 升
岩井小紫 小むらさき
市川團右衛門 麥 升
尾上 松 助
河原崎 國太 郎
關三十郎 哥 山

冥加く雨もつて來る雲ひとつ
泥水の中にも浮れ散蓮花
灯火の影追ふてゆく小てふかな
雪の夜の寐酒一合不老門
打水や須磨も明石も庭つゞき
桶やたゞ御ひゐきの袖たもと
壽はめでたきものぞ福壽草
早咲のおくれではなし燕子花
筋隈も人の見眞似や人形見世
露霜に堪るちからや菊畑
人眞似にならぶや濱の濡千鳥
御ひゐきの種まく小田の蛙かな
芝居果あぶれ車の時雨けり

市川 壽美藏
坂東喜和六 東 鯉
中村鶴助 梅 圃
中村鶴藏 秀 雀
中村 芝 翫
中村 璃 寬
岩井 紫 若
市川權十郎 鯉 江
市川九藏 三 猿
尾上 幸 藏
坂東 彦十 郎
中村仲藏 秀 鶴

夏菊や花の名れもいさぎよき
蝶くやまた来て花の雫持て
曙に光りまばゆし百千鳥
いつ見ても眼かれせぬなり女夫星
よい水にゆき當りたる夏野哉
盃のその數とりやほとゝぎす
宇治川の先陣こゝに螢かな
振上げて重き小槌や觀世水
音に菊雨もちからや萩の上

尾上 多賀之丞
中村時藏 獅童
澤村田之助 田之介
澤村門之助 門之介
片岡 我當
岩井半四郎 杜若
片岡 我童
助高屋高助 高賀
尾上菊五郎 梅幸

多くは襲名披露などの扇子に書いて最良へ配つた發句か、當り役を詠じたものであるらしいが、三升や梅幸は永機門で名があり、東鯉は香以の手引で俳諧に入り「散蓮華といへば知らぬものなし」と評判された俳人であつた。とは云へ實際は發句を作らずとも傳統的に俳號を持ちつたへ、或は俳號を藝名に用ゐて來た手前、俳諧師の代表作で、いざとなれば取つくるつて居たのでその悉

くが紛れもない自作であるとは云へない。その代表作は大抵永機が引受けて梅年もそのおちこぼれを拾つて居たらしい。俳諧師殊に永機あたりの収入は、點料より寧ろ藝人社會の附届けが多分であつたさうだから喜んで代表作の望みに應じたものと見てよい。此『世當俳優三十六句撰』は表符を卑俗な赤色の勝つた彩色摺として、口繪に紋服でさんぎりの團洲が短冊を認めてゐる傍へ、同じくさんぎりの梅幸が半折に揮毫し了へた處を描き、狂言作者其水及び進三がその美事な筆蹟を感嘆顔に眺め、編者の久保田彦作が「天地一大劇場」の半折を起つて廣げてゐる圖がある。明治十四年出版された小菊本で、俳諧向としてよりは芝居の愛好者に對して賣廣められたものであるらしい。

吉原禮讚より藝妓美へ

俳句中心否俳句を背景として役者の評判記が出たからには、芝居道に握手して發展しつゝある藝妓のそれがなくてはならぬ筈である。彩霞園柳香の『藝妓三十六佳撰第一篇』が明治十五年一月、俳優のその粗雑な草双紙風の装幀でなく本表帯の上品な仕立て發兌されてゐる。吉原が名所の

一つで華魁が社会的に讚美された舊江戸時代には、古く享保十九年板の『俳諧櫻鏡』に廓内遊女の發句揃とも見るべきものが行はれたが、新東京は吉原と云ふより娼妓の賤むべく、それに代つて新橋柳橋に於て急激に發展した藝妓中心の新情調を愛する傾向に進んで居た。同じ吉原でも没趣味の華魁買よりも、藝とさうして俠んで賣出した仲の町の藝妓の方が通人の喜ぶところであつた。『藝妓三十六佳撰』は佳撰の名の如くその頃の流行語、別嬪を意味するので『俳優三十六句撰』の俳句に觀點を置いたものとは同一でない。それ故にこの書を俳諧の對象として取扱ふのは、當を得ないかも知れないが、藝妓の品定に俳句を以てしたのは『田舎源氏』のそれに似て時代の好尚を現はしたものとて、いはゞ新東京時代の賑やかしのつもりで紹介するのである。その上に俳句がこんな藝妓評判記にさへ色彩を添ふる事になつたのは、その一般化を證するものであるから強ち無用視するにも及ばないかと思ふ。戯作家假名垣魯文の序が此書の内容をよく傳へてゐるのでその後半を引く。

開運の今日を以て。維新前の舊きを惟へば、花柳俗を變。藝妓風を異にし。髪飾り。衣裳の好み。會て昔日の等類にあらず。東本履は駒下駄と地を踏かえ。素足を覆ふ。雪の足袋

は。彼梅唇の穿文に反し。故人春水今にあらば人情奇化に机を敲かん。妓に三十六箇年の。浪舊苔を一洗し。歌撰の員の名妓を集へ。其小傳を冒頭に据。自詠の句さへ添たるは風新柳の髪を梳る。柳香粹史が漫戯にして。蕙齋畫師が梅が香に。櫻の花を咲かすといはゞ彩霞園主の意には聊か耻る賛成ならむ歟。

時に明治十四年第十二月廿七日日本材木町の新居佛骨菴中の石室に筆を採つて南窓の日向に題す

猫々道人 假名垣魯文

綾の家榻庭の序文を次に載せ、淡彩で四人の藝妓の姿に魯文の小唄を題してある。本文は草双紙風の體裁で芳幾筆の似顔は同一輪廓であまり似てゐなさうである。三十六名妓の名とその句だけ掲げる。

いそくとつゝお過にけり三ケ日
 ほろ酔の吹かれこゝろや春の風
 舟へとて着るもの一ツ初ざくら

柳橋長嶋
 は
 柳ばし河内や
 ま
 柳橋
 息
 平

目たゝぬもまた一しほのすみれかな
かたこともやぶ鶯やありのまゝ
筑波根の裾やゆかりの菫草
初夢や覺ればかをる鉢の梅
まだ人の口はに乘らす初櫻
梅ほどに顔へ出けり屠蘇の酔
しる人の顔を見つける花火かな
わか竹や一節づゝを力にて
ゆびをらでまつや梅見のおやくそく
其ふしも藪鶯の訛りかな
傘をふはとくゞるや濡乙鳥
すらくくと雪晴そめる柳かな
また元の枝に花見る椿かな

柳ばし藤野
柳橋堺屋
御橋 浅
御橋 八
柳ばし長谷川
柳ばし和泉屋
柳ばし平泉
大坂丁萬屋
よし町富田屋
よし町いづつ屋
元大さか町
住よし町
元大坂丁いせや
住よし丁まつ野屋
小 秀

鶯のはつ音は低き小枝哉
待宵のくもり嬉しき柳かな
もどれとは誰が捨鐘ぞ夕ざくら
かなぶみのいろはもしらで猫の戀
田作りや三寶にのる身の果報
うぐひすや思いださねどわすられぬ
今朝の梅柳はしらぬ匂ひかな
つれなくも戻る寒さや梅の花
涼しさの風をいたゞく扇かな
遣り羽子や中のよいどし打うたれ
梅に鳥來るはづながら待れけり
草にさへ其名あればや女郎花
三すじほど椽に影さす柳かな

新吉原和泉とら
よし原長嶋
よし原長さきや
桃太郎
よし原
小 糸
仲の町
新よし原新大口
小 小ひな
吉原京町おわりや
小 小ちよ
日本橋
小 かね
丸本屋
からす森町丁字や
良
新ばし加賀町井田の軍
徳治
新ばしつち小川
小 かね
新橋武藏や
大 幸

笹啼ややつと見えしかん所
 爪びきに川風さそう涼かな
 彈初の七福神や三番叟
 浮草のこゝろ安さよ風任せ
 泡もりの香をさましけり眞桑瓜
 二三人連立て出る御慶哉
 朝菜やすゐな櫻の花の露

新はしからす磯町中むらや
 小つる
 新はし竹川町松屋
 小辰
 新はし日かげ丁豊實家
 新橋島森丁春家
 喜み
 日本はし大工町
 歌吉
 新はし日吉町三河屋
 幸吉
 新はし日かげ丁増見屋
 清吉

これらの句がみんな彼女たちの自作とは信じられぬ。魯文の序に「自詠の句をさへ」といふのは割引を要するが、柳ばしの「しう」の傳に「和哥を故文雄氏に學び」とあるのは歌人井上文雄なるべく、仲の町の「小撰」を評して「就中俳諧は感吟多し」と云ひ、新橋の徳治をば「俳句を善くす」と稱せるより見れば、悉く代作ではなくその嗜みのある妓もあつたであらう。小傳中に挿入した時代語に「應來妓」「猖々藝妓」「美膚的」「鼻下長」「アツブダナー」又「チアーンカンテ」といふ語中には舊時代のものもあるが、當時の花柳語として見れば面白い。容色に關して「今流行の

圓面」或は「當世最とも衆人の好く彼の圓面艶色なり」などの評語も風俗史的の資料になる。

俳優の趣味性は頗る洗鍊されてゐたので、傳統的に俳號を藝名の外に持つ約束があつたとは云へ、俳句が時代人に倦かれたとすればその評判記にこれを掲げる筈がない。況んや藝妓はむかしの遊女のやうな閨房に侍するを第一條件としないので、實淫制度から表面的なりとも開放された女性として、現代のカフェーに於ける女給美を渴仰する者と一般、時代人の好愛するところであつたから、彼女たちが發句を詠み、その繪姿に題された發句の喜ばれた點より察して、俳句が今日の映畫又はレコードの小唄の如く社會的に流行した事實を證據立てゝゐる。俳句が新聞雜誌のいろどりにさへ扱はれぬ現代より見て全く隔世の感がある。これこそ俳趣味の社會化ではないか。

俳壇の靜態と點取調の流行

明治俳家集を鳥瞰して

或る一人が俳壇的に成功するには、背後に連衆又は社中の集團的勢力を豫想しなければならぬ。俳壇の有名にならばなる程その背後に集團的の力が動いてゐる。これはいつの時代にも行はれる現象で、そこに俳壇の起因もあれば黨派的な争ひもそこに理由附けられる。俳壇なるものが文學的封建制の殘滓として、現代文學から拒否される所以もまたそこに存する。

もし俳壇がその正當な生存權を主張するとするならば、集團的な背景をすて、個人々々が作品の上に世間的批判を求めざる態度を取らなければならぬ——。その意味で今までの『現代俳句集』を更に人選の篩に掛けたもの、年刊を望みたい。綜合編輯の名に於て漫然たる小雜誌を中心とする集團的な動き、そこに少數の讀者を食らうとする現行の年刊俳句集の如きは斷じて自滅せしめなければならぬ——と思ふ。

然るに明治の早期その結果に於いて私の主張する計劃を發見しようとは思ひ設けなかつた。勿論俳壇の革新を意識してその正當な存在を具體化したものでないが、俳壇の背後に横たはる集團的勢力を無視して個人別に、安田雷石の編輯した『明治明 五十鈴川集』二冊の刊行是れである。編集の旨趣は雷石の序をしてこれを語らしめよう。

名を聞よりやがて面影はおしはからるゝ心地すると、吉田の法師はいはれたり。たゞ志に深切をもて交りを結ばんこそ心のまゝなれ。まして遠近の諸風子に文音の因み年に月に嵩まりて小櫃に餘れど、業のいとまなきに本意なく其酬ひだも等閑なりしが、去年の夏東京に遊びて一日語石庵を訪ひしに、談此ことに及びければ叟のいへらく、一の冊子を作りて報はんにしくなしと。幸ひに閑樹園ぬしも索繩して現今五十四家の漫吟を選出し、梓に上せて年頃の疎遠を償ふ。其殘れるは二編に出して後れたるを贖ふといふものは、生弓の甲斐の國人日下部の里に住る

明治十五年春三月

黄楊門雷石

時年七十又三

吉田の法師は兼好で『徒然草』の一章を引いたのである。語石庵は廣田精知、閑樹園は青山菊雄で二人とも聞えた宗匠である。編者雷石は甲斐の俳人漫々の子で多方面に涉つて風交してゐたので、平常の疎遠を此書を以て修睦すべく精知の勸告に従つた譯である。が、その句を選抄する標準が人物本位で、個人別に四季の句を配置して行く編纂法が、私のいふ純正な俳壇、主として作者の鳥瞰圖的な考察に價するものである。作者は高崎の惺庵爲流より伊豆の瀧の本連水に至る全國知名な俳人五十四家に就き、作者一人に春夏秋冬の一季十句づゝを一頁に擧げ、一作者に四頁を充て、四季四十句を各採録してあるから大躰の句振りを知らるゝが、作者の個性及び傾向を云々する資格をこれらの作家の持合せないのを遺憾とせねばならぬ。宗匠としてその名聲と位置から見れば東京の佳峰園等裁、小築庵春湖、京都の泮水園芹舎、三河の吳井園蓬宇は舊時代よりの老俳家で、東京の其角堂永機、雪中庵梅年、香楠居幹雄、太白堂吳仙、一具庵尋香、大阪の黃花庵南齡、出雲の釣年庵曲川は當時一流の俳諧師として指を折られ、且つ又後年賣名的の所爲があつたとは云へ、舊派に名をなした遠江の年立庵十湖、羽後の弄月園吟風、信濃の雪散屋其殘は新進作家として、孰れも此書の人物採擇に偏頗なきを實證してゐる。

賣出し作家と其の句評

雷石の『明治俳家五十鈴川集』は風交諸家へ親睦を表示する目的で編纂された事は前に述べた。その結果が集團的な動きを宗匠の背後から撤し去つたのみでない。沒批評的に宗匠と仰がるゝかれらの作品を比較判定する對象として二重の効果を呈する事となつたのである。等裁や春湖や過去の人々に就いては論じまい。永機や幹雄や一派の勢力を擁して俳壇の第一線に立てるものゝ、實際的な技倆をその四季の句を抄出して検討しよう。

春の夜もふるびて晝のはつ蛙

永機

さしておく花もひとへや更衣

白露やタやみつくるものゝはし

時雨來よ竹のあみ戸の青きうち

觀念的な句作態度に厭味を感じるが、風雅人として或る佗びた境地を持つてゐる。個人的にも水平線以上の作家たるを頷かせる。

梅年

商人もありて根岸の柳かな
ひとつゆく螢に草のあらしかな
かたはらに軻ほしてある紫苑哉
淺漬の切くち白しすゝはらひ

平板ながら描寫の躰を得てゐる。平淺な趣味であるが卑俗に落ちない。この程度の作家を發見するにも當時にあつては困難である。

幹雄

日最中もくらし椿のおつる音
夕だちの來て忘れけりけさの事
ひやくと庭つち踏て今朝の秋
寢ぬ人も立て敷するふとん哉

淡白な表現で技巧を求めないかの如く見えて、その内容には多分に俗氣をふくんでゐる。深みのない感想である。が、蔑視もされぬ。

吳仙

洲の草のそよぎは知りてことし鮎

又來るや卯の花くだし時あかり
初秋の夜風たつなり加茂河原
子まつりや藏のともしの机まで

感激のない躰屈な句である。しかし現實を見詰めてゐる。その點をより強く色彩附けたならばと思ふ。

尋香

ころがりて這ふにらち明く田螺哉
最うよしとおもふや夏の日暮かた
女郎花夜はおぼろのかげならん
枝炭や雪のしなへをありのまゝ

軽く「はゝあ」と合點させればそれで能事了れりとする態度が見える。月並的な俳趣味はかうした手法で栽培されて行つたのである。

南齡

散りぐちの今つくやうぞ夕さくら
休む閒を團扇遣ひやうちは賣

花市も鶏頭がちの残暑哉
窓の日は朝しばらくや水仙花

都會に生活する者のさうした経験、さうした気分があるといふに過ぎない。佛徒としての作者の主観は抹消されて影もとどめぬ。

月の夜のあかりの中の櫻かな
葉に風や青梅ちらりく見え
笠寺をわすれて過る残暑哉
ぬくもれとすゝめられけり水蕎麥

曲川

行脚の躰験から來た眞實性を持つてゐるが、それとても程度問題で個人的な色彩を強く見する純眞な境地を伴つてゐない。

もりあがるやうにふえけりはるの水
ふみこんでぬさにおくする清水哉
たなばたの逢ふ夜とゆるす端居哉

十湖

夕雲もそはずなりけり枯尾花

そこらあたりへ自分の句碑をやたらに建てた賣名俳人としてならば、これらの句は許せるかも知れないが、これで新進の名は負はせられない。

晴よともおもはず一日春の雨
薬玉や人呼ぶ鈴の鳴る座敷
夕月の赤きそらより秋の風
駄荷といて埃りかぶりぬとしの暮

吟風

碁なら定石より打てない型に入つてぬきさしのならぬ句躰である。併し當時としてはこれが安全第一の句作道でもあつた。

霞けりいつかは斯とおもひしを
神樂屋のひろ椽いそぐ毛蟲かな
溝ふたつまたぎ合けり萩すゝき
水ひきのまゝ桶にあり除夜の梅

其残

巧智を求めない單純性を認むるに吝でないが、それ以上の何ものをも望めない。それは作者よりも時代の非發展的傾向にあつた。

右に擧げた十人の作家に對してこれより以後、何をわれ／＼は期待し得るであらうか？。

有産階級と遊民の妥協

俳諧は遊民の文學として無産者の生活及び心理を藝術的に反映してきた。すくなくとも過去に於てはさうであつた。さうして階級的には或意味で社會的安全瓣の作用をさへつとめたのである。有産者からの妥協を拒否しないばかりか、場合によつては進んで握手を求めに行く。そこが現代のプロレタリア文學とは相容れない觀照點である。幫閒文學の汚名も時に著せられねばならなかつた。有産階級から遊民文學への妥協者として明治十四五年代に旦那俳人の多かつたこと、及びその旦那俳人が立机して宗匠となり點者として流行した事實を此『明治俳家五十鈴川集』から立證し得るのである。融々處ト早、桂花園桂花、無事庵鶯笠、素石園素石がその代表者である。前掲遠江の十湖、羽後の陰風も有産者の一人であつたからこゝに入れてもよいのだが、記述の便宜で別にしたのである。

融々處ト早は日本橋の素封家竹原氏であつた。祖母かつら女は月の江幽篁と號して追善『かつらかげ』を見ると、女性俳人としての技倆が知れる。ト早はその感化で早く由誓門に入り嘉永三年『俳諧しは竈』といふ著作を板行してゐる。

高杯で出す客柄や草の餅
ト 早

聞て行新樹の中の神樂哉

末枯て塔のうつるや湖のうへ

庭越に野を見る家や冬ごもり

高杯に草餅のもてなしは無産者の眼ひ知らざる生活である。が、次の三句は描寫と手法とに於て當時の宗匠にひけを取るところがない。

桂花園桂花は幸島氏、日本橋室町のそろばん屋で裕福な聞えがあり、古俳人の筆蹟を無數に藏するを以て好事家に羨望されてゐた。ずつと後の事だが、雑誌『太陽』の明治十二俳仙に子規、紅葉らと共に當選してゐる。

親鳥によばれてはなす柳哉

桂花

松のふりそれも清水のあとの事

名月や女なるらん簾越し

葛ひと葉二葉氷へこぼれけり

繊細な手法であるが情趣を句中にたゞへて、そろばん屋の旦那にしては出来過ぎてゐる。點者の仲間入りをしておくれを取らなかつたらう。

素石園素石は木村氏、京都府典事に任ぜられ、後、三井物産會社に入つて副社長となつた。向島の三圍にその句碑がある。餘剰生活者としては趣味の高い人で、古俳書の蒐集を以て俳人間に敬愛された。

薄くらき林のなかの椿かな

素石

蚊の中へおいて出て行まくら哉

立秋の艸木のうへや不盡の山

日の晝を時雨て居るや鰻かき

平淺で調子は高くない。それでゐて生動の態がある。机上の題詠として性のいゝ方である。それも一つは趣味的鑑賞から來たのであらう。

無事庵鶯笠は鹽坪氏、小石川關口のはせを庵に居住したが、東京府大參事の職を勤めた人で、流石に憚つて芭蕉庵の號は用ひなかつた。鶯笠は鳳朗の前號でその三世を嗣いだのである。

花に來て上野の山のふみ心

鶯笠

水は眼に冷たき蟬の木下かな

蝶ひとつ秋に逢ひけり草の風

うねたちし大根畑やちる木の葉

自然の平靜な印象でそれだけに俗氣がない。だから月並的臭味のないのを先づ取柄とせねばならぬ。さうして遂にそこに安住して了つたのである。

私はこれらの旦那俳人に望みをかけて紹介したのでない。俳諧が梨園及び花街より有産者階級の一部を風靡して、その遊民的な文學から解消しつゝあつた事實に注意を惹きさへすれば、私はそれで叙述の効果を信するだけの事である。

點取流行と句調しらべ

然らば私のいふ集團的動きは、何を目標に俳壇の背後に動いてゐたのであるか。曰く點取發句である。印刷術の普及した現代では、雜誌を中心に大衆俳人の向背を観察されるが、當時はそれ／＼の流派で月並の冊子を頒布したとはいへ木板手刷の微々たる配本部数であつた。『明倫雜誌』の如き活字印刷は普く行はれてゐたのでない。點取即ち或る宗匠の高點に入る景品獲得の方法にその大衆的な一致行動を見らるゝのである。

點取は附合から起つたので、同好者が寄り合つて連句——附合を行ふ。そしてその巻を宗匠の許にさし出して批判を乞ふ。宗匠はその附句の佳なるものに墨を引き、それを長點又平點と稱したのである。後には點印を定めてこれを押す事になつた。宗匠の點を施した巻が作者の許に戻つて來ると、再び寄り合つて巻を開き、その點をかぞへて一番點数の多いものを優勝者に定めたのである。川柳はその高點句から獨立したので、柄井川柳といふ宗匠の高點句であるから川柳點と呼ばれたのであつた。明治以前から連句は面倒な規則に縛られて衰微の傾向がある。それと正比例

して發句は年々流行を來した。そこで宗匠も發句ばかりの巻に對して附合と同じく批點を施して點取熱を煽つた。點取發句の同好者は宗匠の嗜好を推測して、その高點を得る事に汲々乎として憂身を寢すばかりにいろ／＼研究する處があつた。附合には早く『俳諧鑄』が板行されて、宗匠の好み、高點の例句を擧げて作者の便をはかつた。有名な「燈籠になき玉菊が禮に來る」も『俳諧鑄』に載する高點句であつた。明治に至つて『俳諧鑄』と同一體裁の發句の高點句便覽と云ふべきものが發行された。鳳井五明編の『現今撰句百家集』二冊である。傍題に、「一名口調のしるべ」と記されてゐるのが高點句便覽の意味である。

藤庵太年のはし書にいふ。

俳諧世に行なはるゝにしたがひ、發句の點取てふもの猶盛なれば判するものも少なからず。是皆正風の一路なりといへどもいさゝか癖ありて一樣ならず、句者も撰者の味ひをよう探り得たる熟練あり。されど初心のともがらは、その家々の好める味ひを知らざれば勝利を得がたし。仍て鳳井五明叟其味ひをしらしめんが爲に、舌打して五味七味をわかち調へ、諸家の撰まれし秀句をものされし此ふみよ。點取者には龍の腮の玉よりも得がたき重寶な

らんとはし書きなしつつ、味ふものは藤庵のあるじ也。

十五年初夏

その體裁は各宗匠一人づゝに雅號及び姓氏、住所を記し、高點十句を例示し、上段にその宗匠の趣向の好み、言廻しの新古を簡約して評し、軸として宗匠の自詠を擧げ、上下二冊に外題の如く一百名の宗匠を網羅してゐる。一々の宗匠とその好み、規ひどころ、高點の例を引くのは甚だ煩はしいし、又その必要もないが、宗匠は殆んど東京在住者に限られ、地方は横濱の閑月庵醉外、金港舎其峰、所澤の菊守園喜山、静岡の對梅宇乙彦、白兔園知來、前橋の有竹居正義の六人のみである。編者五明は和田氏、京橋南小田原町の人で、百家の一人に自選してゐるが、點取發句には深刻な經驗を持つてゐたらしく穿つた批評を下してゐる。明治十五年京橋の黨志堂發兌でかなりの賣行きがあつたと見えて用紙及び印刷の異なるものが二種ある。

金羅一派の壓倒的人氣

點取の卑陋とその弊害をよく知つてゐたが、點取を全く拒否する態度は當時の宗匠には取れな

かつた。かれらの生活は點取を拒否すれば忽ち脅迫さるゝからであつた。だから永機のやうな明敏な人物も幹雄のやうな頑固な男も、點取發句の前には沈黙して唯々諾々その點料の多きを食るだけであつた。『撰句百家集』を通じて點取連の間に流行した宗匠の勢力の消長と共に、その後

に於ける大衆的動きの一部が窺はれる。



俳壇の靜態と點取調の流行

教林明社、小築庵春湖

無事庵鶯笠 鹽坪氏
大夢庵千畝 外山氏

忍川巢連、東杵庵月彦

映旭亭蓮所
隨巢三令 倉持氏

白雪連、夜雪庵金羅

夜鶴庵覺齋 徳野氏
珍齋其鸞 辻氏
夜琴庵乙羅 秋山氏

右の表には去就の確定しない者はその一門から除いたので、雪門系統が全盛のやうに見えるが、必ずしも然りとは断じられない。寧ろそれより夜雪庵金羅が點取連には非常の人氣を博して、その白雪連は俳壇を壓倒するが如き勢ひで席捲したのであつた。金羅の人氣は彼の巧妙な策略によるといふ風聞より、金羅その人の溢るゝ才智は時代の嗜好を察して、彼の高點を覘ふ者をして容易にその標的を落し得る人情第一を以て、川柳に陪せざる程度で世話及び穿ちを高調したのが、點取連の喝采するところとなつたのだと評したい。『撰句百家集』の評判にも、

人情第一に句の姿大まかに又花やかに作るべし。談林派のおかしみに高點あり。撰句の内
出過ぬはの句、夫のるすの句味ふべし。

とあるその「出過ぬは」の句とは

出 過 ぬ は 人 も 芳 は し 落 の と う

右をさしたので發句を以て世道人心の教化教材として、かの教導職の設置を見た前期の爲政者を喜ばせる程度の勸善主義の「出る杭は打たるゝ」の俗諺を換骨したまでである、又、「夫のるす」の句とは

夫 の る す 月 さ へ 入 れ ず 戸 さ し け り

これとても男猫をも膝にはよせぬといふ貞婦訓を風雅な「月さへ入れず」と取りなしたもので、人情味たつぶりの世話句である。それらの淺薄な道義觀念よりも、彼の關心は次のやうな句振りにあつたと思ふ。

朝 寒 を 抱 へ て 來 る や 手 習 子
庵 安 し 戸 が 外 れ て も 梅 薫 る

俳壇の靜態と點取調の流行

彼の「一門なる夜鶴庵覺齋は「高點は平手世話場に多かり」と評された如く、
るすにして二日ぶり掃く椿かな

三味せんの糸の切閒やほとゝぎす

風俗詩的な色彩あるものを高點句に取つて點取連を悦に入らせてゐた。同じく夜琴庵乙羅は「流行調にして就中人情戀句に高點あり」と沙汰され、

犬吼た夜にへる寺の熟柿哉

問屋場や角力の詰た荷が残る

「犬吼た夜」に柿盗人を利かせ、「角力の詰た荷」に素人力では持てあます重荷を響かせてゐる如く、川柳と隔ること僅に數歩の差である。殊に珍齋其鸞は「現在見出しの句に高點あり。もつとも人情をうがち忠孝貞に叶へる句を第一として作るべし」と高點句の秘訣を傳へたやうに、

風呂敷へ寝た子をおろす董かな

結納の荷と入れ替る乙鳥哉

點取の流行調は確にこゝにあつたであらうと首肯せしむる寫實的世相觀である。風俗詩的描寫

である。

金羅の夜雪庵が開庵日淺きにもかゝはらず、點取を以て東京第一の繁昌を誇るに至つたのは、この人情第一主義にあつたのである。

追録

菊守園見外の著に『近古二十四歌仙集』を擧げる筈でつい書き落した。この書は見外が對坐して護物、大梅、梅室の巨匠より、見外と共に東京時代まで生存した蟻兄、鼎左らと行つた歌仙を録したもので、訥庵の漢文序及び附録に遊歴中の發句二十句を記してある。安政六年の出版で明治以前のものながら見外の俳風手腕を見るによい。

一日庵江三が門人朝三の「清容帖」に序文を寄せ、また芭蕉翁百五十回追福の俳諧をその一日庵で行ひ、奥羽の連衆五十六人の出席があつたことを「清容帳」によつて知つた。序文に癸卯とあるから天保十四年である。この本の題簽に **清容帖** 俳句之部 とあるので俳句の稱呼は其角の『虚栗』以來慣用された證據となる事を序ながら記しておく。

大非居葱玉の『またよしだ』は明治元年の刊本で葱玉が藻魚庵大蟲と共に行脚に出て、名古屋から伊賀に廻つた旅中の俳諧を収めたものである。

瓢竹庵の櫻の木もてつくれる祖翁の尊像を伊賀の養瓜より授りければ、山野に負ひ逆旅に
いだきて遠く武江の草庵に歸り、これを青々社中の本尊と崇め申に

善光の白たにもなく雪の庵

大蟲

火桶を中に語る旅瘦

葱玉

右首尾行を掲げ、且つ知友の俳句を録せる住所別に「東京」と明記してある。東京の新都名が俳書に見える嚆矢であらう。大蟲の跋にみづから池永大蟲と書し嘗て問題となつた池永氏説をうら書きせる點などをおもしろく見た。

月並集と運座の交錯的沿革

運座法の改良と月並集

俳句の點取調に相對的の語義を有する月並集に就て考察の必要あるは、明治俳諧史に課せられた當然な問題として云ふをまたない。此の月並といふ言葉は一部の俳人に信ぜられる如く俳句の批評上から生じた明治の新造語ではない。遠く王朝の末期詩歌の上に一定の會が行はるればそれを月並の會と稱したのが、連歌の道にも現はれて、頓阿に日並の發句があれば里村家に月並の連歌がある風に、日並月並と對句的に指稱されたのであつた。俳句の月並はその連歌から傳承された用語に外ならない。併し月並の語を集冊の外題とした板本は師竹庵吾山の『月並發句合』安永十年刊が現存俳書として年代的に古い。その月並の集冊が發句の點取と交渉を持つ事となつて、いはゆる月並調を發生したのは運座の發達に依つてである。運座は雪門系統の葎雪庵午心が偶然の思ひ附で工夫したのであつた。午心の門人樞之本北元の句集『紙ついで』文政十年刊に事の起りを記してあ

るが、その方法は説明してない。察するに今日の膝廻し式の初歩的なもので、或人数に相當する季題を提出してそれを一人數題づゝ、順次題詠的に即吟した發句を無記名で清書し宗匠の即點を求めたものであつたらう。『紙ついえ』によると、午心の師完來の批點を乞ふたのである。その後運座の發句に即點を施して月並集の中に掲出したのも、その北元で『天保權之本月並』と題する板本に、

續きて池魚の災にあひ、遠く金龍山の麓にかくれて、

月花に損取かへす場末哉

と、よめりしも去年の秋の事なりき。こたび連中の助勢によりて江戸のまん中に出たり。

月並と運座會を合せて一趣向の催を始む。ときに天保七申の年五月

と北元の述懐せる「月並と運座會を合せて」といふのが、まさしく運座と月並の集冊との直接的交渉を有するに至つた事を語つてゐる。尤も北元が月並發句集を板に起したのはそれより以前で、彼の編せる『錦袋集』文政三の奥附に

全撰
月並發句集 全一集
文化丑之年分出来
文政寅之年分出来
年々本出来
價百冊二泉

右の如く文化十四年既に『月並發句集』を開板した譯だが、全撰とあるのはその著『戀の栞』の廣告の次にあるから北元の名を略したので、左註の「年々本出来」で見ると、月並とは稱するものゝ年刊的に出して行つたので、月々板行したものでない。但し前掲、天保七年分の『權之本月並』は「元日披」から「歳籠」まで十二ヶ月間の板下様式が月によつて各異り、月刊的の刷物を一年分合冊した體裁であるから、その月の寄せ句の即點をその月板に起して配冊したものであらう。これこそ純粹に月並的の月並集とも云ひ得べく、現代語に翻譯すれば即ち正しく『俳句月刊』である。此月並集は北元の門人迎春庵三正が權之本二世を嗣ぎ、北元歿後も月刊を繼續したものと如く、たゞ亥年とあるだけで何年頃のものか知れないが、一年分の綴り込みが私の手許に揃つてゐる。文政以後の月並集は北元一派に限らず、田喜庵護物の『水魚連月並句合』その他が現存するのに、こゝに北元の月並集をのみ挙げたのは『紙ついえ』の運座の起源に關聯して、彼が運

座と月並集とを相即不離のものたらしめた點を指示する便宜上の記述で、いはゆる月並調は北元より發生したかの如く誤解してはならない。月並の集冊は寄せ句として月々の出吟を四方に募つて、これが採點と抜句とを發表するのが目的で、北元が月並運座の句をこれに添へたのが彼の云ふ一趣向であつたのだ。明治以後の月並集は悉く寄せ句本位で、開卷その日の運座の秀逸を必ず附録してある。北元が早くその先例を開いた結果である。

縁日の奉燈風呂屋の掛額

毎月一定の寄せ句を催して開板したのは運座の考案される以前からの事で、吾山の『月並發句合』の如きもその一本であるが、大抵年刊的に編纂されたので月並の月並集たる月並的の出版でなかつた。こゝでも北元と交渉を持つことになるが『坂本丁成田山旅宿奉燈』の句合は、催主午月庵の手で北元の評を求めその五點以上の發句を一枚刷にしたもので、欄外に二百七十九會目とあるので、天保七年から逆に毎月の催しとしてかぞへて行くと、第一回は文化十二年であつて『錦袋集』の奥附に見える『月並發句集』の板行より二年前になる。又、田喜菴獲物評の『水魚連月

並句合』のたゞ「申ノ三月分」とあつて年號を省いた集冊に、「三拾六會目」とあるのを假に獲物生前の申年天保七年とすればその三年前、天保五年から引つゞき催された事となるが、其抜句に地方に住む作者の名が見えるので、これも同じく寄せ句的な催しで運座とは没交渉な刷物である。同じく田喜庵評の『銀町觀音堂奉燈月次句合』もその體裁に變化がないので、天保時代には運座は一部分に行はれたのみで、一般的に流行するまでには至らなかつたのであらう。然るに合歡庵魯心評の月並集で『辛亥三月分』とあるのは嘉永四年三月の出版で、天地人の順位を合點法で格附け、作者には地方人が多いので、これも寄せ句なること疑ひないけれども、集中に「月並定會運坐并百句合」共として六印以上の抜句を掲げてあるので、嘉永年間になつて漸く運座が月並的に開催された一般化を證するものと云ひ得る。月並的な寄せ句の目當は詠草に添へる入花即ち出吟料にあるので、宗匠の點料を差引いて幾分の餘剩あればこれを出版費に充當し、社寺の奉燈を以てその月並的な行事としたのであつた。弘化四年の『芝はまゝつ町むさし風呂掛額』といふのや嘉永四年の『築地不二見樓掛額』とあるのやを一樣に月並的の催しとは見難いが、當日兼題として別評を載せた分は開卷運座の行はれた事を意味する。奉燈は縁日で賑ふ寺社で、掛額は人出入

のしげく人目に觸れる寄席や風呂屋で催したものが多かつた。別に庵中月並といふのは點者たる宗匠自庵の主催で、これは特に掛額など、せず月並の集冊に入選句を掲載するだけの事であつた。點取と月並とは同一視されてゐるが、發句の點取は附合のそれとは相違して運座の抜句の點_{てんじゆ}を争ふので、寄せ句中心の月並句には多少の風流氣が作者にあるけれど、運座の點取になると、たゞ點の多寡と景物を覘ふ甚だ漫風雅なものであつた。其點に兩者の心理的差違を認められるものゝ、結局は同一不二の俳句的遊戯で文學鑑賞の對象となる可きものではなかつた。が發句の點取としての運座及び月並調の起因としての月並集は明治時代に入るといよいよ俳壇的に跋扈して、その排斥が新派俳句の提唱される動機となつた程なので、その依つて來る所以及び變遷を上述した次第である。明治時代の月並及び運座資料として蒐集して置いたものでは説明不十分な爲め、勢ひ江戸時代にまで溯及して記述の冗長となつたのは是非もない。

此處で筆を明治時代の本題に戻して、前回點取調を以て人氣を萃めた夜雪庵金羅の月並集に於ける位置をうかがふと、發句の點取調と正比例して大衆的な寄せ句、月並的な催しには金羅が最も一般人に迎合されたやうであるから、手許に存する明治八年の『東照宮奉燈』同十一年の『萬

安樓掛額』同十七年の『登瀛集』の解説と共に、金羅の人情第一を標榜する點取調が、月並的な集冊に如何に反映してゐるかを述べて見よう。

寄せ句の高点と金羅調

夜雪庵金羅の月並的な催しで最も早期のものは『芝山内東照宮小祭奉燈句集』であらう。明治八年四月の催しで表紙には櫻と唐櫃との彩色刷の繪があつて、外題も本文の板下も金羅の自筆である。本文は夜雪庵宗匠正斧として秀逸、六印、甘吟の三等級を付してその抜句をあげ、花雪菴先生評として花曉女といふ女流作者の副評を附してある。本評の秀逸

懸茶屋の口まめ鳥や花のやま 化 悉

この作者は牛込揚場の米問屋で田中氏、後に夜莊庵と名乗つて白雪連の宗匠となつたが、點取の上手と評判されその爲め身代を棒に振つたと云はれる。それに悟友は稻の家、碧海は後の吏登齋で運座に人氣のあつた宗匠だが、この頃から點取に熱中したらしく抜句にその名が見える。

巢を立たけふ憎うなる鳥かな いろは

乙鳥や叩いて見せる鏗ぶし
我に氣のもどれば寒し花の中
人去て花の誠の月夜かな

齡 壽
鱗 昇
其 昇

巢にある雛の中は愛らしいが、一人前の鳥となるけふはもういつもの憎い鳥だといふ人情の落ち、乾物屋で鏗節の品質を保證する店前の情景、こゝいらが金羅の特別な好みであつた。次の二句はこれから以後の月並や運座に繰返されて鼻につく月並臭の甚だしいもので、然も常に高點になる不思議な魅惑のある句なのであつた。明治十一年出版の『嶋原温泉萬安樓永代掛額四季三句合』も牡丹を圖案化した色摺の表紙で、「永代掛額」とある通り月並的な催してないが、太白堂吳仙、桂花園桂花、五窓樓千吟、不説庵五雀の知名な宗匠に金羅を加へて五判者に依頼した大衆的の寄せ句であつた。金羅の高點を見ると、

うめ咲やたま〜來れば門に錠
抱た兒に廻してみせる切籠かな
蚕には借る約束の嫁入かな

梅 青
春 雄
三千守

おぼる夜や舟へ見にやる落し櫛
ちと早い髭もそらせてはつ袷

アカサカ 乙 子
白雪レ 悟 友

折角梅を目あてに來たのに相憎の留守といはずして「門に錠」と描寫して、餘情を持たせた技巧は一概にはしりぞけられないが、そこが月並調の臭い蓋でもある。切籠を廻してあやしてゐるその子に亡き母の俤を見せた人情味、蚕時の忙しさを強調した嫁入の約束、おぼる夜の舟中の嬉曳を落し櫛で察しさせたりして、然も川柳の下劣にならないのが金羅を張り落したこれら點取調の特長である。軽いところでは此初袷などは誰にでも向く通り句であつたらう。『登瀛集』は純然たる寄せ句で紀伊の人古樂堂友甫の還曆賀集であるが、冊子の體裁は月並集と同一なのでこゝに挿入した。明治十七年三月廿七日その開卷を星が岡の清風亭で行つたので、本評は小築庵春湖、花の本靜正、半日庵芳律、香楠居幹雄の四評で金羅は四季通評を受持つてゐる。

吹けば火のある燃さしやきり〜す
門口を出る禮者まつ禮者かな
手を借りて背中の晝寝下しけり

千 角
玉 潭
瓢 庵

豆腐屋の荷にからみけり鳶風

一 梅

此きりくすは蟬で、薪の燃さしを吹いて火を起さうとする動作に淋しさを鳴きそへる。禮者のかち合ひは川柳的な取材である。背中の晝寝とあれば無心な子にうたがひない上に「手を借りて」とまで説明し、鳶に油揚の諺から豆腐屋の荷へ鳶風の趣向も落語的なさげを思はせる。その中に

破れ葉の石路に面出す躑かな

千 角

此句は嘯山の『俳諧古選』寶曆十三年刊に出てゐる調柳の發句である。暗合かは知らないが、金羅はさうした古句を諳する教養を持合はせなかつた事を此一句で暴露してゐる。

談林座の復活と高點調べ

附合から起つた點取は明治になつて發句の方に侵略され、本家の附合は點取から見離されて没落したかに見える。大垣園東岡の『明治俳諧姿見集』新撰は古今附合の模範的な作例を集めて明治十五年小本二冊に開板されたのだが、點取には關係なく、戀の句を廣く集めて時の流行變化を移しますく、俳諧の餘情を照らさむ」が爲めに編集したものであつた。私の所持する稿本、「ふところ

かゞみ』は季堂蚤二といふ人の手寫らしく、東京時代に附合の高點句を吟味した唯一のもので、明治十五年から同十六七年までの間に編輯され遂に未刊行で了つたものらしい。明和五年に初編を出した露竹舎雪成編『俳諧鑄』の如く知名の點者、その住所附、點者の好み、及び高點句を例示し、高點句にはその前句をあげ、點者の畫像を挿入した點に進歩が見える。何よりも驚異さるゝのは點者の顔觸れである。江戸座の俳系を繼承せる諸點者が果してこんなに多く明治十五六年代に存在したであらうか。奇怪な感想に撲たるゝが、本姓及び宿所を明記してゐるのだから疑惑の餘地がない。『俳諧鑄』時代の堂々たる點者の復活である。

- | | | | | | |
|-----|-------|-----|----|-------|-------|
| 深川座 | 木者庵湖十 | 桐淵氏 | 十世 | 碌々庵石腸 | 野上氏 |
| | 老鼠軒山夕 | 小林氏 | | 霜柱菴戀稻 | 明田氏 |
| | | | 三世 | | |
| 菊童派 | 秋英齋菊童 | 落合氏 | | 二巢庵蠶二 | 香川氏 |
| | 寛裕齋魚淵 | 落合氏 | | | |
| 宗因座 | 春艸菴里從 | 田澤氏 | | 六造派 | 仁寶庵九歌 |
| | | | | | 岩田氏 |

月並集と運座の交錯的沿革

古常菴月窓	土岐氏	聾齋左籛	中村氏
齡雲齋點瑟	窪田氏	梅隣庵五璉	木村氏
景雲齋佳風	山本氏	蛭菴髪々	朝倉氏
彩雲齋岩谷	鈴木氏	春秋齋花縣	大久保氏
芦酒屋月丸	井上氏	遙雲齋社來	安中氏
抱翠園夏曉	中原氏		

談林座

談林座の點者は十一名、深川座は四名、菊童派は三名、宗因座は一名、六造派は一名、合計二十一點者が東京で附合の點業を開いて生活してゐたとすれば、其行動の杳として聞えなかつたのは不可解である。これらの諸點者で系統の知らるゝは談林座の人々で、これも家藏の一陽井素外編『梅翁宗因發句集』の西山家連誹系譜に對し、文政六年板以後の分を追加した一寫本に照らして判然するのである。前記の點者に關する部分のみを左に抄録しやう。

五世左籛

笠遙雲齋、安政四丁巳年九月判ヲ免ス 中村姓
丑五月 景雲齋左籛ト更 明治十五年四月幽松ト更 古常庵ト號ス

五璉	笠家	梅隣庵	慶應二寅二月判者ヲ免ス	木村姓
佳風	同	景雲齋	明治五申年二月判ヲ充ス	山本姓
岩谷	同	彩雲齋	明治八亥年二月おなじく	鈴木姓
社來	同	梅陰ト號	同 十年おなじく	安中姓
花縣	同	春秋齋	同 年十月おなじく	大久保姓
月丸	同	芦の家	同 十年丑五月おなじく	井上姓
點瑟	同	齡雲齋	同 十五年四月判ヲ充ス	中久木姓

右の系圖には髪々、夏曉の兩名が洩れ、點瑟の窪田氏が中久木姓とあるのが相違してゐるから、『ふところかゞみ』は右系圖以後の起稿である事が判明するので、それらの諸點者が介立したのは明治十五年を距ること一兩年を過ぎまいと推察さるゝのである。畫像を見ても剃髮の十徳姿か、

斬切で髪を分けてゐるかで、丁髷は五瓊一人であるのから見て明治時代の人物畫に違ひない。談林座の宗家は豊齋左藤で系圖の古常庵を月窓に譲つて豊齋と改號したのであらう。

「ふところかゞみ」には

談 林 派

豊 齋 左 藤

宿所 牛込辨天町六十六番地

俗名 中村 鈍

本名住所を記した上、その高點評に、

利前にかはることなし、都而季のつれたる句、戀の二句目、難場の跡にて高點多し、見違、動かしよし、又、用の附なれば自を引づるなどの偏屈はいはず。

とあるので、此高點が附合に關するものなること論なく、當時發句の點取以外に附合の高點争ひが復活した事を承認せねばならない。

高點句の吟味と附け肌

明治の『俳諧鑑』とも云ふべき『ふところかゞみ』の高點句には必ず前句を掲げて、附句の考案を再吟味させる方法を取つたのは確に一進歩であつた。談林座の五瓊は「好ききらい道具なし

取なし附、附込句に手柄あり」と評されてゐるが、

前句 町 並 の 窮 屈 ら し き 半 籬

呼 べ て 急 に 向 け ぬ 竹 賣

吉原の小見世を半籬といふが、この前句はその道の狭い事を詠んでゐるので、竿竹賣を持ち出して振り向かうとすれば兩側の家に竹が支えて、呼ばれても急には返事もされないと附けたのである。「附込句に手柄あり」といふ評はこんな趣向をさしたのであらう。宗因坐の里従といふ點者は「おかしみ、珍敷句をよしとする」とあるが、

晝 中 は 遊 び に 出 た る 格 子 先

持 て 見 た い と 人 形 を 抱 く

これも吉原の前句で夜は格子の内に張見世をして、野坡の「ほととぎす顔の出されぬ格子かな」をかこつ譯だけけれど、晝間は大びらで格子先へ出られる身の上を覗つて、逢ひに來たをここに向つて早く身上りをしてこんな子を持つて見たいと、人形を抱きしめる嬌態にさうした境涯の女のおかしみがある。

談林坐の社來は世話及び人情をその好みに擧げてある通り、その高點に

待て 居るよと 寄て 頼すり

伸上り 歸る 里子の うしろ かけ

前句の「待て」といひ「頼すり」といふ形容が戀の句なる事を暗示させるが、附句は見立替をして里子のたづねて來た歸りがけ、今度來るのを「待つてゐる」と駈寄つて頼すりをした上そのうしろの姿の見えるまで、伸上つて生母の見送る躰とした世話場の描寫がいき／＼してゐる。六遣派とはどういふ系統だか不案内であるが、その點者の九歌は評語に「おかしみある句、はづみある句、季節入たる句、都て不用意の句に手柄あるなり」とある風に

かたい 息子 を 持た 仕合せ

打石 の 上 に 足袋屋 の 夕涼み

俄 晴 戸袋 へ 來る 夏蜻蛉

ひめ 糊踏 だ 子供 泣出す

身持の堅い俵を足袋屋と見立て、よそののらどもは涼みをかこつけに惡所へ足を向けるのに、

商賣道具の打石へ腰をかけて涼風に吹かれてゐる躰である。此前句と附句はちと離れすぎ、言葉を補はなければ二句の交渉がはつきりしないやうだ。次は戸袋にとんぼの來る俄日和なので、洗濯ものを糊づけにするその糊盆に、とんぼを取らうとしてぐにやりと踏み込んで、こどもが泣き出したといふ附句である。前の夕涼み、この夏蜻蛉に「季節入たる句」の手柄を例示したので、付け方の不用意な技巧もうなづかれよう。深川坐の湖十は「總て手強き方よろし」と評され、その好みの一つに刀劍をあげてある。又「手ばしこく拵へたる句よし」とあるが、

忍び 足して は 障子 へ 舌の 鑿

死にそこなひの 双物もぎとる

といふ附句がそれに恰當してゐる。前句に舌の鑿とついて附句に双物とうけたのは、決して巧者な作でないが、障子を舌でなめて小さい覗き穴をそつと拵へたのは、部屋の中に何か秘密が行はれてゐる爲めと解して、危ふく自害するのを見届けて双物をもぎ取つたといふ説明的描寫が喜ばれるのであらう。評言の如く「手強き」趣向で一句の拵へも「手はしこく」出來てゐる。

概して人情の機微に觸れてゐる附合の高點句、が同じく人情第一の點發句取調と共に此頃の時代傾向であつた事を以上によつて認めてよからう。

類題句集の頻出と新季題

素兄の行脚とおくの雪道

没風流な點取發句の争ひは地方へ蔓延して行つたが、地方から東京へ出て来て點取には目を呉れず、俳行脚としての體驗を得る志を持った人がたまにはあつた。周防の人で『おくの雪道』の著者玉心堂素兄をその一人に擧げる。

千里の外に旅寝して山水風月に遊戯三昧なる者は誰ぞ。玉心堂素兄老人是なり。老人周防宮市の人にして其名を聞こと久し。茲に松島の行有や、風月三昧の老匠にあらざらんには此逸事をなすに至らむや。來て紀行なりぬと告ぐ。片言を記し請ふ所に隨ひ、且七十八の老年にして斯集の精華あるをよろこぶ。

壬午 晩 春

拂庵 春湖 春湖

序して春湖がその人物を紹介した如く、素兄は嘉永時代『内海流行百家發句集』の作家として、

河内屋榮三郎の通稱よりは且暮園の庵號で中國に聞えた梅室門人であつた。春湖の序に壬午とある干支は明治十五年になるが、素兄が行脚の志で東京へやつて來たのはその前年で、深川の素石園に三河から上京した老俳蓬宇と寄寓してゐた。芭蕉の言葉といふ、東海道の一すじしらぬ人、風雅におぼつかなし」とは『韻塞』元禄十一年刊に許六の記録するところだが、既に東海道の一部は汽車一日の旅である。行脚生活を體驗するには汽車の煤煙のかゝらぬ土地々々であらねばならぬ。素兄は『奥の細道』を愛誦して行路難の今昔を傍證的にさぐり、二百年前の旅愁を呼吸するため、明治十四年十一月二十日東京から雪のみちのくへの行脚に向つた。彼が出立に際し

同行梅與は道にこゝろざし深く、余があとを慕ひ來りて雪路の勞を介んとす。

と、矢立のはじめに記せる口吻に芭蕉と會良との關係を彷彿させてゐるが、日光の満願寺で大講義講厚上人に謁し、本院の俳席に列したのは、羽黒山の南谷で會覺阿闍梨に謁し、本で俳諧を興行した古例に擬したのであらう。素兄の日光における發句を碑に刻して、

周防 人

七十七 翁 素兄

冬がれも古き

面 影なき朝日かな

明治十四年辛巳仲冬

脊

彦坂 謹厚 建立
國府 成順

これを誇らしく『おくの雪道』に掲げたのは、謙抑な古人の敢てなさるところなので、素兄の心事までが見透かされるやうだが、その見聞に必ず『奥の細道』を引證し、裏見の瀧より十町の大日堂にて、「土人曾良雜髮の地と言ふは誤なり」とて、その「旅立曉髮を剃て、墨染にさまをかえ」とある本文を以て口碑を訂し、又

日光山を立て今市驛街道半より白川街道、大渡舟生絹川わたし玉生驛

訪

玉生氏

下野國鹽谷郡玉生の驛長玉生氏の家は、芭蕉翁一夜宿り給ひし傳へありしを未足老人其證を得て書るものあり、日光よりの順路さも有るべし。

『奥の細道』の本文には記してないが、曾良の日記に

四月二日

玉入村名主方泊

按に不入村玉入村と云は、鉢石より程近し。當時北總佐倉堀田侯の御領分也。

右「名主方泊」に該當するから飛鳥園一叟の左註に照らして新發見の報告と云はねばならぬ。未足は甘海の初號であるがその考證を経て「書るもの」に接したらばと思ふ。那須の殺生石は『奥の細道』の本文にあるのと現存のものは同一か否か疑問とされてゐるが、素兄は

那須野原

東西 拾三里
南北 七里

殺生石は温泉の山の麓にありしを安政中の洪水に山崩れ墳を埋む、水あふれて人家をながす。湯本はむかしにもどりたれども、殺生石は名のみ残り。

安政の洪水に流失した殺生石が明治十四年には「名のみ残り」で存在しなかつた事實を證言してゐる。素兄は行く／＼名所、古蹟に就いて見聞するところを録してゐるが、遂に松島で越年し

歳 旦

太はしや千島の影を膝の上
此の句で擱筆して明治十五年『おくの雪道』の記事に彩色の挿繪を入れて東京で板行したのである。

月並集を材料の類題句集

月並的に催した寄せ句の秀逸を抄出して月刊したのが月並集であり、その一年分を合冊したのが『櫛之本月並』その他の書名で保存されてゐるが、これに載せた句々を季節的に分類して類題發句集の材料としたのは、松田聽松編の『明治千五百題』をその嚆矢であるとは稱し難いにしても、序文にこれを明記してある點において此書を第一に推さざるを得ない。聽松は常陸の人、東長深川區靈岸町に寄留し、亭々堂を構へて庵中月並を催してゐたのであらう。

亭々堂主人。有^レ慨^ニ于是^一。而^テ擲^ニ者^一結^ニ正風社^一於^ニ東京府下^一。

遍^ク徵^ニ求^一海内俳士之句及^レ文章^一。毎月刊^レ之^ヲ以^テ頒^ニ布^一於^ニ四方^一。

玩古書屋宮崎氏の右序文に聽松が月並集を刊行しつゝあつた事を述べ、文中「有^レ慨^ニ于是^一」

とは、「今世爲^ニ俳句^一者。對^ニ人口^一輒^テ曰^フ正風^ト」と雖、「毫^モ不^レ問^ハ句意之爲^ニ正也^一」といふ前文を承け、聽松の慨然として正風社を結び本格的に正風俳句を提唱せるを推稱したのであると解される。標題は『明治千五百題 松田丈一郎編輯』とあつて乾坤二冊の小本に分れてゐる。序には「名^ク曰^フ今人俳諧題味^ト」とあるから、世間的に流布する五百題の名を威壓する意味で改題したのであらう。季節の配置は歳旦を舊曆の如く春の部に扱つて、然も實際は新曆に準據して寒の入の類を歳旦中に挿入し、新舊兩曆の折衷をはかつてゐるのが却つて不徹底に思はれる。新題の採用には頗る躊躇の色が見えて天長節の如きも獨立の季題とせず、端書に天長節と置いて秋季の題を詠み入れたものゝみをその季題によつて区分してゐる。従つて類題句集として依然たる舊式の編輯法であるが、採録された句の端書を見ると開化時代の種々相がそこに展開されてゐる。

開化の時に不勉強なるは

蛤 となるか雀の水なぶり 鶯 梭

これと同じく文明開化を詠じたものが直接その事を叙せずして悉く比喻體なのは、和歌の方で鐵道を「まがねち」と雅語化したと同一の傾向で、

蒸 汽 船

烟りのみ空に残して春の行

一 府

蒸汽船の新造語を一句中に詠み込むのを憚つてゐるのも、

横濱よりの蒸汽車中

先 族 も う れ し 小 春 の 鶴 見 村

壽 道

これなどは蒸汽車といふ語が前書にあるだけで、句その者は駕に乗つて旅する気分そのままである。

奥地誌略を讀て

か へ り 見 る 己 が 背 中 の 寒 さ 哉

盡 誠 堂

世界地圖に對して渺たる一小島國民たる反省が現はれて、端書の奥地誌略が時代的色彩を持つて来る。

開 墾

沼 べ り も み な 起 し 田 や 行 々 子

蕉 朝

荒撫地の開墾は此時代の輿論だつたので、開墾の端書は「なの花や那須野に早う咲せたまき 盛 虬」といふ句にも見えてゐる。那須野の事は

黒髮山を遠望して那須野を踏分るに、狐狼猪狸の栖を見ざるは、全く維新の御代の有難きによれり

高 茅 は ち ら り ほ ら り や 若 菜 畑

一 林

この詞書で解るやうに移民開拓されて行つたのであつた。端書と句と境地の一致したものは

上野博物館にて

門 を 出 て 又 見 る も の や 初 も み ち

竹 華

博物館を一句の背景として、此初もみちの季感が適切な對照をなしてゐる。

太陽曆は何年に改正ありしやと日記扱ふ人の問ければ

十 二 月 三 日 を 明 治 六 と せ か な

露 月

太陽曆の説明的な頓智であるが、かうした句さへその例に乏しく洋館、虎列刺、勳章、博覽會の新語は端書に見えてゐても句中に詠み込んだものはない。「明治千五百題」の明治は内容におい

て空虚で一句の上に表現されてないのを惜まねばならぬ。附録の作者及び住所をいろは順に掲げたものは、作者名寄より便利なもので東京の等裁、春湖、永機、梅年、幹雄、西京の芹舎、稻處、大阪の南齡、流美等の大家は聽松の月並集に出吟したのでなく、本書を編輯する際にそれらの人の句を拾遺したものであらう。

新題の採用と季節觀念

梅年が永機と相談して『古今圖書集成』の編輯に着手した事は、梅年の『續一夏百歩』の解説に既述したが、明治十五年十一月東京定訓堂の藏板として繪入の小本四冊の體裁で發行になつた。此書の趣旨は蒼齋の題言に

俳句之美似^ニ桃櫻之春色^ニ者、自^リ古江都^ニ到^リ今東京^ニ、各得^テ日新^ヲ、童蒙惟見^ニ東京^ヲ、
不^レ知^ニ江都^ヲ、故^ニ其^ノ吐^ク句^ヲ、以^テ不^レ新^ヲ爲^ス新^ト矣、永梅二宗匠憂^レ之^ヲ、因^テ有^ニ此^著、

と見え、且つ「嚼^レ句^ヲ讀^ミ畫^ヲ」新東京人をして江戸の繁華を察知させるのが其の目的であるから、聽松の『明治千五百題』とは編輯の方針を異にするが、新曆に據る季節の逆轉及び新題の採用に就

て、より自由な態度でこれが實現を試みてゐる。季節の配置は一年十二ヶ月を舊曆より一月づゝ遅らせ、一月を晩冬として歳旦はすべて冬季に扱ひ、新曆上から月令的に矛盾を來す爲め、誰しも困惑する七夕及び盆を七月の月次に準じて、斷然これを夏季に引上げてゐる。さうして歳旦を立春前と定めたので、舊曆によつて春季の氣分を傳統的に持つものゝ内容を一新して、たとへば

● 米踏で正月するや雪の宿 永機

〔正月を内容的に冬季とする爲め、雪の宿の題重ねを取つても厭はざる如き態度を取つてゐる。新題の例として〕

四方拜 濟て海山靜なり 春湖

宮廷の年中行事として四方拜は舊季寄にかゝぐる處であるが、例句は見掛けなかつたので新題に準じてよい。一月八日の陸軍始に

式の日やあられたばしる帽の上 永機

冬季として「あられ」を結び、その叢の軍帽にたばしるといふ描寫は、新題を新題として活躍させてゐると云へやう。

見ぬ昔聞もかしこし紀元節

船賀

紀元節の新題を背景に梅などをあしらふ事をせず、そのまゝ詠じて獨立性を認めた點が、此句の平凡さを無感激のものとして排斥されない季題的に價値付けてゐる。四月三日の神武祭も新題である。

御國けふさくらの花を祭哉

永機

技巧においては紀元節の句よりは優越してゐるが、神武祭を直接の季語に詠み入れなかつたのは折衷的な表現といはねばならぬ。

爰に此日に詣來て新嘗會

鶯笠

新題を採用する以上は一句の巧拙よりは、新嘗會ならば此の句のやうに別に季節の言葉を配さない方が、自然的で徹底的でもある。十二月廿五日のクリスマスに「耶蘇ノ日」として

臘梅は取あふた香や耶蘇祭

完鷗

耶蘇の日や網代の魚の串捌き

永機

此の二句を掲げてあるのを見ると、新題には傳統的約束として季節觀念が乏しいので、一は臘

梅を一は網代を句中に配合してクリスマスの異國的情緒を俳句の季題化する爲め、意識的に二重の効果を收めんとしたのであるかも知れない。もしさうだとすれば「題かさね」として一句中に季題を二つ詠み入れる事は一方が新題であれば認容してよいといふ主張を裏書きするもので、これを排斥するどころかその用意の周到なるを多とせねばならない。その「題かさね」の句に關して

十月や落葉の下のきりくす

鳳樓

太陽曆をもつて此所に載れば、一句の上は冬の趣也。

と頭註に注意して「十月や」を新曆上秋季として其部に採録したが、一句を吟味すれば冬季になる事を「落葉の下のきりくす」の「落葉」を以て推定せねばならない理由を擧げてゐる。編者として至當の言ながら親切な老婆心である。又、題言の「見_テ東京_ニ、不知_レ江都_ヲ」して其句の新と不新とに無關心な作者の爲に啓蒙的に挿繪を入れた點を看過してはならぬ。挿繪の筆者は鮮齋永濯である。洋館の前に練門をかざり國旗をかゝげてゐるのは明治初期の新風景だが、編笠の鳥追ひ素袍の萬歳は江戸の名残である。これと對照的に麻上下の禮者、挾箱の供人を門松の背景として描いた別圖をあげ、新舊の時代相を風俗上より會得させるその挿繪が確に有意義な企圖である。

たゞ畫材を江戸生活に求めて明治の新風俗に及んだものは、歳旦の一圖に限つたのを惜しまねばならぬ。

五百題と八百題との比較

新機軸を出したといふ程でないが、明治時代の色彩を編輯上に現はした『明治發句五百題』が出版されて二年後、編者は同一の梅年と永機で型も小本で體裁もおなじ『俳諧繪入八百題』四冊が刊行された。前者の改題でもなければ増補でもない。板下の筆耕は同一人に托したらしいが、挿繪の筆者は狩野晏川で畫題も全然新規のものである。板元は求古探新書房である。例言には先に五百題梓行せり。又爰に此集成れり。歳二とせのみを隔たれば同人同句の入たるも

稀く多かるべし。そは先の五百題にさはる事なれば也。

とあるだけで再稿の事情に就いては記すところがない。奥附は明治十六年十一月九日出版御届、同十七年四月出版となつてゐる。前者は明治十五年十一月出版御届とあるのに對し、一年とは正確に隔つてないのである。不審は不審だが全く別本である。確に違ふと思つて見ればかれには漢

文で蒼齋の題言があるが、これには擬古文で前田夏繁の序がある。かれの挿繪は江戸風俗の反映であるが、これは「今の世の人の心得がたかるしなく」には繪をさへ添へて初學を導かうとしたのである。類題に於てもかれは五百題、これは八百題である。これに採録した發句は新規の三百題はもとより、かれにあるまゝ存在した同一の題にも出入増減がある。編輯上更に改良した點が必ずなければならぬ筈である。一年十二ヶ月の排列法には相違を見ないが、かれには七月の月令に準じて七夕及び盆を夏季に引上げてあるけれど、これは實際の季節によつて一ヶ月遅れの八月とし再び秋季に引戻してゐる。現行歳事記も此七夕と盆との取扱ひに迷つて夏に入れ、秋に置きして一定しないが、その孰れに準據すべきかは此編者も當惑して、遂に七月といふ月次の稱呼に囚はれず、新曆が一ヶ月おくれである實際上から推して再び秋季と決定したのであらう。又新題の採用上傳統的季語を句中に配して、季題的概念を明確にする意圖は依然として潜在したであらうが、新題として獨立性を持つものであるといふ觀念を一面には強めたやうにも思はれる。

松の風陸軍はじめ奏しけり

機 一

さきに擧げた永機の句は「式の日や」として「あられ」をこれに詠み入れて陸軍始は傍題的に扱つ

たが、この句には「陸軍はじめ」の語を直叙して傳統的季感より獨立させてゐる。

かしこみてねぎ事もなし神武祭

永機

これもさきには四月三日の季節を背景としてそこに櫻花をあしらひ、「御國けふ」と呼び掛け座五を「祭哉」として間接的叙法を試みたが、この句には「神武祭」と直接的に詠じて季節的觀念を確定してゐる。

硝子に尾鰭涼しき金魚哉

大遊

この句には「涼しき」といふ季語が入つてはゐるが、季題は「金魚」にありと見て目録の五月の部にその名をあげ、夏季の類題中に配置したのは、歳事月令に關するものから新題を採用する一般の傾向に對し、季節のものから新題を發見する新しい考へ方のあらはれとして喜ばしい。金魚は元祿時代から愛玩されたが、其角の「藻の花や金魚にかゝる伊豫すだれ」の如く藻の花のあしらひに詠じたまで、金魚を夏季の題に扱ふのは新東京時代でこそ可能性を持つのだとも云ひ得る。

作者は兩集とも古人は蕪村、白雄、今人は春湖、等哉、芹舎、幹雄、金羅等に及び永機の晋門、梅年の雪門に限らないのでその人選が公平妥當である。編輯は主として梅年が引受けたやうで彼

の兄杉延、妻よし子、その子吏中など一家總出で後に雪中庵を譲つた雀志の俳句を特に追録してある。挿繪は永機が選んだものゝ如くその説明は永機の自筆を板に起し、前者「五百題」よりは同じ季題を畫材にしたものでも俳趣があつて、構圖がいかに氣が利いて晏川一人の圖案でないらしい點がある。

勿驚百六十九才の俳人

五百題の類本がかうしてつぎからつぎへ需要された理由は、題詠には例句を求めて構想上に示唆を受けるのを句作の近道としたからであつた。俳句がもし實際生活に交渉を持つとすれば、人聞喜悲の二分野である慶弔に關する作例集がそれと共に望ましいといふ要求から、竹二菴鶴畝の「賀悼發句集」乾坤二冊が明治十七年大阪の正風書堂から發兌された。鶴畝は山本氏、その父春園鶴歩が稿を起したまゝ故人となつたので、これを補訂して開板した事を、本文の校者である五木庵潮水がその詞書に述べてゐる。

春園鶴歩が編みかけたる賀悼集を息竹二庵鶴畝、志をついですみやかに上梓なりけるを祝す

日に添てにほひ廣かれうめの花

七十一翁

水

題字は「俳中之妙境」の五字を京都の芹舎が書き、序文は大阪の八千房流美が「わが友竹二庵主賀悼の句をあつめて初學びの料にあてんとなり。いかにもよろこびあればかなしみなきことあたはず。これも是作例をさぐりもとむるの一端なればとて蝶夢の類題集を證として推奨してゐる。乾卷は賀之部、坤卷は悼之部で、芭蕉翁より當時の人まで大概の作家は逸する事なく収録してある。賀之部には婚禮から出産、それから宮參、入學の順で家督をつぎ、遂に隠居するまでの生涯と、還曆、古稀から百歳の上壽に至つて、

人をさす蟲さへあるに蚤かな

信計

花をまつ命は六萬五百日

同

といふ自賀の發句を引いてゐるが、此の信計なる人は百六十九歳で福島縣の農事會委員であつたのだから驚くではないか。即ち

信計桑原氏は福島縣下磐城國田村郡堀越村の人にして通稱熊三郎といへり。當年百六十九歳にして同國農事會の委員に選舉せられ、作毛養蚕季候略計の書あり。以て壯健知る

べし。

とある。實際とすれば明治における最大の長壽者であらう。又七十の手習ひとは俗諺に聞くところだが、

をのれ百一歳の時、八千房の門に入り、無事にことしも春を迎て

百のうへまた六つましき年始かな

多喜彦

この詞書を見ては眉唾ものに思はれないでないが、その人物と住所とを次の如く擧げてゐるから嘘ではないらしい。

多喜彦、壽山房と號す。攝津國大阪西區靱上通壹丁目の人なり。通稱多喜彦右衛門と云ふ。

當年百六歳なり。婦は百歳にして相ともに健也。

明治俳諧時代の材料として「賀悼發句集」を紹介する氣になつたのは、この二話譚があるからでたゞ内容の解説だけなれば敷衍でつきて了ふ。もう一つ史的資料として看過されない記事がある。

近江國石山大觀亭の傍に祖翁堂造營落成し、既に明治十六年九月十六日を以て開筵式俳諧

百員なる。出席の風客百餘名其祝章の一二をあげて、後世に永く傳へ尙此道の隆んなるを祈る。

とあつて此書に關係ある芹舎、潮水及び編者鶴畝の句があるから左に掲ぐ。

處得て道も照るべし秋の月

芹舎

芭蕉葉の陰したはしや月今宵

潮水

植うつす芭蕉を月のしをり哉

鶴畝

坤の巻は手向けの例句で花屋庵鼎左の芭蕉翁を花本大明神と稱する尊號の證がやゝめづらしい位で格別の記録がない。編者鶴畝は『明治千題集』及び『明治袖珍五百題』各四冊を發行してゐるが、明治時代の時代色も背景もない句ばかりと思ふから書名を記するに止めて置く。一體此時代は何でも明治の年號を冠らせるのが流行したので、明治といふ二字に誘惑されて手にする句集の實際に於て明治の空氣に觸れてゐず、時代性を有しないのに失望すること再々である。綠天居内海良大選の『俳諧芙蓉集』もその例で、玉心老人素兄がこれに「明治の風詞机上にあらはるゝを奥ある道の幻術とはいふなるべし」と、いかにも明治の俳風を鳥瞰される如く序文に書いてゐるが、作者別四季發句集で明治の時代色などは一向現はれてゐない。素兄の序に明治十六年文月として「東京不忍池生蓮院に夏ごもりして」とあるから、彼が『おくの雪道』を著述して猶一年後東京に寓居した事が確められる位で、その外に参考になるやうな内容でない。出版は同年十一月である。

歳事記の新版及び千句興行

Bateiの駆けつこ

藁目のある紺表紙の左寄り、小さく紅色の題紙が貼られたところを拇指にもたせて、な、めに掌中へおさまる大きさ、たてが三寸九分きつかり、横が二寸八分にくるひがない。紅紙の題箋には

四季
俳諧歳事記新築草

と硬い感じの銅版で刷出してある。見返しも題箋とおなじ色で、おなじ外

題を掛軸に揮毫した體で「山口素楊編輯」と落款風に記し、花瓶に「風月堂藏版」と軸で浮かせた手法を見せ、見返しのすべてが床の閒と見える意匠である。そんな凝つた仕立でありながら用紙はあらく漉いた洋紙で、本文は風韻のない銅版摺であるのが、廉價で手早いのをよるこぶ此時代の製本好みであつた。此式の小本で春夏秋冬の四冊、明治十五年六月附を以て京都府平民、下京區第六組大黒町山口素楊を編輯者として發兌されたのである。本欄は青藍の増補本に準じて季題を月令的に配り、更に檢索の便をはかつてその月々の題をいろは式に分類した歳事記辭典であ

る。欄外の頭箋は全紙面の五分の二をしめ、挿繪入の四季部類から作法及び語彙に及び七部集を全録してあるので、本欄との比率が頗る不均勢に思はれるが、明治時代の新編歳事記として量に於て是に拮抗する者を見ない。が本欄の説明は大部分葉草の覆載で四季の部立も舊曆に拘泥してゐる。定價金七十五錢で量に比して高くないので相當需用はあつたものか、明治二十年一月補刻の再刷本が流布してゐる。乙彦の『俳諧手洋燈』より遙に後のものなので新曆により新題を採用したならば、新葉草の名義に耻ぢない内容を持つたのだが、新曆に準じたのは紀元節、天長節の宮廷行事で、それも二月なり十一月なりの月令に矛盾しない程度に表面を糊塗したまで、新曆及び新題の本義を没却したのは編者の無定見を暴露したものと云はねばならぬ。併し一題ごとに注意して行くと、其説明に開化的な世相の一部を偶然發見することがある。門松の附註に

輓近煉瓦家に飾りを造るは、其季候の草花を以て門形に造り戸前に飾る。これ則花傍と云にや。一月一日のかざり花は梅、松、柳、椿、寒菊、水仙、黒もじ、南天、其枝の透閑なく橙、蜜柑、橘等を挿み頗美麗を盡す。此飾花は何時に限らず、都て西洋では開業式及諸事祝日、祭典に用ゆよし。されども門飾の順序を以て一月之部に花飾と記す。

歳事記の新版及び千句興行

斯く説明せる「花飴」は蓋し歐風のアーチ（縁門）を國俗に調和させたもので、この時代の現象として奇異に感じられたと見えて、永機、梅年の五百題にも此新葉草にも挿繪を以て説明を補つてゐる。「花飴」とは新年の開化風俗として又新季題として存続させてよい名稱だが、いつか廢れて了つたのは惜しい。近年長崎風俗の「べいろん」（排龍）を隅田川で行つた新聞記事を見たがその「べいろん」を五月五日の「競渡」に附記し、

今世横濱、神戸在留の外國人、四月中旬俗にカケツコと唱へ五七人づゝバツテラ小舟に乗じ海上十餘町を駈出して其遲速を争ふ。是競渡の意に髣髴たり。

とあるも面白い。バツテラは西班牙語の Pateo だ今のボート（端艇）の事だが、その競漕を陸上のカケツコと同視したのは、時代的に體育競技の看却された一例として可笑しくもあれば、さうした表現がなんとも幼稚で寧ろ愉快に聞きなざるゝでないか。だが此一二の例で編者を蒙昧視されない。四月の「松前渡ル」に就て

開化の今日にいたりては既に北海の地方は十一國に區ち、就中石狩國札幌に開拓使を置かれ、亦、小樽、宮館等の繁榮はいふもさらなり。然而其便船の往還も繁く、凡横濱へ拔錨

の汽船は月々十回を過ぐ。青森へは隔日出帆ありしと也。かゝる時節に松前渡を夏、秋の季に限るは實に舊弊ならずや。しかりと雖古きを推して新らしきを知るは、則俳諧當用の加減といはんか。全く雜とし可也ルカ否。

此説は妥當である。批評も適切で雜題として取扱はるべきだ。編者が一面において時代を認識してゐた明證である。萬年青の流行は此新葉草にまでいろ／＼詳説してあるが、これも時代的な新嗜好と解されない事はない。

近世盆栽此草専ら流行し、其價額の頗る高きは他に過たり。種類數品あり。日月星、羅紗

甲龍、二面甲龍、鯢、龍頭等名づくものを以て萬年青五品の上等とす。又、富士、原龍、折鬘斗其他數百數の名あり。明治十四年春、日月星と唱ふる物、一葉殆二百圓を過ル。

萬年青はその實の熟する季節を以て九月に編入してある。一葉二百圓とは今から想像も及ばない暴騰であつて、新葉草を通じてこれらの際物的な流行を知るのも、歳事記が世相史考察を利用する所以の一に擧げ得る。

掌中に入る銅版豆本俳翼

素楊の新葉草が歳事記の解説よりは入門的な作法、作例に本欄の五分の二を消費してゐるは甚だ不経済、不必要のやうである。ひるがへつてその理由を考へると、まだく此時代は啓蒙的な俳諧文獻に乏しい必要に迫られた部分的な現はれであつたとも見られる。新文化に無關心な俳人には開化の世相を眺めて、それに適準する俳諧の新しい意義や説明は不可能である。取敢ず古人の説や古書の例を舉げて、不必要な程度にまで及んだのだと、かう解釋してよからう。それが更に入門的に簡易な古俳書の覆刻を促して、明治十六年には籙島秋里の『俳翼』が銅版の掌中本となつて喜ばれ、同十七年には『俳諧手挑燈』の名を襲つた入門書が出る事になつたのだ。籙島秋里は名所圖會で評判された雜學者で寛政七年に此の『俳翼』を編述したのであるが、芭蕉翁と其角、嵐雪の發句を抄し、四季及び名所の詞を揃へ、これに若干の俳諧語彙を附載した體裁が氣が利いてゐるので好評を取つた書である。これを銅版で覆刻を企て、

此書寛政年中於洛陽櫻木にのぼせしが、此道の輩に頗る益あるを以て、此度再考して以

て銅に鑄せ、普く世に發賣せるものなり。

干時 明治十五年冬

文書堂

松田

かくさず正直に述べてゐるのは感心である。題笈は

籙島 秋里 撰	其角 芭蕉翁 嵐雪	手塚幸七 輯	俳 翼	乾 坤
---------------	-----------------	-----------	--------	--------

ながくしく記してあるが本の様式は縦

が二寸、横は一寸五分の全く平手に握つてしまへる古今を通じて最小な俳書の豆本である。奥附の明治十五年十月五日出版御届、同十六年三月出版とあるので見ると届出から發行まで半年を要してゐる。定價は乾坤二冊に分れて金二十錢である。『俳諧手挑燈』は江戸の澁柿庵貞至といふ俳諧師が、延享二年二月出版したもので、一名を「俳諧初心手引草」と傍書せる如く入門的な標準の低い、連句の諸約束を説き、四季の詞、連俳用語、作例の一般に涉つて簡便に出來てゐる。延享板は中本二冊であつたが、天保六年『手挑燈』として萬笈堂から縦四寸横二寸六分の小形本に再刻され、携帯に至便なものとなつてから急激に行はれ出した。安政二年には萬笈堂から錦森堂に譲板されて俳人必備の書となるまで行き涉つた。延享二年から百三十五年を経て需要が衰へず

明治十七年その題名を侵害したと訴へられさうな『別書明治五百題俳諧手挑燈』が東京の探古堂より新鑄された程である。此書は春風亭魯春が『新撰明治五百題』を類題式に掲げ、それを中心に上下二段に区切り、發句の五七五の上五を冠、中七を體、下五を杳として、分解的にいろ／＼な言葉を排列し、その中から隨意の語を引抜いて五七五になられば、發句の形が整ふ五目ならべ式の語彙と切れ字、其證句、聯句の作法と用語とを以て本欄をふさげたもので、内容は『手挑燈』とは似もつかないので、題名の侵害と稱した譯である。編者は東京府士族伊豆國大島泉津村田中菊雄とあるから答むべき位置を持つた俳人ではないらしい。此書は五寸五分の二寸五分といふ細長い様式の折本仕立てで、前の二書とおなじく銅版である。頭書の五百題を見ると孤山堂を潛號して人格を疑はれた風光堂山月の發句が多いから魯春は其門系であらう。記述が前後したが『手挑燈』の記事は此剽窃的な題名を持つものよりは、幹雄の編せる『別書明治歳事記栞草』の方に再録されてゐる。これはやゝ大振りな半紙半截の横本で上中下三冊、明治十五年東京錦城書樓梓とあるから、折本の異本『手挑燈』より二年前の出版になる。幹雄の凡例に

古海云何々とあるは、最初上卷中卷此人草稿せしを書肆是を得て予に撰をもとむ。吾是を

見て彼を捨、是を取て二卷となし、以て下卷を加へて上中下となす。故に古海の説も敢て脱除せざれば斯あると見るべし。

と、古海なる者の原稿を幹雄の増補したもので、芹舎の題句、春湖、等裁の序、南齡の跋があるので東西老俳の共に推舉した如き外觀をなしてゐる。

手挑燈の説をそつくり剽窃

俳諧教導職の責任として古典の學修に勉めさせたので俳人で學問のある者といへば幹雄に衆評一致してゐた。その幹雄の編纂した『別書明治歳事記栞草』を評し『手挑燈』の再録、よしそつくり再録したのでなく一部の改竄としても、『手挑燈』の體裁を摹したと云はれるだけでも、傲岸な幹雄には堪へ難い屈辱であらう。彼が此書の凡例に

全書一編は俳諧の諸式を擧、題意を註釋し、諸の詞、假字を以て分ち、初心の解し難きは標註を加へ、次に手爾遠波三段の變格を圖說し、切る、詞續く辭の意を説、證歌證句を擧て能初心の解しやすきを旨とす。並べて切字の證句數百を擧げ、連句諸式の體裁を加へて

全編とす。

と云へるは以て解題とするに充分であるから、蛇足を添ふる事を敢てしないが、その『手挑燈』の再録を證するは發句、脇、第三の説明が二三文字の出入あるが同一文章であり、一順、再遍、聯等の連俳用語は脚註ぐるみ一字の相違なく、露骨の語を使へば引用書を擧げない以上剽窃と難ぜられても辯解の辭がなからう。『明治歳事記葉草』と題するもの、歳事記篇は上中下三冊の五分の一に過ぎない上、季題の解釋は『手挑燈』より採れること明白である。兩者を突合せて見たら、成程、これでは剽窃といはれても、ぐうの音も出ない筈だ」と何人も頷くであらう。それにも拘はらず凡例のつきに

此書に類ひする俳書世に多しといへども、大方は雜學者戲作者等の類ひ、書肆の憤ひを受むが爲、古書より拔萃し以て私意を加へ一編と成たる者のみ多く、故に緊要を缺、蛇足を添へて却つて初心を惑すに至る。

幹雄の此強辯は世間の人々を欺瞞するものとして憤慨されるに至らうが、最初に引いた凡例の古海の初稿本にあるまゝ、その補訂に際し、幹雄は氣付かず看過したのかも知れない。それに『手

挑燈』の孫引の中に全然新説のない譯でない。部立においてかれの舊曆はこれに新曆で一ト月づゝおくらせて居り、これの「新年宴會」や「新年班幣」の題はむろんかれにない。これに東京新風俗「兩國の涼」をあげ「東京もと五月六月晝夜此處群集す。船遊山、屋形船」は、かれに「江戸兩國橋の涼」とあり「船ゆさん、屋形船、五月六月晝夜海上に群集す」とあるのと、東京と江戸の文字を置き換へたまでだが、違ふと云へば同じだともさからへない。何ぞその説くところの相似たる、何ぞ甚だしくしきやに驚くのみである。中巻の「去嫌之式」は順序を變へて讀者を瞞着した風に見えるが、『手挑燈』の「いろは寄手兩於葉」を此書は「天爾越波大概」と改めて、これは確に豊富なる語彙を擁して遙にかれを凌いでゐる。要するに上中二巻は古海の原稿が剽窃の咎を受くべきで、幹雄をこれに連座せしむるのは過酷であらうと考へ直さざるを得ない。幹雄の自負せるは、新規に附加せる下巻の語格に關する説明で、

此書手爾遠波は橘守部大人の助辭本義一覽、若狹の義門大徳の活語指南、武藏の黒澤翁慶大人の言靈抄等の書に照準して、吾俳諧活用を専に綴れる書なれば此道に入る族、此書に
よらずばあるべからず。

證句及び係結びの解釋は大抵正當である。今日から批評すれば中學程度の文法教科書に過ぎない天爾遠波論だが、此時代において語格の論をすとなれば非常に偉くも思はれたらうし、本人も大に自慢であつたらうしするから、此誇大な凡例もあながち無用視されなと思ふ。然らばどの點まで語法の力があつたか。俳人の常に解釋に苦しむ「や哉」の論を引いて見やう。

や哉 夕顔 や 秋 は。いろくの瓢かな。

翁

道灌 や 花 は。その世を嵐哉。

嵐 蘭

ながめのやにて秋はと言葉を分ちて、夏は皆同じに白き花でありしが、秋は色くの形ある瓢になりたるかなと造化の妙術を歎息したる哉なり。や文字はながめのやとて、其物をながめやりて先、題に置居うるやなり。漢字に云はゞ焉の字の助字にも似たるべし。次の道灌山の花のちるを見て、昔太田道灌の亡しさまを想像したる者也。

薊王樹 や の つ へら ほう に 日 永 哉

一 茶

朝 が ほ や 扇 の 骨 を 垣 根 かな

其 角

ながめのやの物を置居うる助字たるをしるべし。

何故に「や」と置いて再び「かな」と切つて、これが二段切にならないのか。たゞ「ながめ」の「や」だから虚字に扱はれるといふのでは、すべて上五の「や」は「ながめ」であるなら、此場合の「や」は切字とならないのかと反問すれば必ず答辯に窮するであらう。富水の『俳諧作例集』の際にも一言したが、此「や哉」説は富水と同じく、否それより一步も出ない獨斷的の見解である。

道服の宗匠姿で龜戸千句

傳統に生きる俳諧師生活には、世間的に朗かな歐化の空氣が重苦しく壓迫的に感ぜられたに違ひない。俳諧師のみが持つ特殊な傳統様式を今にして保存の道を講じなければならぬ。今だ、今ならまだ遅くない。それに何か社會的に存在を示さなくては階級的に亡んで了ふ。かうした職業意識も必ず動いたであらう。絶えて久しい俳諧千句の興行が明治十六年五月、龜戸天神の社殿で催された所以はそこに動機があつた事と思ふ。千句發願の主唱者は其角堂永機である。表面の理由は文久三年彼が『不忍千句』を張行して二十年後の今日、古人の「十人酬和九人無」の嘆と同

じく現に生存するのは藤庵太年のみなので、往時を追懐して本式に千句の更生をはかると云ふにあつた。太年の同意を得て莫逆の雪中庵梅年を誘ひ入れ、門下の善哉庵予雲及び黄花庵静五を加へて作者五人、いよゝ初興行のその日、明治十六年五月廿五日の早旦には天神の社殿において「聖像の御前にすが／＼しく香を炷、花をたて先三巻をはじむ」と永機の述ぶることく、

賦何河俳諧

松梅の奥の一木や初ざくら	永	機
朧ながらに高き朝月	静	五
めでた事白酒唄にうたはせて	太	年
ものさしいらす手拭をさく	予	雲
閒仕切にしばらく借る二枚折	梅	年
雲幾運びみぞれこぼるゝ	機	五
ふは／＼と冬のすがたのむら鴉	太	年
磨き丸太を建並べけり		

これを表八句として、文明年代、専順、宗祇、紹永三吟の千句における前例にならひ、隨時加入を許した青宜、紫香、巨石の句もまじへて一卷、次に梅年の發句、予雲の發句で二巻、都合三百句を了つて、更に同月廿八日再び參籠し

賦何笠 第四

くらむほと咲重なりぬ雨の花	静	五
折くもどる春の朝冷	梅	年
宗鑑が磯餅削る盆すゑて	永	機
なじみの狐顔見せに出る	太	年
西吹けば東にかたぐ井戸やかた	予	雲
杖で刎ては片寄る藁	五	梅
丸々と昇るばかりもけふの月	梅	五
山の尖りの秋にすつくり	機	

こゝに賦何笠とあるは前の賦何河とあると同じく連歌の賦物（ふしもの）を取つたので、上に

「何」と空白をおいてそれに熟語となる語を配するので、前は「梅河」こゝは「花笠」となるから上賦である。第五は太年の「賦何姫」で、第六は永機の「金屏にかけよさくらの夜の衣」で一字露顯、即ち句中の「夜」は「世」の意に通ふもの、第七は梅年の「花の曙鳥啼そへて又寒し」で二字返音、即ち「花」の訓「はな」を上下轉倒して「繩」の意となるもので孰れも賦物の格式である。此日は百韻四卷をまとめて越えて六月一日、これで三度の出座に

三字中略 第八

近	よ	れ	ば	愛	相	に	そ	よ	ぐ	櫻	か	な	予	
入	日	見	送	る	春	の	山	の	端	梅				
無	性	箱	餘	り	海	苔	迄	へ	し	込	て	太		
疊	の	上	に	鶉	の	糞	す	る	靜					
む	ら	雨	の	強	い	ほ	ど	に	は	跡	も	な	し	永
冷	る	小	口	に	細	る	月	影	松					
新	絹	を	尋	と	る	風	の	匂	ふ	也	青			
														宜

赤い か 先に 天 瓜 減る

碧 海

此端造りの三字中略も賦物で發句の櫻は「さくら」の中の一字を略すれば「さら」で「皿」の意となるのである。第九は靜五の發句、第十は太年の發句でこれは下賦を取つて、間を置いて三日を以て俳諧千句を成就したのであつた。

六月三日右千句の披講をおなじ龜戸天神の社殿で行つた。式の次第は前田夏繁の序に「道服の袂ゆたかに座せるもあり」と記せるは永機と梅年であらう。又「烏帽子のかけ緒長く結び下げて面たゞしく出たるも有り」と形容されたのは太年か。狩野晏川筆の此座配の圖に散切の麻社袴姿で二人肩を揃へてゐるのが予雲と靜五であるらしい。披講の役を勤める執筆は三素庵成雅、金令舎松雄の二人交代で文臺を前に据ゑて、「かたはらに聞もの八十餘人皆肅然として其明朗な吟聲裡に千句披講の式を終了した。詠草は「瑞籬のもとに埋て」後のかたみに碑を立て、それに紫香筆を以て千句塚と題し裏に年號、作者五人の名を雕つたものが今以て現存する筈であるが、別に千句全部を板に起し前記夏繁の序、永機の序並に梅年の跋を附し、千句のをはりに春湖、等裁等の賀章及び其引二百五十餘句を載せて、同十六年十二月向島の其角堂から發行した。題箋に「か

め登千句』とある小菊型板本一冊が即ちこれである。

永機の新花摘と耶蘇の歌

明治に入つて千句披講のはなく、しい復活は永機の成功であつたが、彼はその前後の行動をその著『新花摘』明治十年刊の日記に誇大な筆で記録してをりさうなもので、然も五吟三百韻を行つた初日の五月廿五日は、芝の紅葉館で茶人不自傳來の利休像を拜し、その中の日の廿八日は『かめ登千句』には「先考螺窓翁の忌日なれば四百韻をつぐ」と特記してあるが、『新花摘』には夏の富士の一句を掲ぐるのみで、最後の三百韻を詠じた六月一日は向島八百善の茶會に、菊五郎の梅幸や畫家の晏川やと招かれて、その日の茶器鑑賞の筆録に止めて、千句の事には遂に一言も筆を及さなかつた。この事は彼の淡懐な心事を見るやうで奥床しく感じられる。六月三日の千句披講の日の日誌には流石その抱負を

於龜戸社頭千句披口

守 武 も 貞 徳 も き け ほ と ゝ ぎ す

機

と遠きむかしに呼びかけてゐるが、これも『かめ登千句』に「披口席上」と見えてをり、千句成就の功に倣るが如き氣振りは日記中のどこにも發見されない。永機の世間的人望は冲澹にして矜らざる此性格の徳によるのであらう。『新花摘』は永機が天保五年二十三才で慈母の喪に服する事となつて、「晋子が孝に及ばすとも、花摘に倣てなんどおもひ起しぬれど」その宿望を遂ぐる能はず、明治十六年の慈母五十年忌に漸く「その日その夜見聞の文音の句をつみて一夏百句の縁に結び隨時經と號」てその私生活を日記体に淨書して配本したのである。彼は既に「晋子が孝に」とその及ばざるを嘆き「花摘に倣て」とその所依をあげてゐる如く、其角が元祿三年四月八日より百日の間、母妙務尼追福の爲に筆を絶たなかつた『華摘』を手本として、一切の体裁をそれに模してゐるが、板下も彼が刻苦して習つた其角張りの書風が手に入つて、個性的なふくらみを持つて來た特徴をあらはしてゐる。永機の書に就ては後に批評する場合があらうと思ふのでこゝには述べないが、明治文學史上、劇作家の黙阿彌に比較して新舊時代に交渉のある實際的力量をうなづかせる。『新花摘』に抄出した古俳人の文章で季吟の芭蕉改號を證する消息は、名古屋の俳人聽雨の所持せるもので、今は近藤三川氏の有に歸し、永機の珍として紹介した價値を持つてゐる。北

六軒所持の凡兆畫讃「月も又一二の橋の夜明かな」は永機の「晋子が時鳥の反轉なるべし」と云へる如く、伏見の一二の橋の吟として名高い其角の句をふまえた作に疑ひない。考證的によい材料である。それと其角の遺文に就いて『五元集』の靈夢と題した蓮の句の由來が知れる前文、『花摘』出版の時の智海師宛消息などを収めて後人の研究に寄與してゐる。又永機の見て感激して筆寫しておいたもので、連歌の發句と思ふが、藤堂家で展覽した豊太閤の四季四句の消息切レ。

詢堯齋老公御珍藏

豊公御筆

我等

はるの發句にて百いいたさせ

是も京へつかはすべし

(原註)ヤカ

日のもとは花にまはゆき今朝の春

夏ならば

螢火も風の吹たつる光りかな

秋ならば

かゝるへきくもなき御代の秋の月

冬

さむさをもかさねしきぬにしられけり

秀

貞徳が「鷹筑波」九段坂の第五に「春の日やひなかのしゆくの霞酒」の發句附句をあげ「右廿八句は忝も、太閤御所の尊作也」と發表して「恐ながら書付侍る」と述べたものよりは、此句の方に太閤の性格が躍如として現前するやうで感興をよぶ。それから永機は、老人の固陋から邪宗として排斥しさうな基督教に、ふしぎな關心を持つてクリスマスに「耶穌の日」として新季題に扱ひ、今又「新花摘」といふ佛教風俗を背景とした書中において、

歳事記の新版及び千句興行

耶蘇の教師ヒヤソンといふ老嫗の説教聽聞の後、
徒弟の娘に今やうと名づけしものをうたはす。

その文ニ曰

やみよのやみも はなやかに
しのゝめいのる あしたこそ
あをひとくさの まこゝろに
くゆれはつみも きゆるめれ

天臺止觀 眞言秘密 南無阿彌

陀佛 南無妙法蓮華經 六々三

十六 清風勸修行

どの道を行もひとつの花野哉

機

耶蘇尼の悔みを説く今様調歌謡をかゝげて、差別的な宗教觀から開放された新時代人として自由な態度を示したのが注目に値ひする。永機の此「新花摘」二冊、明治十六年五月十四日 陰曆四月

八日の作

長 建 寺

灌 佛 や 十 二 の 時 の 遊 び わ さ

これを巻頭句に同年八月廿七日 陰曆七月廿一日 百ヶ日の夏書を了つて

満 百

みのむしやけふの鳴音は母戀し

同

と慈母を哀慕する一句に筆を擱き「閑興六哥仙」と題して門下の人々との歌仙六卷を附録し、

明治十六年癸未九月

其角堂中敗荷窓前書

大乘行者靜詳

右奥書の次に多田孝泉の跋文を添へ「かめ登千句」と同月附で出版したのであつた。これに掲げた諸家の發句を見ると或境地を持つた洒脫なもので、永機の全著作の中で内容的に立派なもの一つである。

傳統連句と明倫講社の勢力

傳統連句とその批評

卑俗な流行として識者の排斥する高點句争ひとは別に、傳統連句の格式を守つて來たものゝ作品で、予雲の『明治八十六歌仙』の後に集成された『俳諧目につつ塵』明治六年刊に注意を懈れない。編輯は永機で文合庵蒐好の校合、「一名海内附合集」と稱する如く知人の兩吟以上九十三歌仙を収録してある。作者は永機を中心に春湖、等裁の老俳及び梅年一派を東京に求め、京都の芹舎、三河の蓬宇、この時代から賣出した大阪の八千房流美、出雲の釣年庵曲川、信濃の雪散屋其殘など地方的人物を羅致してゐる。歌仙の部立は春二十二卷、夏十七卷、秋二十九卷、冬二十二卷で新年は新曆に準じて冬の部に併合してある。標題は芭蕉翁の「しら菊や目にたてゝみるちりもなし」の發句に對して謙抑の意を寓したもので、明治十五年花の本靜所の序文が附いてゐる。凡例に其角の言葉を擧げて

月はこぼしても不苦、花はこぼすべからずとは、歌仙の裏の月は七句目なり。それを十一句め迄こぼす事也。花はこぼすべからずとは定坐十一句めなれば也。

初學おもひ違へて折端に月をこぼす事よろしからず。

とあるは、舊連句において現今も誤解せるところで、此句折端に月のこぼれたる卷などは校合に筆を加て古式の法に倣ふ」と刪正せるを一見識と云はねばならぬ。

歌仙のどれを眺めても明治の時代相は映つて來ない。新語としても輿地史略の如く維新前から行はれたもので、舶來語とよばれた新しい言葉は意識的に排除したやうである。

乙鳥の來馴たやうに覗きこみ 梅年
仕入荷解て分る縞がら 碧波

大丸のやうな呉服店の乙鳥と共に春の入荷があつた情景を描寫したものとか、

取膳の中にちいさき箸すゑて 永機
おもはぬ恩を返されて泣 泡夢

舊主筋にあたるをさなき者に義理を立てゝいたはる前句と見て、その母なる人が感涙にむせぶ

といふ人情味、又

はなしながらに足で壁うつ
宿錢の外に涼しい月もあり

完 鷗
永 機

旅とも思へぬくつろぎの浴後らしい場面に、輕みを持つた附け方に技巧の存する程度を越えたものを見掛けない。その代り文學的遊戯的に巧を弄したものととして

國字物名にて即興

ふじのやまとし立庭に澄にけり

富 水

うごかぬ御代をにほふ初空

文 禮

口わたにはれ着の小袖縫はえて

水 禮

下駄履ながら出さきいひおく

水 禮

舟かりてみなかときまつけふの月

水 禮

さても深いよ露艸のつゆ

禮 水

國名盡しの物名一卷あるだけで形式的には本格的約束を失つたものを見ない。その單調な配列

を色彩附けるために和漢五十韻を附載してあるが、それは俳諧史料として逸すべからざる點に價値を置いてよい。

咲くやこのはなにまつ入梅花

冥 之

愈 咳 氣 黄 鶯

欠 仲 子

過 酒 餘 寒 地

夢 伴 子

いとま乞して人ぞ旅たつ

昌 俊

短尺をよみて騎行馬の上

任 蓮 子

空うちくもり雨けなるころ

冥

仰 看 月 欹 笠

宗 立

冷 裁 電 閃 旌

宗 立

作者の冥之は洛外紫野に寓した頃の澤庵和尚である。和尚の發句は惟中の『俳諧三部抄』にある「われ落に貴妃とぞまよふ女郎花 澤庵和尚」と縁語の取り方がよく似てゐる。欠仲子は大徳寺の江月宗玩、宗立は法その之江雪であり、昌俊は武家から出た歌人佐川田喜六である。作品を吟味

するに連歌の俳諧體であるのが、新俳諧に壓倒されて傳はるものゝ稀有な寛永時代の連歌人の俳諧としてのそれを知るによいものである。殊に微笑を以て迎へらるゝのは

月と若衆を入る 閨の戸
任蓮子
吹わけなふたりが中の秋風
冥之

澤庵あたりの善智識が衆道を材料に、れい／＼しくこんな附合を試みてゐることである。永機は大阪の泰清寺の喫茶に招かれ、別席の懸額に江雪筆の此和漢を見て筆寫して來たものを、「こたびの集和漢の俳諧なければ、幸此半百韵を加へて跋に換るもの也けらし」と註して發表したのである。それにしても百卷に近い歌仙中に、一卷の和漢を今人の作例に求め得なかつた事を怪しむよりも、寧ろ新形式の連句一卷を創案する才能のなかつたかれら宗匠輩の無自覺を惜まなければならぬ。

地方的に成功した明倫講社

俳人の結社は信仰的に強固にしなければ眞の成功を望まれない。信仰には崇拜の對象がなければならぬ。

ばならぬ。鳳朗の發企で維新前早くも、芭蕉翁を偶像化する運動は花の本大明神といふ神號を二條家から允許させるに至つたが、實踐的には明倫講社の幹雄をその代表者に擧げてよからう。彼が教導職たる位置を利用して俳諧を神道の教義に附會したに止まらず、別に古池教會を設立した意圖はその結果に外ならないが、こゝには『俳諧明倫雜誌』を機關に月並發句を勵行する一方、講社の事業を地方的に宣傳して着々効果を收めて行つた例證として、分社設置に關する一文書を一括して手に入れて置いたものがあるから紹介しよう。文書は群馬縣山田郡新宿村(今の桐生)に明倫講社分社を設立する前後の事情を知るだけのものに過ぎないが、これより推してかうした一方に明倫講社、延いては幹雄の俗俳的勢力がかくまで及んでゐるのは、全く現代俳人の意表に出づるものと云はねばならない。明治十七年三月十五日附を以て群馬縣令楫取素彦に提出した明倫講社分社設立願を光づ見るがよい。

明倫講社分社設立願

東京日本橋區蠣殻町二丁目四番地

明倫講社々長

少講義 三 森 幹 雄

山田郡新宿村六拾貳番地
教導職試補 横山 嘉兵衛

同 郡同 村七拾貳番地
福田 森太郎

同 郡同 村二百二拾三番地
教導職試補 暮田 平八郎

同 郡同 村百六番地
岸 常藏

今般御縣下山田郡新宿村 横山嘉兵衛所有
乙六拾貳番地ニ 自在菴ト名付クル一字ヲ建築致置候處此度東京明
倫講社分社ヲ相置キ説教及ビ社中集會所ト相定メ三條の御教憲ヲ謹守シ本社ノ規約ニ基キ
社中同胞ノ親シミを成シ疾病患難ヲ共ニシテ御國恩萬分一ヲモ奉報度素志ニ付地所御差支
無之候ハ、更ニ内務省ノ御許可ヲ蒙リ度候間此段御聞届奉願候也

右 岸 常藏 團

暮田 平八郎 團

明治十七年三月十五日

福田 森太郎 團
横山 嘉兵衛 團
三 森 幹 雄 團

群馬縣令 楫取素彦殿

前書願出之通相違無之ニ付奥書加印候也

戸長不在代 用係 横山 久四郎 團

願書に見える自在庵は繪圖によると新宿の村道に向つて門があつて、南斜めに道がついて、又
門があり、正面に又々門を構へ、入口が土間で座敷が三つ、八疊と思はれる奥の方は縁側から飛
石傳ひに池に臨み、その池の對岸は築山になつてゐる。奥ざしきの背後には廊下を隔て、湯殿が
あり、こゝも飛石でざしきへ聯絡を庭から取つてある。敷地は二百五十坪建坪三十三坪といふの
だから、田舎にしても手廣な家で地主の横山も教導職試補であるが、擔當者は同じく試補の暮田
で小奉書に

傳統連句と明倫講社の勢力

暮田平八郎

教導職試補申付候事

明治十二年三月七日

少教正 新田邦光

といふ辭令に神道修成派管長の印が捺したものが一緒に附いてゐる。揖取「縣令から願之趣本縣ニ於テ差支無之候」と指令が下つたので同年六月松方内務卿に願出、七月十七日山縣内務卿から「書面願之趣聞届候事」といふ許可を得たのであつた。その後の事かも知れないが、明倫社から通知書に

拜呈陳者別紙之通取調差出可申通達有之候聞難形相添御報致候尤も至急を要する義に付、

十月三十日迄には是非とも取調書本社に着致様御取斗ひ被成下度願上候也。

但信徒人員之少數なるは不都合に候聞、少くとも五百名以上に御書立御差出の程御注意まで申添候也。

十月十日

明倫社

山田分院 暮田平八郎様

暮田の俳號は知れないが、蕉風明倫教會となつて後の囑託書に水陰舎柳圃といふのがあつたから、この柳圃が彼の號であらうか。明倫社の通知に「信徒五百人以上に御書立」とあるので、甚だいんちきな分院らしくなるが、その三分の一としても桐生地方にこれだけの俳人信徒の集團を擁した事は信仰的に結びつけた宣傳の効果で、幹雄及び明倫講社の地方的地盤の一般を示してゐる。明治廿二年の稻葉管長へ届書には權少講義暮田平八郎とあるので、その後此の分院の繼續したことは確實である。

八十翁芹舎の伊勢路めぐり

もし此の明倫講社がこんな風の宣傳網を全國的に張つたならば、さうして俳人の信徒が一ヶ町村に五百名も獲得されたならば俳諧は確に宗教化したであらうが、幹雄の存在は東京を中心に關東地方に限られたので、結果において大した事業とは云へなかつた。殊に名古屋から向ふは東京の勢力が及ばなかつたので西京——そのころはさう呼ばれた京都の花の本芹舎が最も聲望を持つ

てゐた。芹舎は八十翁として明治十七年門人卜齋を扈從して、伊勢の兩宮に詣で、津の果樵及び名古屋の車友の迎ふところとなつたが、彼の『わか葉とき』はその旅の收穫であつて自序に

西上人宗祇法師の跡をしたひ、東海道の一筋もしらざればとのたまひし祖翁のいましめを思ふも、今は昔の志とは成侍れど、こたび伊勢、尾張の人々が手招きにうなづきてふと庵を這出、車に飛され舟にゆられて、かつくさす方には行つきたれど、日々入來る人々に名乗合、あるはもてなしに箸のいそがしくて何の仕出たる事もなくて過しが、やゝ日數ふるまゝやう／＼とつくねよせたる二卷、三卷に折から見聞の句などをあつめて、一綴にせむとあるに、其時のはし／＼を思ひ出でしるし侍る。

明治十七年四月

八十翁 芹 舎

と記して連句四卷と諸家の發句を記録した中から、果樵との兩吟を拾ふと、

梅咲いて人のあなどる寒さかな 芹 舎
つもりもせねど止ぬ淡雪 果 樵
乗そめに遣うた馬のよく肥て 舎

酔て寝たれば罪咎もなし

樵

戸明れば月のさし込あがり口

舎

萩原くれて碇きこゆる

樵

かう云つた平板な體屈なものであるが、指合を繰るに忙しくその點をまた感心する者のあつた時代とはいへ、保守的な京都人の通弊は芹舎をしてこゝに安んじさせてゐたのだ。同じ兩吟でも車友との歌仙名残の裏を引くと

澁搦た賃をあてなるちよつと借 車 友
旦那に門を叩かれにけり 芹 舎
せんと繪馬見て來た首のまだだるく 友
待つたくと不足たらとく 舎
花の幕内もあらはに絞りあげ 友
角の落ちたる鹿の珍らし 舎

俗語をむやみに取入れるのは炭俵蕉風の嫌味だが、風俗描寫として見れば前の卷づらの平凡さ

よりは、見違へるやうにいき／＼してゐる。

芹舎は八十になつて衰へを見せず、駕はすたれて人力車の時代となつたが、鐵道のない乗物不便の旅行をしてさして疲勞も覚えなかつたやうである。同じ十七年の出版で芹舎の序ある『やまかづら』は越中國入善の俳人立山の改號披露であり、これも芹舎の題句ある雪世の「切さくら折しもけふはよき日也、芭蕉翁」の協起し獨吟その他を收めた『初さくら』また明治十七年の開板であるから、芹舎に關する集冊は量において東京の流行作家を凌ぐものがあるけれど、いち／＼解説して行くのは倦怠でもあればその必要もないので見合せておかう。

こゝへ引合ひに出すには縁もゆかりもない譯であるが、芹舎一人に就いても一年に三冊もある配りものゝ中で、遠江の十湖が明治十六年十一月配冊した『夷白發句集』『道の栞』『俳諧三疋猿』の三部合冊本は、無壹千部限の捺印を每部の奥附に見るやうに、發行部數の點でこの頃第一位に擧げてよいものである。大抵の配りものは五十部かせい／＼百部を超過しなかつたのに壹千部は一寸開きが大きい。『夷白發句集』は十湖の亡師の句をあつめたもので、『道の栞』には一名反古俗と添書してある如く、十湖が師夷白、蓬宇、春湖らの兩卷十八卷を一冊としたのであり、『三疋猿』

は涼菟と支考との眞行草三鉢の連句を覆刻しただけで、どうして其三部を合冊したかの理由も書いてないが、賣名的に多く刷つて配本したものらしく、壹千部とは懸引のない部數であらう。それだけ又流布本が澤山あるので首肯されるのである。

不遇な黙池と脱俗的な願言

人氣不人氣が生活上のかぎ

俳諧師は悉く藝人あしらひをされた。洒落本の好材料となつた宗匠氣質は明治時代にまで持越され、お座敷をいくつ持つかどかれらの重大な生活問題であつた。お座敷の一是立派な邸宅や茶屋小屋に出入すること、そこでは實際幫閑の眞似を厭はなかつたやうだ。その二は運座である。一には祝儀が出た。二には點料が附いてゐた。お座敷の一口も掛らない宗匠は不人氣であつた。運座の點に呼ばれて行く者は流行宗匠として羽振がよかつた。だから藝よりは世間の人氣、不人氣を氣に掛けもすれば、又氣を揉みもする講釋師や落語家と同じく、俳諧師の生活及び位置に致命的な問題はその人氣如何であつた。教養のある人間はよし宗匠とはなつても、屈辱的な待遇に堪へられないから人氣を無視する行動に出るので世間は喜ばない。さうして人氣を持たない宗匠の凋落して行くのを冷酷に看過して顧みなかつた。芭蕉翁俳の諧を輯録した『俳諧袖珍鈔』の

編者古終舎黙池の如きは、俳壇的閱歴から見て第一流の宗匠である可きで、遠く京都に寓居したからでもあらう。新東京時代には酬いられない晩年の不振は氣の毒な位であつた。その父樾柯の著『猿蓑さがし』の校正や『俳諧茶話』の小著に遺詣のうかゞはれる東杵庵願言は、早く俳壇に見限りをつけて門人月彦に東杵庵四世を譲つて了つた。黙池と願言を此期に物故した俳諧師の代表者として、春秋樓千仟は『鮫洲抄』の解説に、景雲齋五世左簾の事は談林座の復活に、玉心堂素心に就いては『おくの雪道』の紀行に於て既に紹介したからこれを措き、その他は個人的に考察して世間の人氣に投じた者は一人もないと云つてよい。但しこれは明治十四年『俳諧明倫雜誌』の創刊されてから同十八年までの間に故人となつたものに關してである。

古終舎黙池は千葉氏、通稱を與兵衛と呼び、別に守株軒と號し、明治十四年八月十五日享年七十あまりで歿した。黙池は維新前既に三十年以上俳道に携はつた人で、抱儀の著『金澤紀遊』天保五年刊に於て一廉の俳人視されてゐる。抱儀は遙に京都から招いた蒼虬を途中まで出迎へるため、武州金澤に廻つて一日舟を夏嶋に泛べてゐるところへ、

兜島の木がくれより小舟一艘こぎ來るあり。白き扇をうちひらき、こなたの舟をさしまね

不遇な黙池と脱俗的な願言

きく来る。何事にやと見るにこは都へもどる黙池が路の序こなたに有と聞て、跡追ひ來るにぞありける。

島ひとつ出ぬけて島のもみぢ哉

黙池

と『金澤紀遊』に記してゐる。そして抱儀の一行は卓郎、竹甫、霞兄、雨邨、八百善及び孤米の七名であつたから、品川で孤米の「明るかとおもへばはるゝ月夜哉」を發句に卓郎の脇、抱儀の第三からつきく二の表まで進んでゐたが、黙池とこゝで出逢つたので、

同じ燈であれどおぼへぬ明り也

と黙池がかすめ出せるを、石につまづくといふ句の跡に居へて餘興なほやまず、東屋が燈下に人々吟髭を撫す。

と紀行にある如く、黙池の平句は霞兄の「草臥足の足につまづく」といふ前句に附けたのであつた。江の島の近傍石籠で東下の蒼虬を迎へて黙池も一行に加はり、蒼虬の句で最も人口に膾炙する、寺に來てこぶしをにぎる寒哉

の吟は腰越の萬福寺で此時詠んだものである。それから今の神奈川であらう。紀行には

金川といへるところにやどるに、黙池が歸京を捨てこのところまで、二とまり送り來る心さしの厚きも、翌はつとめて袂をわかたんと聞ゆるに、集散離合はいまにはじめぬならひながら、唯何となく別盃の情寒きに似たり。

生海鼠さへなくて酒もる浦見哉

といふ抱儀の袂別の吟を擧げ、翌日は「金川のやどりを出て黙池と東西にたもとをわかつ」と記して、黙池に關する消息はこれで絶えてゐる。抱儀が蒼虬を江戸に招いたのは天保五年でその十月、蒼虬は墨田川なる抱儀の別荘に入つて起臥すること約九ヶ月の翌六年六月、歸洛するまでの逸事は抱儀の著『うしろかげ』によつて知られるが、黙池は京都へ戻つたまゝでそれ以後の事は、閑樹園きく雄との共編『俳諧つれづれ草』文久元年刊の兩吟歌仙に

深川に遊て

柳また風にまぎるゝ夕かな

黙池

藁垣とれて春寒き宿

きく雄

とある前書で文久元年再び江戸に來たのが證明される位で、江戸俳壇との交渉は深くなかつたや

不遇な黙池と脱俗的な願言

うである。この「俳諧つれづれ草」は黙池所持の蕉翁筆と稱する季節的現象を印象的に記録したものを板に起したので、かの『三湖抄』寛文四年に掲ぐるものと殆んど同一の所謂芭蕉翁二十五條を布衍したものである。この「袖珍鈔」は、かの『三湖抄』寛文四年に掲ぐるものと殆んど同一の所謂芭蕉翁二十五條を布衍したものである。この「袖珍鈔」は、かの『三湖抄』寛文四年に掲ぐるものと殆んど同一の所謂芭蕉翁二十五條を布衍したものである。

黙池の俳諧袖珍鈔と其句境

人の知らない刻苦を剽窃者に奪はれた経験を持たないものでも、黙池に對してその「俳諧袖珍鈔」が材料を糊中の「俳諧一葉集」文政十年から無断借用したものが大部分なので、おぼやけばら（公憤）を抑止し得ないのが彼の人格的損失と云はねばならぬ。が黙池その人の史的存在の對象となるのは一にその「袖珍鈔」あるを以てである。

桃青翁一代集の題名は扉に附いてあるだけだが、内容はその如く正編七冊は發句及び歌仙百韵を収めて嘉永四年梓行され、續編七冊は句評、紀行、文、消息及遺語を分ち載せて同五年出版になつた。美濃判半截を横に三つ切にした横長本である。板元は京都の青霞堂であるが、全部を六冊に纏めた文泉堂の再板本が流布してゐる。齋堂拙堂の漢序、梅室、梅通の序がある。梅室は

吾友黙池生、常に坐右に玩し小冊あり。小字に寫してかの巾箱にひめ置いて蠅頭の五經に擬したる物なり。それをこたび木にのする事になりぬ。これを席上に携へ亦旅行の折は陀袋に納めんには、こよなき袖珍なるべしと一言を記す。

戊 秋

八十二 諸 梅 室

と序してゐる。戊は嘉永庚戌三年で梓行までに一ケ年を要した譯である。續編は鹽齋の序を添へて更に一年後板に起されたのであつた。本の體裁は全く別であるが編輯法は「一葉集」を套襲して居り、發句の部のみ類題別で句の上に題を置いてあるので、これは「一葉集」より便利に使用される。試みに消息の部を検するに合計七十一通「一葉集」に比して僅かに三通多きのみで、梅石宛の「翁反古」のものを沒考證的に附載してある。一寸申譯的に増補したものなる事は全編を通じて看取されるので、著作者道德の上から「一葉集」を引用書に擧げてさへおけばよかつたのだが、故意に黙殺したかの如き態度が不愉快で、剽窃問題を云々されても辯解の言葉があるまい。併し多少の割引はしても「袖珍鈔」が「一葉集」より更に讀者の便利を圖つたものと云ひ得ないでない。相當の苦心を拂つたものである。月坡の『待花園日記』嘉永四年に

不遇な黙池と脱俗的な願言

三五九

四日 けふも曇る。黙池、朝から酔きげんにて来る。自茶を煎す。ともに興す。

一畝の 麥を垣根や梅の花 黙池

とあるのが『袖珍鈔』正編の板になつた時のことで、その愉快に堪へなかつた朝酒の「酔きげん」であつたのだらう。

黙池と梅室の關係は梅室の序に「吾友」と呼んでゐるので、師弟とは思はれないし、梅室の小祥忌追善『かれきく集』嘉永六年刊を見ても「おくれて來たる人々の句は」とあつて

竹がきにならでをしさやゆきの竹 黙池

他門扱ひをしてゐるから蒼虬系と見做してよからう。黙池の姓氏に就て故沼波瓊音氏から再三聞かれたが、内『流行百家發句集』嘉永四年刊の名録を見るまでは判然しなかつた。それには

黙池 全岩上通綾小路 號古終舎 千葉與兵衛

と明記されてゐる。住所の『全』とは『袖珍鈔』の序者飄齋の住所に京都とあるので略記したのだ。黙池の發句をその『流行家發句集』から抄出すると、

行もどり柳よごすや牛車

いひ出せば後迄またすころもがえ

屋根に來て日を待露の鴉哉

まだ夏の心わすれぬ西瓜かな

すゝきふく風もやみけり秋のくれ

これはと云ふ摺みどころもなければ、言ひ廻しの練れたうまさもなく、句の姿の上に或寂を出さうとしてゐるのみだ。然も梅室選の『聚英發句集』嘉永四年刊に出る

晝でなりと梅を見ぬ日はなかりけり 黙池

いもの葉のはみ出る萩の垣根かな

と同じく卑俗な分子のひそむ點を脱却し得なかつた。明治以後のものを採つて見ても時代に取殘された影を濃くするばかりである。亡友平山を追憶して

膝いるゝ斗の庵をかまへ、窓のもとに東山の竹を移し植たれば、中々ゆかしかりしが、爰に住む事二日にみたす、

此竹を植ねばきかじあきの風 黙池

不遇な黙池と脱俗的な願言

と悼んだ『ひとよのゆめ』の歌仙、裏移りに

糞汲みのはかりに來たる麥一斗	九	起
元氣なからだ見せるゆ上り	雨	翠
引ふねに聞て渡せし馴染銀	孤	柳
みすくしれた追従をいふ	九	花
貸本屋待して讀し五六枚	黙	池
ひとへならびに垣添の芥子	起	

附肌も梅室あたりの規つた人情を軽くあしらつたに過ぎないが、『俳諧つれく草』の菊雄との兩吟二巻と共に、流石に蕉風の連句は讀み耽つてゐたので發句よりは取柄がある。孰れにしても人氣の出る作家ではなかつた。

醫者で宗匠で陶宮術の先生

隱君子の風格をそゞろ偲ばれる東杵庵願言は、世間の人氣を覘ふことを潔しとしなかつたであ

らう。東杵庵の號を門人月彦に早く讓つて忍川の隱士空羅漢と稱し、俗俳に對して絶交する意志表示をしてゐた。が、願言は隱逸者の生活をしてゐたのでない。立派な醫者で陶宮術の先生をしてゐたのだ。願言の俳句は東杵庵の五世となつた故蔦齋翁執筆の『寒椿』明治十四年稿によると、

去文政のはじめ七歳の春とかや。上野の花の眞盛を惜みて

櫻より苔のはうが面白し

とうたはれしが、そもくの糸口にして、家翁二世東杵庵樺柯より可磨齋願言の號を賜はり、芋環の糸くり返しつゝ遂に正風の瀟奥を極む。

天真なこともごゝろ——童心の俳諧化として七歳の作といふのに適はしい。此句から俳門に入つて、忍川巢連の爲編年々一門の歳旦帖『霞袋』のさし繪をかき編輯にとめたのであつた。願言は松本氏、名は順亭、字は子圭と呼び、父は『猿蓑さがし』著者樺柯坊空然であつた。樺柯も醫者で本草學の造詣があつたから『俳諧多識篇』文政十一年稿の如き好著述をなしたが、願言は其薰陶を以て儒學を井上願堂、醫を鈴木暢谷に學んで父の歿後東杵庵三世を嗣號した。願言の逸事に就いて蔦齋翁から次のやうな話を聞いたのをノートのまゝ載せよう。

不遇な黙池と脱俗的な願言

願言翁は非常に謹直な人でした。町醫者で下谷の御徒町に住んでおりました。同じ町に邸を構へた立花將監家の家來で、宮地一柯といふ者が入門したので、その縁故で家中に病人があれば診察に出掛けましたが、別に扶持はもらつて居りませんでした。神田皆川町のお旗本皆川璉之進といふ家が常出入りして、少々ながら扶持が出ておりました。此お旗本は藝が好きで妾も置いて大いに奢つたので百日の閉門になりました。翁は物堅い人でしたから假にも扶持を頂く以上は主人も同じだ。黙つては過されまいと考へて蟄居中の用人をたづねて、自分も謹慎す可きかどうかを伺立しました。すると戲談に「主人と思ふなら閉門したつて構はない」といふ用人の言葉を眞正直に信じて、その日から門を堅く鎖して了ひました。扶持とはいつてもほんの小遣取りでして、町家の藥禮で暮してゐたのですから、百日も醫者を休んで閉門の附合ひをしたのでは、やり切れなかつたさうですが、翁は全く客を謝して頭に剃刀をあてず、蓬々として髪は延びるまゝに任せたさうでした。隣家は將基の方で名高い大橋宗桂でしたが、俳諧の弟子はその大橋の垣根から出入りをするやうな譯で、後に月彦が先生は閉門の傍杖で氣の毒だつたが、私らは毎日いろんな事を教へられて勉強に

なつたと私に向つて喜んで話してくれました。

と、こんな律氣の人物であつたから、俳諧の方には随分やかましく、發句と附合、それに文章の三拍子が揃はなければ立机を許さなかつたので、東杵庵を譲られた月彦と、可磨齋二世となつた一柯の二人だけしか免判にならなかつた。月並集の選み方も厳しく詠草は十枚位飛ばして、漸く點が掛る風で「感吟になる句がなければ、無理に奥拔をこしらへずともよい」と葛齋翁を誡められてゐたさうである。又弘化三年陶宮術の元祖春龜齋龜丸の門に入り、師範の列に擧げられて南々齋桃谿と號した事も願言の人格を證する一例であるが、維新のころ上野の彰義隊に近いので御徒町の住居を湯島中坂下に移して

爰はさすがに處柄とて、東は茶伯 習庵に隣り、西は嵐雪が鳥居高く、吾妻はやとのたまひし尊の瑞籬を南に受け、扈從見に行く其角が山は北にありて、明暮のたよりいと頼母しさに

居心やけふは朝から小春風

と詠じたことが『寒椿』に見え、明治四年醫名の高くなるに連れて、俳諧の方には手廻りかねた

不遇な駄池と脱俗的な願言

ので、月彦を四世東杵庵に立て、忍川巢連の一切を委托したが、

されど徳を慕ひ思になづける人々、評を乞ひ句を求めてやまざれば、

捨てかねて又しはぶるや柿の蒂

と秋窓のもとに妄執のやみがたきを看破しつ、

身はよしやあしの穂錦の風任せ

とひたぶる世波の自然に任せ、老後の神を養ふに似たり。

と是も同じく『寒椿』に記されてゐる。明治十四年十二月三日

ひらきけり床に一輪寒椿

空 羅

右一句を最期の吟として畫像に賛し翌四日の朝病歿した。享年六十四。

混亂した俳號の授受と岱阿

酒落氣はあるが句は不消化

願言は六歳すでに俳句を黄口に囀つた程なので、父の樺柯が年々板に起した春興の『霞袋』の中で、天保六年のものには可磨齋願言の號で三つ物及び挿繪を載せてある。年十五にして大人染みた讀史の句といひ、臨模的な花鳥、飄逸な人物畫といひ、その成熟の早さを思はせるものがある。

守夜讀滑稽傳

初雞や東方朔に明わたる

願 言

短檠引て今年とぞいふ

杉 二

ゆづりは十徳よりや霞らむ

流 志

こゝにいふ滑稽傳は史記にあるので、俳諧の字義をたづねる爲めには是非讀まねばならぬもの

混亂した俳號の授受と岱阿

とされてゐた。杉二は不溢居、流志は操雪居、ふたりとも樗柯門の逸材である。流志は『猿蓑さがし』の初稿を起し樗柯が書直して板行したのである。ついで乍ら『猿蓑さがし』の流布本には願言の附註が添へてあるが、あれは文政十一年初板を出したのだから、願言はまだ八つに過ぎない。板元の中西から青雲堂の手に渡つて再板の時、願言が附録せしめたので樗柯歿後の再版である。それから樗柯の『五元集小鑄』は星雲堂から出した『多識編』の奥附に見えるが、稿本のまゝ傳はつて願言は『俳諧茶話』福林七にその補遺を口述してゐる。願言の自讃句は

訪隠者不遇

閑古鳥今日も飛ばずに居たりけり

向島の秋葉神社に門人月彦がこれを句碑に建てた程である。句は伊勢風の乙由が「閑古鳥なれも淋しいか飛んで行く」の換骨ながら、閑寂的な境地に觸れてゐるので人々を感動させたのであらう。願言は其角の難句を解いてゐるので、その句に私淑したのかと云へばさうではなく、たとへば『五元集』の

氷肌玉骨とかや

昔見し花にも香にも梅の皮

其角のこの句の氷肌玉骨が李益の青梅の詩に「勘^ニ破^{スレバ}收^メ香^ヲ藏^{スル}白^ク處^テ氷肌玉骨是^レ前身^ト」といふ出典に關心を持つてゐたまで、願言がこれを翻意して

氷肌玉骨江戸ツ戸ならば此白魚

と戯れてゐるので洒落氣のある點をうかゞはれるが、其角とは全く行きかたを異にしてゐる。願言の洒落氣は

三味線にうかるゝ花やひいらゝ

煩惱のそれからそれや更衣

名月や二夜願はゞあかんべい

大海鼠莊子が嘘をのがれけり

この程度の俗語を取入れて、それが一茶の如く、性格的に一致するまでに至らず、花の散る姿を「ひいらゝ」と形容し、煩惱のつきゝ起るのを「それからそれ」の俗語に言換へたものに過ぎず、殊に「あかんべい」に至つては大膽といはゞ云へ、不用意の洒落を意識的に言葉の上に

混亂した俳號の授受と俗阿

見せたので、「二夜願はゞ」の雅言を承けて「あかんべい」は唐突に過ぎ、用語として不消化である。と評さねばならぬ。「莊子の嘘」も莊子の無爲自然説に海鼠こそ適當な寓話的材料である。可きにその事がないのを怪しむ讀書癖のあらはれで、眞の洒落を本心としたものでない。願言の句作態度は、

ほのめくや吉野知らずも花の春

庭に落ちて

炎天や草もしほるゝ手の痛み

我ならで朝顔に又逢ひにけり

鶯の來る木占へ雪の中

これらの句に見られるやうに個人的趣味から出發した主觀傾向を強く潜在させ、主情的な或る感想を具象的に表現せんとする點にあつたので、師父たる樺柯が讀書人であつた如く、願言もその教旨を守つて蕉門の古典を味ひ、讀後の感化が大きかつた事を争へないやうに思ふ。蕉門の古典として必ず『猿蓑』に依據したであらうが、前に擧げた軽い洒落をまぜてゐるのは天保期の流

行を趁ふたもので『猿蓑』より『炭俵』へ推移し、折衷的に工夫した結果が、これらの句となつたのであるまいか。

願言の事で附記して置きたいのは『俳諧辭典』の人名譜に、「天蹊」といふ號をあげ「松本氏、名は雄、字は子雄、順亭、紫陽亭の號あり、樺柯の男にして三世の東杵庵を嗣ぐ」とあるが、天蹊は樺柯(おの)の字天谿であり、名は雄とあるのは同じく樺柯の名の守雌の誤りで、順亭は願言の名であり、紫陽亭は樺柯の一號紫花園の閑遠ひである。「樺柯の男にして三世の東杵庵を嗣ぐ」といふのは願言の事で、人名譜の願言に同一記事が見えるやうに、混同して遂に天蹊なる架空の人物を濫に編者が拵へあげた結果となつてゐる。『俳諧年表』に琴風の草體を誤讀して、私と同じ號の晋風と呼ぶ俳人が同時に存在したかの如く記載したのと好一對の話柄である。

俳系を棄つる事弊履の如く

充分技術のある俳人ではあつたが、傳統的な支配を脱しようとして却つて進退に窮し、一家を操持する事ができない爲め、世間的にその名を現し得なかつた花閒蔵侘阿は鶴野氏、通稱は大助、

混亂した俳號の授受と侘阿

お家流をよくして書には惠泉と號し、下谷の青石横町——今の御徒町——で江戸時代から有名な割烹店伊豫紋のすぐ前に母子二人で手習師匠を以て生活してゐた。お家流は堂に入つたものでその上唐様も學び遒勁な筆力を持つてゐたが、年が若くて弟子入りするものが尠いので窮乏しつゝあつたのを俳諧の師である東杵庵樺柯が氣の毒に思ひ、「岱阿もあんなに貧乏してゐるより、好きな發句の方で判者になつたら點料もすこしは入るだらうし、手習の方よりは暮しがらくにもならう。俺が大目に見て免判するから宗匠になつてはどうか」といふ同情で立机したのださうで、この話は故人蔦齋翁から私が直接聞いたのである。岱阿は俳號で文豪を開いてから東榮舎又花閒廬と稱し、樺柯の言の如く點料の収入で困窮を逃れることを得たが、天保十一年師樺柯が故人となつて願言が東杵庵を嗣號したので、厭でもその下風に立たなければならなくなり、それが不平で雪中庵對山の門に入つたと云はれてゐる。岱阿が願言に向ひ忍川巢連の號を使用したいと申入れ、それを拒絶されて雪門に轉じた説もあるが、天保十四年の歳旦で岱阿が同名の「霞袋」の標題を用ゐたものには、

酒買にゆけばうなづく柳かな

願言

この句を採つてゐるから願言と絶交した譯でなからう。年下の願言をかしらに頂くのが不愉快で對山門となつた方が本統らしい。對山は直ちに蓼太の別號で、宜麥から青蛾へ傳へた老鶯巢の號を岱阿に與へて一列判者としたが、對山が歿して何年か過ぎて推陰が雪中庵六世を相續したので、岱阿は當然宗家の支配を受ける事情で、推陰にあたまが上らないのを又不平に思ひ、願言に詫びを入れて忍川巢連に復歸したのである。雪門には雪蓑人といふ號がその後には現はれたが、それは岱阿が對山門に入る前、樺柯門の雪蓑人如鶴の名跡を嗣ぎ、一時雪蓑人と號した事があるので、雪門の入門牒に岱阿の門人岱巢の堂號として記されたが、岱阿が再び忍川巢連に入るとき、そのまゝ老鶯巢の號と共に雪門に置殘して來たのだ。復歸後の岱阿は同門の折合ひから遂に大阪へ行き、そこで二柳の系統である不二庵を名乗つてゐたが、明治十四年一月五日大阪で老死した、享年八十。岱阿の句は願言程の特徴はなく多はく月並調である。

天保甲辰歳旦

花閒廬岱阿

うつくしき行儀や屠蘇のうけこたへ

願言に張合つて出した「霞袋」のこれが巻頭句である。又、

混亂した俳號の授受と岱阿

梅が香や甌こかせし軒の月

梅柯在世の『霞袋』に載するこの句などが素直にやゝ厭味のないもので、

飼鳥のいやしう成し春日かな

歸る家のありて懶し花の山

いよくの秋やはな火の崩れあと

負た碁の考ついで雪の風呂

岡見せん先梅どころはな所

理屈に涉らなければ、平凡な嫌ひをまぬかれない事を意識して、春になれば野に山に囀る鳥を思ひくらべて、籠に飼はるゝ鳥を卑しむのも理屈であれば、花を見て家に歸るのが懶く、瞬間美の花火に秋を覚え、雪の風呂に碁の工夫や、岡見の梅やさくらの名所を配したり月並奥の紛々たるものがある。

岱阿の花開廬は門人の蓮阿が二世となり、蓮阿は野田氏、明治十五年に歿したので、潤阿がその三世を承けたと聞くがその後は知れない。岱阿が雪蓑人の號を雪門に置去りにした事に就い

て、故宇貫は雪門の雪蓑人は岱阿と無關係だと主張したさうであるが、宇貫が雀志翁の後に雪中庵十一世となる以前、永く雪蓑人を號したのだから、その説を否定したのだらうけれど、岱阿の『霞袋』には

宿のはる門萬歳に覗れし

梅が香の幹を離れぬ曇り哉

海苔簾朶に迄も寄るよとしの波

二世雪蓑人岱巢

とあるので、彼の門人に雪蓑人の號を呼ばせてゐたのは事實である。岱阿の前に雪蓑人を梅柯から興へられた如鶴は、梅柯の『霞袋』に

蒼天

元日もはや晝過ぬ日の鼠

雪蓑人
如鶴

かう明瞭に出てゐるのでこれも否めない。但し如鶴——岱阿——岱巢となるから、岱巢は三世とある可きで、前記の如く岱巢が二世となつてゐるのは不審であらねばならぬ。一方老鶯巢は雀

混乱した俳號の授受と岱阿

三七五

志翁まで左の順序で相續されてゐる。

老鶯巢 一世 蓼太 二世 宜麥 三世 青蛾 四世 岱阿 五世 雀志

白雄に親炙した事ある千分

『芭蕉句選年考』の著者積翠が壇那となつて再興された泊船寺の芭蕉堂に關し、唯一の文獻である『鮫洲抄』天保十一年刊の解説で一言した春秋庵千分は碩布の門人である。千分は寛政時代から俳諧にこゝろを染めたやうで、その編『五窓集』天保十四年刊に

新居のこゝろを

松植ん心子の日にかよふかな

春秋庵白雄

古白雄の筆蹟を摹して卷頭に掲げ、附記に「こは白雄の翁、五窓樓に旅寢のむかしものし給ひしを菴中に愛傳ふる一葉也。いま幸に臨書して小集の序に換る由を千分自白」とあるので、白雄の生存した寛政三年前、その門に遊んでゐたと見做してよい。岡崎氏、名は環、維新前は麻布一

本松に居住したが、白雄亡き後は春秋庵四世の正統者碩布に隨ひ、天保十四年正月元旦より碩布の譲りを受けて五窓樓の二世を名乗り、

先師如毛翁の號を讓られ、文臺一脚のあるじたるは嗚呼なるわざながら、
ことし卯の元旦より五窓樓の二世を嗣て

開たれば窓へも覗く禮者哉 千分

蝶のきげんも見ゆる朝 三千子

水淀に落る椿の流來て 護物

必る鐘子のきよき音する 見外

有明も夜興もどりの二人連 物

雲きれくにつのる風 分

歌仙の表を抄した右の詞書に先師如毛翁と云へるが碩布で先師とあるから當時は護物門であつたかも知れない。『五窓集』には

植込をのがれたげなる椿かな 九十一翁 碩布

混亂した俳號の授受と岱阿

とあつて類齡、且つ武州毛呂に隠居してゐたから、文臺開きにも出席しなかつたのらしい。千分は東京時代となつても依然俳諧の宗匠をつゞけ、五明の『現存撰句百家集』明治十年刊には住所を京橋南八丁堀一丁目と記してあるが、本郷の大學前で頓死し、その葬儀の最中に突然息を吹返した上、

七 轉 八 起 の あ さ や 初 松 魚

と自賀し、それから二三年も生延びて明治十六年の月日は不詳であるが、『俳諧明倫雜誌』の報ずるところでは享年八十餘で物故したさうである。千分の句境はその作を多く吟味した譯でないので、惟草編『俳諧人名錄初編』天保七年刊の自選句四章を掲げたので見ると、

東都芝山下 屋敷麻布一 本松住 岡崎 環	春 秋 樓 千 分 虎杖もまだ二葉なり二日月 降中にふりもまぎれず虎ヶ雨 田の出来も凡のしれてけふの月 岡兩を相手に焚や霜の柴
-------------------------------	---

これでは白雄の遺響があるとは義理にも云へない。蓋し時流に卷込まれて關東正風も墮落して行つたと同じ経路を辿つたのであう。『選句千百家集』は新東京時代——明治となつてからの千

分好みの句調を評して「句作優美第一にして名所、神祇、人名、すべて寂葉り調ふて吟ずるに難ンなきを是とす、中七文字や切れもつともよし」と云つてゐるが、軸として頭書した千分の句が「幾春も古きを捨ぬ御慶かな」であるから寂葉を論ずる資格はない筈である。『俳家人名錄初編』によると千分の妻女も俳句を愛して

人 影 に 曉 う つ る さ く ら かな 錦 子

斯てこそありがたき代や菖蒲太刀

螢が家もともし燈はやしはつ月夜

兄弟が男の子なり雪まるけ

四季の中で春季のさくらが、巧まずしてその情趣をたもつてゐるのを見る。それに千分の嫡男も利器丸と號して少年俳人であつた。

はなに鳥繪も習ひたくおもひけり 利器丸

月夜にも闇にも待てほとゝぎす

虹の根はついそこらなり昇る月

清亂した俳號の授受と尙阿

垣一重外は通りよ歸ばな

『萬家人名録』に肖像のある七才の少年鞍丸の才とは比較すべくもないが、利器丸の名からして利發さうな少年に思へるが、成人して凡庸の人間となつたのであらうか、千分の句はたま／＼見受けるが、利器丸又はその改號したものと思はるゝ句には接しない。

千分の事蹟でよく知れないのは花の本靜正との關係である。『鮫洲抄』の再刷本は千分が生存した時にできたのだから、靜正が勝手に再刷したのでなからうが、補校者に靜正の名を舉げてゐるその内面の事情が解ればと思つて、いろ／＼調べたが遂に手かゞりを得なかつた。

開化風俗を反映せる連句

泰西の詩想を日本の傳統的詩歌の手法によらないで、漢語的に表現しやうとした『新體詩抄』は明治十五年刊行されたが、俳壇にはそれが全く無影響であつたし、又、新體詩人も詞藻を和歌の上にこそ求めたが、譯詩として寧ろこの方が緊切である俳句の技巧を顧みようとしなかつた。俳句が文壇人の意識に上り、來るべき革新運動の口火となつたのは硯友社及びその『我樂多文庫』以後である。さうして新聞が文學としてゞなく讀者を獲得する爲めに、俳句を募集し掲載したことが俳句を一般に認識せしむるに與つて力があつた。明治十九年報知新聞が懸賞發句を其角堂永機を選者として課題的に募つたのが、俳句を社會的に紹介する第一着手であつた。明治十八、九年よりの明治俳諧はこの意味で文學的啓蒙期に入つたものと見てよい。その上新人の出現はまだ／＼待望されなかつたけれど、俳系的の闕を構へてゐた老俳の中で春湖は明治十九年に逝き、『俳諧新聞誌』を創刊した乙彦も同じ年に、等裁は少し後れて二十三年故人となつた。機一が二十年